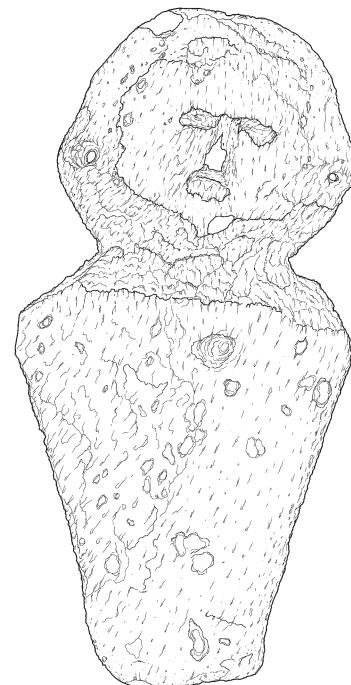


鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(195)

県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口貞徳コレクション発掘調査報告書(1)

やまのくち  
山ノ口 遺跡  
(錦江町馬場)



2018年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

卷頭図版1 山ノ口遺跡出土主要遺物集合写真





卷頭図版3 C地点・D地点（錦江町所蔵）遺物集合写真



①C地点出土遺物 ②錦江町所蔵（D地点出土主体）土器 ③錦江町所蔵（D地点出土主体）軽石製品



## 序 文

この報告書は、文化庁の補助金を受け実施した県内遺跡発掘調査等事業のうち、本県で「河口コレクション整理活用事業」と呼称する事業に伴い、平成28年度～29年度に整理作業を行った肝属郡錦江町馬場に所在する山ノ口遺跡の発掘調査の記録です。

故河口貞徳氏は、昭和20年代から鹿児島県内の学術的な調査を行い、長年に渡り鹿児島県考古学会会長や鹿児島県文化財保護審議委員として、本県の文化財の保護に尽力されました。

河口氏が発掘・収集された資料は、御遺族の厚意により、鹿児島県立埋蔵文化財センターへ一括寄贈されたところです。このうち、学史的に著名で、全国に知られている遺跡・遺物については、早急に整理して全国に発信し、活用を図る必要があります。そのため、当センターでは寄贈された資料の整理を計画的に進めながら、学術的な再評価を行っています。

今回報告する山ノ口遺跡では、昭和33年～36年に河口氏が主体となって、発掘調査が実施されました。南九州の弥生時代中期を代表する標式遺跡であるとともに、環状の配石遺構の周囲に岩偶などの軽石製品や孔が開けられた多数の土器などが出土した祭祀遺跡として学史的にも著名です。

本報告書が県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に調査に当たり御協力いただいた錦江町教育委員会、鹿児島県歴史資料センター黎明館及び関係各機関の方々に厚くお礼申し上げます。

平成30年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所長 堂 込 秀人

# 報 告 書 抄 錄

ふりがな	やまのくちいせき
書名	山ノ口遺跡
副書名	県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口貞徳コレクション発掘調査報告書（1）
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第195表
編著者名	今村 結記
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811
発行年月日	西暦2018年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	発掘原因		
		市町村	遺跡 番号							
やまのくち 山ノ口 遺 跡	鹿児島県 肝属郡 錦江町馬場	46490	10	31° 13' 55"	130° 46' 16"	第1次調査 19581225~ 19590104	130	記録保存 調査		
						第2次調査 19600405~ 19600407	56			
						第3時調査 19610505~ 19610507	120			
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項		
山ノ口遺跡	祭祀	弥生時代中期		配石遺構		山ノ口式土器・須 玖式土器・軽石製 品・磨製石鏃		山ノ口式土器の標 式遺跡		

鹿児島湾に面する海岸砂丘地に形成された弥生時代中期後半を中心とした祭祀遺跡である。当時海岸の砂浜であった本遺跡で、海岸線に沿って幅20m、長さ60mの範囲に軽石を円形に並べた配石遺構が9基検出された。

配石遺構に伴って出土した土器群や岩偶をはじめとした軽石製品は、当時の精神文化を知る一級資料である。また、出土土器の大半が南九州を代表する弥生時代中期土器様式である山ノ口式土器であり、その標式資料としても極めて重要である。さらに、出土した土器の中には、開聞岳起源の暗紫ゴラ（約2,100年前）が器表面に固着したものもある。これらは山ノ口式土器の年代を決定する資料であるとともに、山ノ口式土器と共に伴関係を示す土器型式の年代決定にも重要な役割を果たすものである。

今回の整理作業で、これまで未発表であった写真や記録が公表され、新たな現場図面や遺物の実測図が図化されたことは、山ノ口遺跡の再評価に寄与するものと思われる。



山ノ口遺跡位置図 (1 : 50,000)

# 例　言

- 1 本書は、鹿児島県が文化庁の補助を受け、平成28・29年度に実施した県内遺跡発掘調査等事業のうち、本県で「河口コレクション整理活用事業」と呼称する事業に伴う山ノ口遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 山ノ口遺跡は鹿児島県肝属郡錦江町馬場に所在する。
- 3 報告書作成（整理作業）は、鹿児島県教育委員会が調査主体者となり、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は河口貞徳氏が発掘責任者となり、昭和33年12月25日～昭和34年1月4日（第1次調査）、昭和35年4月5日～7日（第2次調査）、昭和36年5月5日～7日（第3次調査）に実施し、整理・報告書作成作業は平成26～28年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 揭載遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。
- 6 新たな遺物注記は行っていない。
- 7 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 8 本書で使用した方位は原図のまま図化した。磁北と思われる。
- 9 遺構図等の作成及びトレースは今村結記が整理作業員の協力を得て行った。
- 10 出土遺物の実測・トレースは、今村が作業員の協力を得て行った。遺物の実測の一部は、株式会社九州文化財研究所に委託した。
- 11 出土遺物の写真撮影は、吉岡康弘が行った。
- 12 本書の編集は今村が担当した。執筆の分担は次のとおりである。

第Ⅰ章	.....	今村
第Ⅱ章 第1節	.....	今村
第2節 1	.....	前迫亮一
第2節 2	.....	大久保浩二
第Ⅲ～V章	.....	今村
- 13 附編として、以下の報告を再録した。再録に当たっては、立正大学より本報告書への掲載の許可を頂いた。

河口貞徳 1960 「山ノ口遺跡」『鹿児島県文化財報告書』第7集 鹿児島県教育委員会

河口貞徳 1962 「山ノ口遺跡」『立正考古』第21号 立正大学考古学研究会
- 14 本書に係る出土遺物及び実測図、写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示活用を図る予定である。なお、出土遺物の一部は鹿児島県歴史資料センター黎明館、錦江町教育委員会にも所蔵されている。

# 凡 例

1 観察表の表記凡例は次のとおりである。

(1) 土器の「法量」において、括弧内に記載している数値は復元径の値、石器・石製品の「法量」において括弧内に記載している数値は残存長の値である。

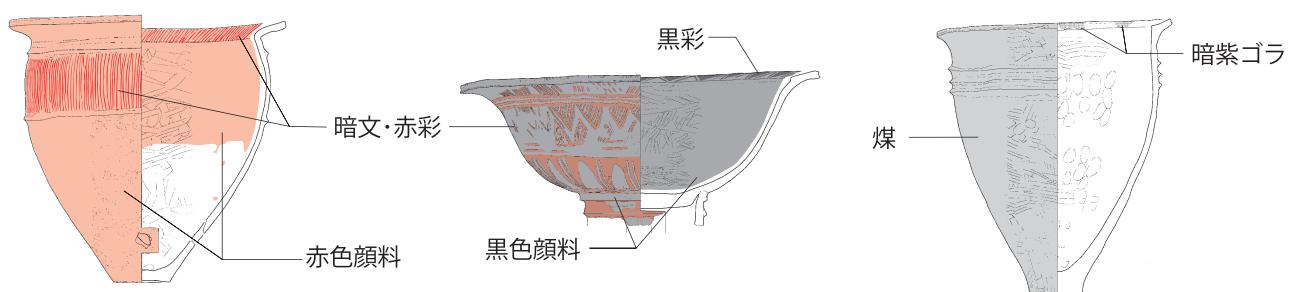
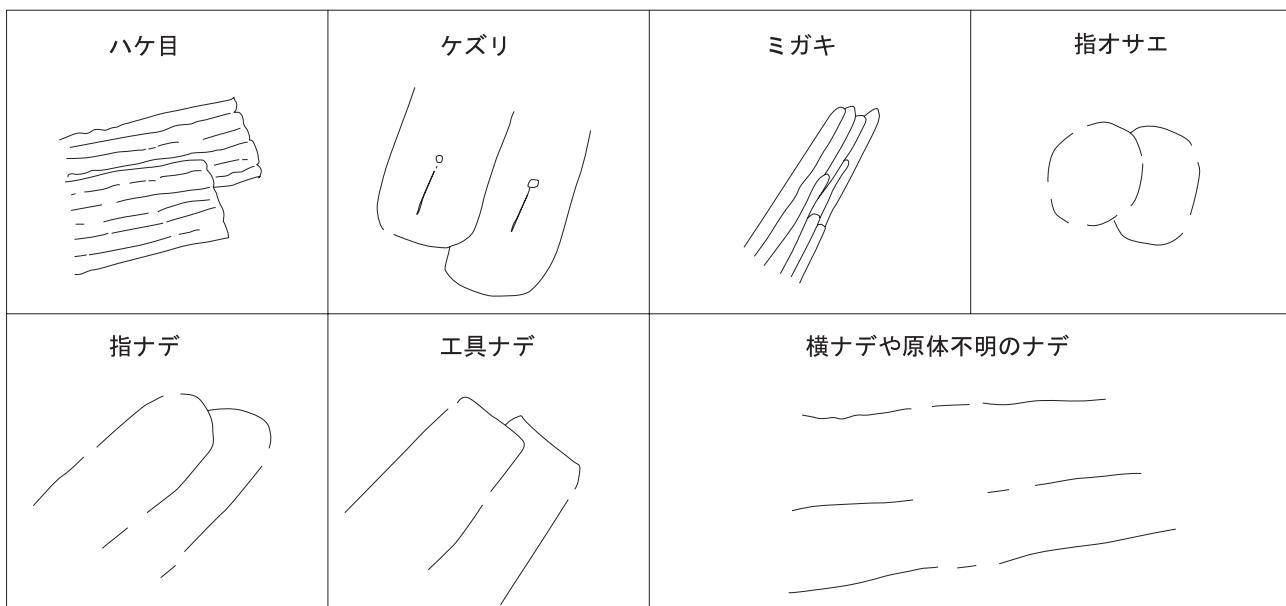
(2) 「胎土」における記号の表現は次のとおりである。

□…微量含む	△…少量含む
○…含む	◎…多量含む

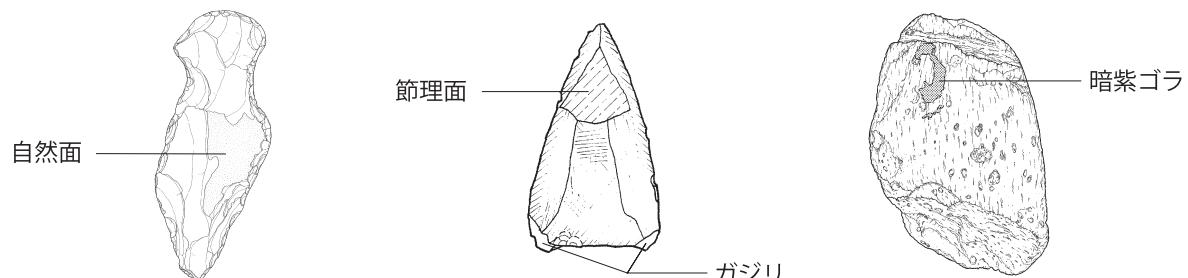
(3) 「河口邸保管場所」は第3図で示した場所と対応する。

2 使用した土色は『新版標準土色帖』に基づく。

3 本書で用いた土器の表現は次のとおりである。



4 本書で用いた石器の表現は次のとおりである。



# 目 次

巻頭図版

序文

報告書抄録

例言・凡例

## 第Ⅰ章 事業の経緯と経過

第1節 事業の経緯と事業内容	1
第2節 整理・報告書作成業務	2
第3節 再整理の方法及び報告書の構成	2

## 第Ⅱ章 河口貞徳コレクションの概要

第1節 河口貞徳氏の業績	3
第2節 寄贈されたコレクションの概要	6

## 第Ⅲ章 山ノ口遺跡の再検討

第1節 遺跡の現状	13
第2節 現場図面の追加資料	13
第3節 遺物の追加資料及び再実測	21

## 第Ⅳ章 山ノ口遺跡の再評価

第1節 山ノ口遺跡に関する研究史	61
第2節 山ノ口式土器に関する研究史	62
第3節 山ノ口遺跡の現代的評価	63

## 第Ⅴ章 総括

第1節 出土遺物の検討	65
第2節 遺跡の性格の検討	67

## 附編 旧報告の再録

1 『鹿児島県文化財報告書』第7集	69
2 『立正考古』第21号	97

写真図版	103
------	-----

## 挿図目次

山ノ口遺跡位置図（1：50,000）

- 第1図 河口邸収蔵品収納状況写真 ..... 6  
第2図 河口邸収蔵品収納状況・搬出状況等写真 ..... 7  
第3図 河口邸収蔵品収納状況図 ..... 8  
第4図 河口コレクション整理・収納状況写真① ..... 10  
第5図 河口コレクション整理・収納状況写真② ..... 11  
第6図 河口コレクション整理・収納状況写真③ ..... 12  
第7図 山ノ口遺跡の現況 ..... 13  
第8図 山ノ口遺跡年度別調査地点位置図 ..... 14  
第9図 B地点遺構配置図及び遺物出土状況図① ..... 15  
第10図 B地点遺構配置図及び遺物出土状況図② ..... 16  
第11図 C地点遺構配置図及び遺物出土状況図 ..... 17  
第12図 C地点軽石製品出土状況メモ ..... 18  
第13図 C地点軽石製品出土状況写真 ..... 18  
第14図 A地点とC地点の間で検出された軽石集積地  
置図メモ ..... 18  
第15図 D地点遺構配置図及び遺物出土状況図① ..... 19  
第16図 D地点遺構配置図及び遺物出土状況図② ..... 20  
第17図 B地点出土土器実測図① ..... 22  
第18図 B地点出土土器実測図② ..... 23  
第19図 B地点出土土器実測図③ ..... 24  
第20図 B地点出土土器実測図④ ..... 25  
第21図 B地点出土土器実測図⑤ ..... 26  
第22図 B地点出土石器・石製品実測図① ..... 27  
第23図 B地点出土石器・石製品実測図② ..... 28  
第24図 B地点出土石器・石製品実測図③ ..... 29  
第25図 B地点出土石器・石製品実測図④ ..... 30  
第26図 C地点出土土器実測図① ..... 32  
第27図 C地点出土土器実測図② ..... 33  
第28図 C地点出土土器実測図③及び石器・石製品実測

- 図① ..... 34  
第29図 C地点出土石器・石製品実測図② ..... 35  
第30図 D地点出土土器（錦江町所蔵）実測図① ..... 37  
第31図 D地点出土土器（錦江町所蔵）実測図② ..... 38  
第32図 D地点出土土器（錦江町所蔵）実測図③ ..... 39  
第33図 D地点出土石器・石製品（錦江町所蔵）実測図  
① ..... 40  
第34図 D地点出土石器・石製品（錦江町所蔵）実測図  
② ..... 41  
第35図 D地点出土石器・石製品（錦江町所蔵）実測図  
③ ..... 42  
第36図 A地点下層出土土器実測図 ..... 44  
第37図 A地点上層出土土器実測図① ..... 45  
第38図 A地点上層出土土器実測図② ..... 46  
第39図 A地点上層出土土器実測図③ ..... 47  
第40図 A地点上層出土土器実測図④ ..... 48  
第41図 A地点上層出土石器・石製品実測図① ..... 49  
第42図 A地点上層出土石器・石製品実測図② ..... 50  
第43図 A地点上層出土石器・石製品実測図③ ..... 51  
第44図 その他地点及び出土地不明遺物実測図① ..... 52  
第45図 その他地点及び出土地不明遺物実測図② ..... 53  
第46図 その他地点及び出土地不明遺物実測図③ ..... 54  
第47図 南部九州の弥生時代中期土器様式の動態（中園  
2004を再トレース） ..... 64  
第48図 新・旧遺物実測図の比較 ..... 64  
第49図 山ノ口遺跡出土土器変遷図 ..... 66  
第50図 土器の埋没過程想定図 ..... 68  
第51図 弥生時代中期後葉の土器群の諸要素 ..... 68

## 図版目次

卷頭図版1 山ノ口遺跡出土主要遺物集合写真	
卷頭図版2 B地点出土遺物集合写真	
卷頭図版3 C地点・D地点（錦江町所蔵）遺物集合写真	
図版1 山ノ口遺跡調査地点遠景	103
図版2 B地点調査状況①	104
図版3 B地点調査状況②	105
図版4 B地点遺物出土状況①	106
図版5 B地点遺物出土状況②	107
図版6 C地点環状配石検出状況①	108
図版7 C地点環状配石検出状況②	109
図版8 C地点遺物出土状況	110
図版9 D地点環状配石検出状況及び遺物出土状況	111
図版10 昭和36年砂鉄採掘地遺構検出状況・遺物出土状況及び調査状況	112
図版11 山ノ口遺跡出土遺物①	113
図版12 山ノ口遺跡出土遺物②	114
図版13 山ノ口遺跡出土遺物③	115
図版14 山ノ口遺跡出土遺物④	116
図版15 山ノ口遺跡出土遺物⑤	117
図版16 山ノ口遺跡出土遺物⑥	118
図版17 山ノ口遺跡出土遺物⑦	119
図版18 山ノ口遺跡出土遺物⑧	120
図版19 山ノ口遺跡出土遺物⑨	121
図版20 山ノ口遺跡出土遺物⑩	122
図版21 山ノ口遺跡出土遺物⑪	123
図版22 山ノ口遺跡出土遺物⑫	124
図版23 山ノ口遺跡出土遺物⑬	125
図版24 山ノ口遺跡出土遺物⑭	126

## 表目次

第1表 平成24年度～29年度における「河口コレクション」整理作業状況	1
第2表 河口貞徳氏発掘調査歴一覧表①	3
第3表 河口貞徳氏発掘調査歴一覧表②	4
第4表 河口貞徳氏発掘調査歴一覧表③	5
第5表 山ノ口遺跡出土土器観察表①	55
第6表 山ノ口遺跡出土土器観察表②	56
第7表 山ノ口遺跡出土土器観察表③	57
第8表 山ノ口遺跡出土土器観察表④	58
第9表 山ノ口遺跡出土石器・石製品計測表①	59
第10表 山ノ口遺跡出土石器・石製品計測表②	60
第11表 山ノ口遺跡上層出土土器を標式とする土器型式の名称と時期比定	64

## 第Ⅰ章 事業の経緯と経過

## 第1節 事業の経緯と事業内容

故河口貞徳氏は、昭和46年～平成23年まで長年にわたり鹿児島県考古学会会長として、本県考古学の発展に寄与するとともに、昭和28年～平成7年まで鹿児島県文化財保護審議委員として、本県文化財の保護に尽力した人物である。河口氏は、昭和20年代から県内の学術的な発掘調査を行っており、同氏所有の遺物等の資料（以下、「河口コレクション」とする）を、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」とする）が遺族から寄付受納することになった。

埋文センターに寄贈されることが決定された後の、作業内容等は、第1表に示すとおりである。まず、平成24年度～26年度にかけて、緊急雇用創出事業臨時特例基金事業を活用し、河口コレクションとして寄贈された資料の受け入れ、収蔵された資料の整理や基礎データの作成、展示・公開や今回報告する山ノ口遺跡等重要遺物の整理作業などを一部実施した。

平成27年度は、国庫補助事業の「県内埋蔵文化財地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」に伴い、河口コレクションの台帳整理や関連文献の収集のほか、「かごしま遺跡

「フォーラム2015」を実施し、河口コレクションの一部成果をパネル展示した。平成28年度から、国庫補助事業の「県内遺跡事前調査等事業」の中で、「河口コレクション整理作業事業」と称して実施し、台帳等基礎整理作業に加え、総合的な整理・報告がなされていない重要遺跡について順次、将来的に保存・活用を図るため、今日的視点での整理を行っている。

今回、報告する山ノ口遺跡は、肝属郡錦江町馬場に所在する。昭和33年5月頃、砂鉄の採掘がきっかけで、遺跡が発見された。遺跡滅失の恐れがあったため、河口氏らにより、昭和33年12月～昭和34年1月に第1次調査、昭和35年4月に第2次調査、昭和36年5月に第3次調査が実施された。山ノ口遺跡は、弥生時代の円形の配石遺構が検出されたほか、完形の弥生土器や軽石製品、磨製石鏸等が多数出土した祭祀遺跡として知られる。また、弥生時代の南九州の土器型式である「山ノ口式土器」の標式遺跡としても著名である。平成27年には、埋文センター及び鹿児島県歴史資料センター黎明館、錦江町教育委員会に所蔵されている山ノ口遺跡出土遺物146点が県指定文化財に指定されている。

第1表 平成24年度～29年度における「河口コレクション」整理作業状況

種別	作業内容等	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	備考
寄贈資料の受入作業	内容の確認と分類及び埋文センターへの搬入							終了（H24年12月寄贈。その後、数回に分けて搬入作業実施）
	内容ごとの収蔵・保管							
寄贈資料 （考古（調査））資料	遺物	水洗						脆弱な遺物が若干残る
		注記・接合・復元						
		実測図作成						
		写真撮影	主要遺物のみ			報告書刊行用の遺物撮影		
	図面類	発掘調査記録（現場図面等）の点検・修復						基礎作業終了
		発掘調査日誌類（調査の基礎情報）の整理						
	写真	クリーニング・修復						寄贈写真資料の整理はほぼ終了
		遺跡ごとのファイリング						
		公開用写真のデータベース化						
		フィルム写真のデジタル化						
	書籍	分類・選別						
		河口文庫（重要書籍）設置						図書室に「河口文庫」コーナー設置
		考古関係論文（抜刷）資料の整理						
	地形図類	分類・修復・リスト作成						寄贈地形図類の整理は終了
発掘調査報告（原稿）作成							出入口通路	平成29年度から報告書刊行
公開活用	展示公開（縄文の森企画展・外部への貸出等）							講演会・シンポ等の開催も含む
	重要遺物のレプリカ作成							重要遺物の保護
事業名等	緊急雇用:埋蔵文化財活用整理等事業							
	緊急雇用:重要遺物等選択・公開事業							
	緊急雇用:重要遺跡調査整理事業							
	国庫補助:県内埋蔵文化財地域の特色ある埋蔵文化財活用事業							
	国庫補助:県内遺跡事前調査等事業							

## 第2節 整理・報告書作成業務

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は主に平成28年4月～平成30年2月にかけて埋文センターで行った。寄贈された遺物と既報告分の遺物の照合作業や遺物の再実測・トレース、未報告の現場図面のトレース、レイアウト等の編集作業を行った。

整理・報告書作成業務に関する調査体制は以下のとおりである。

### 平成28年度調査体制（整理作業）

事業主体 鹿児島県

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 福山 徳治

調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター

次長 兼 調査課長 前迫 亮一

総務課長 高田 浩

調査課第二調査係長 今村 敏照

調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

文化財研究員（9月まで） 今村 結記

文化財主事（10月から） 今村 結記

事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

主事 丸野 将輝

調査指導 鹿児島県考古学会

副会長 池畠 耕一

鹿児島大学

名誉教授 上村 俊雄

鹿児島県考古学会

会員 出口 浩

鹿児島県考古学会

会長 本田 道輝

文化庁文化財部記念物課

文化財調査官 水ノ江和同

### 平成29年度調査体制（整理・報告書作成作業）

事業主体 鹿児島県

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 堂込 秀人

調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター

次長 兼 調査課長 大久保浩二

総務課長 高田 浩

調査課第二調査係長 宗岡 克英

調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

文化財主事 今村 結記

事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

主事 丸野 将輝

調査指導 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

特任助教 寒川 朋枝

鹿児島国際大学

教授 中園 智

鹿児島県考古学会

会員 長野 真一

鹿児島県考古学会

会長 本田 道輝

文化庁文化財部記念物課

文化財調査官 水ノ江和同

報告書作成指導委員会 平成29年11月28日

大久保次長ほか6名

報告書作成検討委員会 平成30年1月5日

堂込所長ほか6名

## 第3節 再整理の方法及び報告書の構成

第Ⅱ章以下、本報告書で山ノ口遺跡について再報告する方法について説明する。

第Ⅱ章では、「河口貞徳コレクションの概要」として、河口貞徳氏の業績や寄贈の経緯、寄贈されたコレクションの概要について述べる。

第Ⅲ章では、「山ノ口遺跡の再検討」として、山ノ口遺跡の現状や未報告の現場図面等の掲載、未報告の遺物の掲載、既報告の遺物の再実測の掲載やこれらの説明を行う。なお、山ノ口遺跡出土遺物の抽出にあたっては、注記や遺物カード（荷札）の確認のほか、既報告の遺物実測図や掲載写真との照合、現場図面や現場写真との照合等を行った。遺物の実測・再実測は、河口コレクションだけではなく、鹿児島県歴史資料センター黎明館及び錦江町教育委員会所蔵の山ノ口遺跡出土品も対象とした。

第Ⅳ章では、「山ノ口遺跡の再評価」として、山ノ口遺跡の性格に関する研究史や山ノ口式土器に関する研究史についてまとめ、山ノ口遺跡の現代的評価について述べていきたい。

第Ⅴ章で、「総括」として、第Ⅲ章・第Ⅳ章の成果をもとに、改めて山ノ口遺跡について検討を行う。

図版では、未報告の現場写真のほか、再撮影した遺物写真等を掲載している。

なお、山ノ口遺跡の主たる報告は、『鹿児島県文化財報告書』第7集、『古代学』第9卷第3号、『立正考古』第21号でなされている。このうち、『鹿児島県文化財報告書』第7集と『古代学』第9卷第3号の内容はほぼ同一であるため、今回附編として『鹿児島県文化財報告書』第7集と『立正考古』第21号で報告された内容を再録した（以下、「旧報告」とする）。再録に当たっては、立正大学より掲載の許可を頂いた。

## 第Ⅱ章 河口貞徳コレクションの概要

### 第1節 河口貞徳氏の業績

故河口貞徳氏は、本県のみならず、わが国の考古学の基礎を築いてきた先駆として、全国的にも著名な考古学者である。以下、河口氏の経歴や業績などの略譜や発掘調査歴について触れたい。

#### 1 河口貞徳氏の略譜

1909（明治42）年	鹿児島市で誕生
1933（昭和8）年	鹿児島県第一師範学校専攻科卒業
1942（昭和17）年	立正大学専門部歴史地理科卒業
1948（昭和23）年	公立高等学校教諭 （～1967年）
1949（昭和24）年	寺師見国・三友国五郎氏等と鹿児島県考古学会創立

1952（昭和27）年	日本考古学協会員
1953（昭和28）年	鹿児島県文化財専門委員 （～1972年）
1961（昭和36）年	鹿児島大学非常勤講師 （～1985年）
1966（昭和41）年	南日本文化賞（南日本新聞社）
1970（昭和45）年	文化財功労者（文化庁）
1971（昭和46）年	鹿児島県考古学会会長 （～2011年）
1979（昭和54）年	勲五等雙光旭日賞
2011（平成23）年	101歳で逝去

#### 2 発掘調査歴

管見の限り、確認できた範囲の河口氏の発掘調査歴を第2表に示す。

第2表 河口貞徳氏発掘調査歴一覧表①

調査年	調査月	遺跡名 (調査・報告時の名称)	所在地	備考
1949(昭和24)年	9・11月	笹貫遺跡	鹿児島市上福元町笹貫湯賄迫	寺師見国・三友国五郎氏との調査
	12月	千束遺跡	南大隅町根占川北千束	
1950(昭和25)年	1月	大野遺跡	南さつま市金峰町大野南原	坪井清足・寺師見国・三友国五郎氏との調査、現「南原A遺跡」
	4・5月	中津野遺跡	南さつま市金峰町中津野	
	6月	祓川地下式横穴墓	鹿屋市西祓川町井ノ上	
	7月	一の宮遺跡	鹿児島市郡元二丁目一之宮神社境内	現「一之宮遺跡（A地点）」
	12月	市来貝塚	いちき串木野市川上中組	現「川上（市来）貝塚」
	12月	千束遺跡	南大隅町根占川北千束	三友国五郎氏との調査
	12月	岩崎遺跡	錦江町田代麓菅原神社北	
	4月	県立医大遺跡	鹿児島市郡元一丁目鹿大構内	現「鹿大構内遺跡（郡元団地遺跡群）」
1951(昭和26)年	6・8月	若宮遺跡	鹿児島市池之上町若宮神社境内	現「大龍遺跡群（若宮）」
	7月	草野貝塚	鹿児島市下福元町草野賀呂	
	3月	前平遺跡	鹿児島市吉野町雀宮前平	
1952(昭和27)年	4月	木ヶ暮遺跡	鹿児島市西別府町木ヶ暮	
	5・9月	春日町遺跡	鹿児島市春日町	現「大龍遺跡群（春日）」
	5月	黒川洞穴	日置市吹上町坊野黒川	
	6月	東昌寺遺跡	鹿児島市直木町宮田岡	
	8月	本城遺跡	西之表市榕城松島	三友国五郎・国分直一氏との調査
	8月	一湊遺跡	屋久島町一湊松山	三友国五郎・国分直一氏との調査 現「一湊松山遺跡」
	12月	大原遺跡	鹿児島市本名町大原茱萸木迫	
	5月	牧遺跡	鹿児島市宮之浦町牟礼谷の牧	現「牧古墓」
1953(昭和28)年	7月	石坂上遺跡	南九州市知覧町永里石坂ノ上	
	8月	城ノ平遺跡	屋久島町口永良部島城ノ平	三友国五郎・国分直一氏らとの調査
	8月	大原遺跡	鹿児島市本名町大原茱萸木迫	
	11月	春日町遺跡	鹿児島市春日町5番地	現「大龍遺跡群（春日）」
	12月	出水貝塚	出水市中央町尾崎	村田重幸氏との調査
	5月	宇宿貝塚	奄美市笠利町宇宿字大道	
1954(昭和29)年	5月	兼久貝塚	伊仙町面繩兼久バル	現「面繩第三貝塚（兼久貝塚）」
	5月	畦布遺跡	和泊町畦布字伊延原	現「畦布ナーバンタ遺跡」
	7月	出水貝塚	出水市中央町尾崎	山内清男・村田重幸氏らとの調査
	12月	永野遺跡	南九州市知覧町東別府永野弥六・永野白石原	

第3表 河口貞徳氏発掘調査歴一覧表②

調査年	調査月	遺跡名 (調査・報告時の名称)	所在地	備考
1955(昭和30)年	7月	宇宿貝塚	奄美市笠利町宇宿字大道	国分直一・曾野壽彦・野口義磨氏らとの調査(九学会連合奄美大島共同調査委員会)
	8月	和田前遺跡	南九州市知覧町永里和田前	
1956(昭和31)年	5月	折尾遺跡	南九州市額娃町上別府折尾	
	7月	下郡遺跡	南九州市知覧町郡射手園	現「射手園遺跡」
	8月	面繩第二貝塚・第四貝塚	伊仙町面繩兼久バル	国分直一・野口義磨・原口正三氏らとの調査(九学会連合奄美大島共同調査委員会)
	8月	喜念貝塚	伊仙町面繩兼久	国分直一・野口義磨・原口正三氏らとの調査(九学会連合奄美大島共同調査委員会)
	11月	南洲神社遺跡	鹿児島市上竜尾町南洲神社境内	
1957(昭和32)年	3・12月	大渡遺跡	指宿市十二町大渡	国分直一・河野治雄・重久十郎氏らとの調査
	5月	成川遺跡	指宿市山川成川曲道	河野治雄・重久十郎氏らとの調査
	8月	住吉貝塚	知名町住吉字兼久	九学会連合奄美大島共同調査委員会
	12月	大平遺跡	宮崎県串間市大平	
1958(昭和33)年	7月	成川遺跡	指宿市山川成川曲道	斎藤忠・八幡一郎・金闇丈夫・杉原莊介・国分直一・乙益重隆氏らとの調査(文化財保護委員会)
	9月	竜相地下式横穴調査	大崎町神領	現「神領地下式横穴1号(竜相地下式横穴)」
	12月	山ノ口遺跡	錦江町馬場山ノ口	
1959(昭和34)年	4月	南丹波遺跡	指宿市南丹波小牟礼原他	国分直一氏らとの調査
	8月	口輪野遺跡	霧島市国分川原口輪野	
	8月	城元遺跡	肝属郡大根占町	現「神之浜遺跡」
1960(昭和35)年	1月	鍋谷遺跡	姶良市平松字小瀬戸	現「鍋谷洞窟」
	4月	山ノ口遺跡	錦江町馬場山ノ口	
	8月	木場遺跡	湧水町栗野馬場迫	現「馬場追遺跡」
	12月	前田地下式横穴	肝付町前田上ノ原	現「上ノ原地下式横穴群」
1961(昭和36)年	1月	井手下遺跡	いちき串木野市井手下	
	3月	市来貝塚	いちき串木野市川上中組	現「川上(市来)貝塚」
	5月	山ノ口遺跡	錦江町馬場山ノ口	
	8月	浜坂貝塚	十島村宝島浜坂	三友国五郎氏との調査
1962(昭和37)年	2月	指江古墳	長島町指江	池水寛治氏との調査
	3月	麦ノ浦貝塚	薩摩川内市陽成町本川	
	8月	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	
	8月	境遺跡	垂水市牛根境小学校	
1963(昭和38)年	7月	鹿大附属中遺跡	鹿児島市郡元一丁目鹿大構内	現「鹿大構内遺跡(郡元団地遺跡群)」
	7月	入佐遺跡	曾於市末吉町諏訪入佐	
	8月	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	
1964(昭和39)年	8月	片野洞穴	志布志市志布志町内之倉字片野	
	8月	検見崎古墳	肝付町後田	現「検見崎遺跡」か?
	11月	黒川洞穴	日置市吹上町坊野黒川	八幡一郎・江坂輝弥氏らとの調査
	12月	横岡古墳	薩摩川内市上川内町横岡	
1965(昭和40)年	8月	黒川洞穴	日置市吹上町坊野黒川	
	8月	薩摩国府跡	薩摩川内市御陵下町・国分寺町	鹿児島県教育委員会の調査
1966(昭和41)年	3月	轟貝塚	熊本県宇土市宮庄町字須崎・居屋敷・池田	江坂輝弥氏らとの調査
	7月	鶴峯窯跡	薩摩川内市中郷町鶴峯	小田富士雄氏らとの調査
	8月	鳥ノ峯遺跡	中種子町増田中之町・鳥の峯	盛園尚孝・永井昌文氏らとの調査
	8月	石峰遺跡	霧島市溝辺町麓石峰	
1967(昭和42)年	3月	山ノ上遺跡	志布志市志布志町帖	
	7月	黒川洞穴	日置市吹上町坊野黒川	
	8月	片野洞穴	志布志市志布志町内之倉字片野	志布志町教育委員会の調査
	12月	薩摩国府跡	薩摩川内市御陵下町・国分寺町	鹿児島県教育委員会の調査
1968(昭和43)年	1月	天子ヶ丘古墳	大崎町神領	現「神領古墳群6号 天子ヶ丘古墳」
	3月	北手牧遺跡	南九州市額娃町上別府北手牧	河野治雄氏らとの調査
	8月	華熟里遺跡	日置市吹上町花熟里	

第4表 河口貞徳氏発掘調査歴一覧表③

調査年	調査月	遺跡名 (調査・報告時の名称)	所在地	備考
1968(昭和43)年	8月	薩摩国分寺跡	薩摩川内市国分寺町大都・下台	鹿児島県教育委員会の調査
	10月	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田	
	11月	木浦遺跡	枕崎市西鹿籠	
1969(昭和44)年	1月	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田	
	3月	別府古墳	さつま町永野	
	6月	御灰塚	南大隅町根占川南	根占町教育委員会の調査
	7月	入来遺跡	日置市吹上町入来	
	7月	薩摩国分寺跡	薩摩川内市国分寺町大都・下台	鹿児島県教育委員会の調査
	8月	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田	
	12月	朝仁貝塚	奄美市名瀬大字朝仁字前間	現「朝仁前間遺跡」
1970(昭和45)年	1月	入来遺跡	日置市吹上町入来	
	6月	北方地下式横穴	湧水町北方小屋敷	
	7月	空港予定地遺跡	霧島市溝辺町鹿児島空港内	鹿児島県教育委員会の調査、現「十三塚原第一・二地点」
	8月	薩摩国分寺跡	薩摩川内市国分寺町大都・下台	鹿児島県教育委員会の調査
	11月	鷺塚地下式横穴	大崎町永吉	大崎町教育委員会の調査
	12月	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田	加世田市教育委員会の調査
1971(昭和46)年	1月	堂前古墳	出水市高尾町紫引堂前	高尾町教育委員会の調査
	6・8月	平椿貝塚	霧島市国分上井	
	9月	小瀬戸遺跡	姶良市西餅田小瀬戸	鹿児島県教育委員会の調査
	11月	小山遺跡	鹿児島市宮之浦町字小山	鹿児島県教育委員会の調査
	12月	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田	加世田市教育委員会の調査
1972(昭和47)年	1月	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田	加世田市教育委員会の調査
	3月	上能野貝塚	西之表市住吉上能野	西之表市教育委員会の調査
	5月	上小原古墳群	鹿屋市串良町上小原	
	7月	玉利池遺跡	鹿児島市上荒田町	鹿児島県史跡調査会の調査 現「鹿大構内遺跡(郡元団地遺跡群)」
	8月	千束遺跡	南大隅町根占川北千束	弥生系高地性集落総合研究発掘調査
1973(昭和48)年	3月	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田	加世田市教育委員会の調査
	8月	永山古墳群	湧水町川西永山	
	10月	大原・宮薙遺跡	薩摩川内市下齋村手打	下齋村教育委員会の調査
1974(昭和49)年	8月	嘉徳遺跡	瀬戸内町嘉徳	瀬戸内町教育委員会の調査
1975(昭和50)年	4月	入来遺跡	日置市吹上町入来	
	8月	植平遺跡	薩摩川内市五代町植平	
	10月	石峰遺跡	霧島市溝辺町麓石峰	鹿児島県教育委員会の調査
	12月	白寿遺跡	日置市吹上町中之里	
1976(昭和51)年	3月	入来遺跡	日置市吹上町入来	東南アジアより見た日本古代墓制研究
	3月	上小原地下式横穴	鹿屋市串良町上小原	鹿児島県教育委員会の調査 現「上小原古墳群 1号地下式横穴墓」
	6月	下小路遺跡	南さつま市金峰町高橋下小路	
	11月	石峰遺跡	霧島市溝辺町麓石峰	鹿児島県教育委員会の調査
1977(昭和52)年	3月	石峰遺跡	霧島市溝辺町麓石峰	鹿児島県教育委員会の調査
	8月	サウチ遺跡	奄美市笠利町喜瀬字サウチ	笠利町教育委員会の調査
1978(昭和53)年	2・6・7月	中岳洞穴	曾於市末吉町南之郷市林	末吉町教育委員会の調査
	8月	宇宿貝塚	奄美市笠利町宇宿字大道	笠利町教育委員会の調査
	11月	白寿遺跡	日置市吹上町中之里	
1979(昭和54)年	3月	中岳洞穴	曾於市末吉町南之郷市林	末吉町教育委員会の調査
	8月	石峰遺跡	霧島市溝辺町麓石峰	
1980(昭和55)年	12月	東黒土田遺跡	志布志市志布志町内之倉	瀬戸内口望氏との調査
1981(昭和56)年	2月	鎌石橋遺跡	志布志市志布志町帖字前畑	鹿児島県考古学会の調査
	3月	草野貝塚	鹿児島市下福元町草野賀呂	鹿児島市教育委員会の調査
1982(昭和57)年	10月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	
1983(昭和58)年	9月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	知名町教育委員会の調査
	10月	廻城跡	霧島市福山町福山大廻	財団法人福山美術館の調査
1984(昭和59)年	8月	中甫洞穴	知名町志検字水窪	知名町教育委員会の調査

## 第2節 河口貞徳コレクションの概要

### 1 寄贈の経緯（第1・2図）

鹿児島県のみならず、日本の考古学研究に寄与すること計り知れないと評価された河口コレクションは、ご遺族の多大な御厚意・御配慮により、埋文センターへ寄贈されることとなった。ここでは、寄贈に至るまでの流れを簡潔に記すこととする。

- 平成23年1月10日 …… 河口貞徳氏ご逝去。
- 平成23年8月 …… 考古関係の収蔵資料について、ご遺族から県への一括寄贈の意思を確認。
- 平成23年9～12月 …… 河口邸において、書籍類を中心とした収蔵資料の仮リスト作成作業を実施。
- 平成24年1～2月 …… 河口邸において、遺物を中心とした実地調査・内容把握作業の実施。
- 平成24年3月12～14日 …… 第1次搬出作業：完形土器約60点、特殊遺物（金属製品等）、一般遺物収納コンテナ約250箱等について、美術専用車等（4t トラック3台分）を利用して、埋文センターへ運搬。
- 平成24年5月23～25日 …… 第2次搬出作業：完形土器約180点、特殊遺物（金属製品等）、一般遺物収蔵コンテナ約100箱、図面・地図等段ボール約50箱等について、美術専用車等（4t トラック2台・公用車等）を利用して、埋文センターへ運搬。
- 平成24年6月 …… 第3次搬出作業：書籍や書棚類を4t トラック1台で運搬。
- 平成24年7～11月 …… 寄贈品リストの詳細作成。
- 平成24年12月 …… 寄贈（寄付受納）の決定。  
寄贈申出者：《故河口貞徳氏のご遺族5名》袖山和子（長女）・菊池節子（次女）・河口徳男（長男）・河口彬（次男）・信國敏子（三女）
- 平成24年12月21日 …… 感謝状贈呈式（於：上野原縄文の森多目的ホール）において六反省一県教育長（当時）から袖山和子・菊池節子・河口彬の3氏に直



主屋の空き部屋を利用した書庫《B1》

接贈呈。

河口徳男・信國敏子の2名については送付贈呈。

○平成24年12月22日～平成25年3月31日 …… 上野原縄文の森第35回企画展「古代人の華麗な技」の中で寄贈された代表資料を展示公開。

### 2 寄贈品リスト作成について

寄贈品のリストを作成するにあたり、収蔵品が置かれていた原位置をなるべく記録することに努めた。保管・収蔵位置を示すため、第3図のような凡例を設定した。

収蔵品はおおむね敷地内に建てられた「収蔵庫」（A棟）と「主屋」（B棟）の2か所に分散して保管されていた。遺物の主たる収蔵・保管場所は「収蔵庫」で、書籍類は「収蔵庫」の2階と主屋であった。

「収蔵庫」の2階の北側が「書庫・書斎」（A21）、南側が「土器完形品他重要資料置場」（A22）、1階が「一般収蔵庫」（A1）として利用されていた。

なお、それぞれの場所・位置を記号化したが、大分類した6か所（①～⑥）の記号例については、それぞれの配置図下に示したとおりである。



収蔵庫2階（書庫・書斎）にあった机《A2118》



収蔵庫1階重要遺物棚《A101》

第1図 河口邸収蔵品収納状況写真



収蔵庫2階の土器完形品類収蔵状況《A21》



収蔵庫1階の遺物収納用コンテナ類収蔵状況《A117他》



収蔵庫1階の遺物収納用木箱類収蔵状況《A103他》



河口邸の外観《中央樹木の奥がA棟:収蔵庫、右がB棟》



搬出作業の様子：土器完形品の準備《A棟：収蔵庫》



搬出作業の様子：大甕の梱包《B棟：主屋縁側》

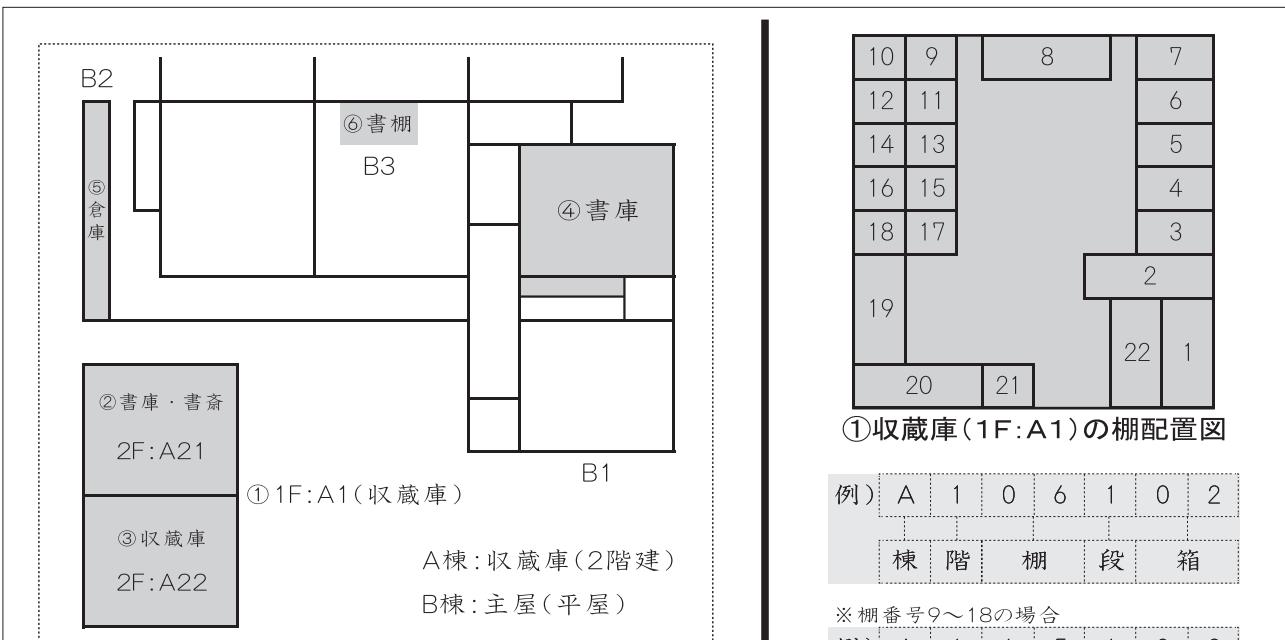


感謝状贈呈式の様子《上野原縄文の森 多目的ホール》  
平成24年12月21日

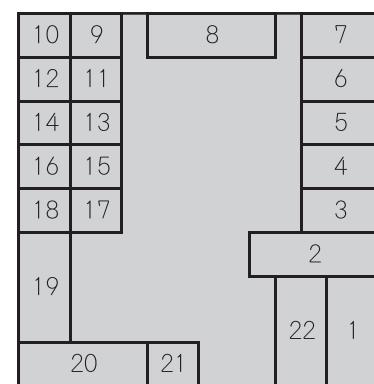


企画展「古代人の華麗な技」で寄贈品を観覧されるご遺族他  
《上野原縄文の森 企画展示室》

第2図 河口邸収蔵品収納状況・搬出状況等写真



故河口貞徳宅の見取り図(関係分)と収蔵品配置図

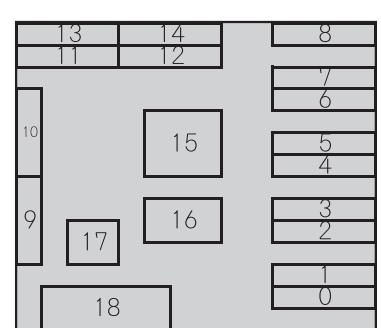


①収蔵庫(1F:A1)の棚配置図

例)	A	1	0	6	1	0	2
	棟	階	棚	段	箱		

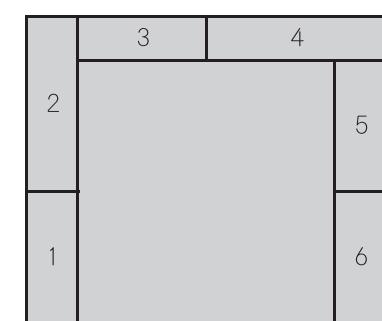
※棚番号9～18の場合

例)	A	1	1	5	1	0	3
	棟	階	棚	位置	段		

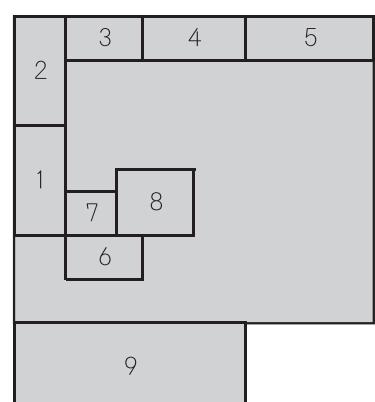


②書庫・書斎(2F:A21)の棚配置図

例)	A	2	1	2	3
	棟	階	部屋	棚	段

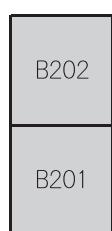


③収蔵庫(2F:A22)の棚配置図



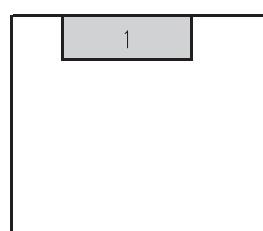
④書庫(B1)の棚配置図

例)	B	1	0	3	5
	棟	場所	棚	段	



⑤倉庫の棚配置図

例)	B	2	0	2	3	2
	棟	場所	棚	列	段	



⑥書棚(B3)の位置

例)	B	3	0	1	2
	棟	場所	書棚	段	

※①～⑥は、収蔵品が置かれていた場所の概略図と、搬出時に原位置を記録するために設けた記号及び番号を、凡例として示したものである。この他床下等、①～⑥以外の場所に収蔵されていた遺物はコンテナ等のままでごとに「S1」～番号を付した。

第3図 河口邸収蔵品収納状況図

## 2 寄贈されたコレクションと整理の概要

寄贈された膨大な資料については、考古遺物・書籍類・地図類・写真類のそれぞれの整理方法にしたがって基礎的な再整理・再分類を行い、リストや台帳を作成した。

河口邸からの搬入時に作成されたリストには、それぞれの資料が河口邸のどの部屋にあったのか、どの棚の何段目にあったのかという位置情報まで記録されており、その情報は再整理で作成したリストや台帳にも記載している。

その他、先生が書かれた注記やメモの類いはすべて保管もしくは転記し、情報が損なわれることがないよう最大限の注意を払った。

保管にあたっては埋文センターの一般収蔵庫二階の一角を仕切り、「河口コレクション保管室」として施錠・管理できるスペースを設けたほか、図書室、特別収蔵庫、写真保管庫、一般収蔵庫などで保管している。

### (1) 寄贈された資料の内容（寄付採納上の数量）

#### ① 考古資料

コンテナ	872箱
完形土器	250点

#### ② 書籍類

報告書	2,711冊
雑誌	2,736冊
単行本	721冊
その他（図録、年報、郷土誌等）	1,902冊
	合計8,070冊

#### ③ 地形図類

明治以降の地形図等（国土地理院、地理調査所発行他） 735枚

#### ④ 写真類

カラースライド	386ケース
カラーネガ	21本
モノクロネガ	663本
ガラス乾板	22セット
ベタ・プリント類	118セット

#### ⑤ その他

河口邸から一括して搬入した資料の中には、上記の他に、発掘調査時に記録された実測図面、使用された野帳やメモ類、調査日誌、日々の研究を記録された研究ノート、日記、大学の講義で使用された講義録等の貴重な資料も含まれている。

また、昭和20年代からの多数の新聞切り抜き、投稿された原稿類、考古学関係者と交わされた書簡や抜き刷り、パンフレット等もある。

### (2) 整理の概要（第4～6図）

#### ① 考古遺物の整理

河口先生宅に保管されていた考古資料は、遺跡名等の表記のある木箱やコンテナ、段ボール箱、菓子箱等に詰

められていた。埋文センターに搬入後はひとつひとつ丁寧に開梱し、洗浄や清掃をしつつ、先生が仕分けされたまとまりごとに台帳を作成し、パンケースに整理した。寄贈時にはコンテナ872箱であったが、再整理・再分類等をすすめた結果、パンケース換算で1,122箱となった。山ノ口遺跡（8箱）、黒川洞穴（76箱）、入来遺跡（118箱）、上加世田遺跡（185箱）、高橋貝塚（119箱）などである。また、遺跡ごとに作成した台帳ファイルは327冊にのぼる。

台帳には先生が箱やビニール袋に注記されていた遺跡名や地点名等の情報はそのまま転記し、情報を失うことのないように最大限留意した。また使用されていた菓子箱等も河口先生の研究の姿を垣間見る記録として一部保管している。

完形土器については個別に番号を付けて1点ずつ撮影し、台帳を作成して河口コレクション保管室に保管している。

#### ② 書籍類の整理

寄贈された書籍類にはすべて「河口文庫」の判を押し、ジャンルごとに分類してリストを作成した。

8,070冊のうち、特に貴重な書籍や学会誌等のバックナンバーを約2,000冊抽出し、「河口文庫①」と名付けて埋文センター図書室の蔵書管理システム（バーコード管理）に登録した。書架についても河口先生の書斎にあつた移動式書架の寄贈を受け、図書室に移設して「河口文庫①」を納めている。

それ以外の約6,000冊の書籍は「河口文庫②」としてリストを作成し、リスト順に並べ替えて221箱の収納箱に納めた。収納箱にはその箱に収めている書籍リストを前面に貼り付け、閲覧や検索も可能である。一般収蔵庫二階に保管している。

#### ③ 地図・地形図類の整理

寄贈された資料には、地図類も含まれており、総数は約1,000枚である。すべてに「河口文庫」の判を押し、製作された発行元と年代順にリストを作成した。古くは1903年発行の地図から含まれている。発行元は「大日本帝国陸地測量部」「内務省地理調査所」「国土地理院」などがある。17箱に分けて一般収蔵庫二階に保管している。

#### ④ 写真類の整理

写真類にはポジやネガのほか、ガラス乾板、プリント類、報告書に使用した写真原稿などがある。

ポジやネガの類いはカビが発生しているものもあり、フィルムクリーナーを用いてクリーニングを行った。その後、カラースライドについては遺跡名を付けて新規のファイルに収納し、モノクロネガはベタ焼きを作成、合わせてファイルに収納した。台帳を作成し、順次デジタル化も進めているところである。

プリント類には裏面に遺跡名やメモがあるものが多

く、それが見えるような形でファイルに収納した。

ガラス乾板には手札版や4×5版のサイズのものがあり、状態があまりよくないものもあったので取扱いや保存方法を専門業者に問い合わせ、損傷の無いよう十分に配慮して作業を行った。まず水洗し、十分に乾燥させた後、ベタ焼きを作成した。その後、薄紙に包んで一枚一枚をガラス乾板専用のケースに収め、ケースにはベタ焼きを貼付して内容物が分かるようにした。そのケースをまとめて専用の箱に収めている。

ガラス乾板には学生の実習風景のようなものが写っており、撮影年等の詳細は不明である。使用の際はベタ焼きで対応することとし、ガラス乾板の現物は保管ケースから出さないこととした。

写真類を納めたファイルは再整理後100冊程度になり、すべて写真保管庫（温度20℃、湿度50%の環境設定）に保管している。

#### ⑤その他の資料の整理

現場で作成された実測図等については丸めて保管されていたものが多く、広げて大判のクリアファイルに差し込み、遺跡ごとに図面ケースに入れて「河口コレクション保管室」に保管した。折り目など傷んでいる箇所は修復を行った。

野帳や調査日誌、日記、研究ノート、その他の資料については「河口文庫③」として一般収蔵庫二階に保管している。野帳や研究ノート類が約25箱、先生の原稿類が2箱、抜き刷りが7箱、他にも各種委員会等の資料や遺跡関係の書類等が多数あり、分類とリストの作成を順次進めているところである。

また、遺跡調査時の野帳や調査日誌については、大変重要な情報であるため、原本を傷めないように、コピーの作成とデジタル化を順次進めている。

新聞の切り抜きは年代順に並べ替え、直接台紙に貼ることは避け、薄いビニールで包んだうえで台紙に貼り付け、大判のファイルに保管している。切り抜きファイルは一括して図書室に保管し、閲覧できるようにしている。

この他、手紙や葉書など河口氏と親交のあった方々との書簡や報告書原稿の版下、パンフレット等大枠の分類はできたものの、細かなリスト化までには至っていない。また、河口コレクションには河口氏が使用していた実測道具や文房具等の資料も含まれている。今後順次整理を進めていく予定である。



考古遺物搬入状況



開梱と台帳作成作業



遺物洗浄作業



遺物実測作業

第4図 河口コレクション整理・収納状況写真①



書籍類の搬入状況（段ボール400箱）



写真フィルムクリーニング作業



図書室内に設置した「河口文庫①」



ネガ・ポジの整理・保管（写真保管庫）



河口先生の書斎から移設した書架



写真プリントの整理



「河口文庫②」の整理・保管（一般収蔵庫二階）



ガラス乾板の整理

第5図 河口コレクション整理・収納状況写真②



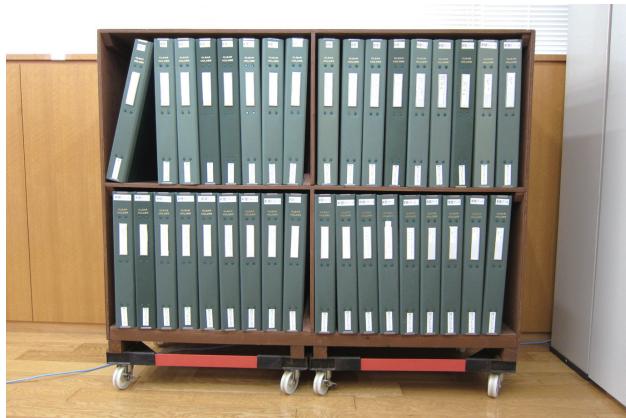
河口コレクション保管室



新聞切り抜きファイル



河口コレクション保管室の様子



新聞切り抜きファイルの保管（図書室）



実測図面の整理・保管（河口コレクション保管室）



図面修復作業



地図・地形図の整理・保管（一般収蔵庫二階）



整理を待つ膨大な資料（一般収蔵庫二階）

第6図 河口コレクション整理・収納状況写真③

## 第Ⅲ章 山ノ口遺跡の再検討

### 第1節 遺跡の現状

山ノ口遺跡は、現在の行政区分で鹿児島県肝属郡錦町馬場に所在する。錦町南部の沖積平野の南端にあたる海浜地で、背後には肝属山地がせまり、前面は約200m余で鹿児島湾の海岸汀線に至る。

本遺跡周辺は以前から水田地帯であり、山ノ口遺跡発見時の昭和30年代には、砂鉄採掘地帯となっていた。現在は、水田から畑地への転換が行われている。

現在遺跡地には、「山ノ口祭祀遺跡の碑」が建てられている（第7図）。また、平成の大合併前の大根占町時代、昭和47年4月には「山之口祭祀遺跡」として町指定文化財に指定されている。

本遺跡の発掘調査はその後行われていないが、隣接する出口遺跡で国道269号線の改良工事に伴い、昭和62年に発掘調査が実施された。しかし、山ノ口遺跡で大量に出土した弥生時代の遺物はなく、縄文時代後期と古墳時代が主体であったと報告されている。

### 第2節 現場図面の追加資料

山ノ口遺跡関係の図面類として、第1～3次調査の図面、第1次調査の調査日誌（B5版ノート1冊）、第2・3次調査の調査メモ（B5版ノート1冊、メモ帳2冊）がある。これらの中から未報告の図面類について報告する。

第8図は、山ノ口遺跡のトレント配置図である。旧報告では、C地点のグリッド設定状況が、文章中に記載されているものの図化されていなかった。調査日誌により、グリッド設定状況が確認できたため、今回図化した。また、昭和36年5月の砂鉄採掘状況も記録されており、第3次調査（D地点）時点では、すでにB・C地点は削平されている様子が窺える。

第9図は、B地点（第1次調査）の環状配石及び遺物出土状況図である。旧報告でも図化されているが、炭化物出土範囲及び暗紫ゴラ検出範囲等を凡例をつけて分かりやすくしたほか、A'地点の範囲も追加し、砂鉄採掘により削平を受けている範囲と環状配石の関係がより明らかになった。併せて、第10図として遺物実測図も配置した図を掲載した。

第11図は、C地点（第2次調査）の環状配石及び遺物出土状況図である。IIトレント9区よりIVトレント1区へかけて検出された楕円形環状の配石及びその周囲の遺物出土状況図は、旧報告でも図化されているが、Iトレント4区からIIトレント8区もあわせて実測されている図面が確認できたため、今回図化を行った。Iトレント5区よりIIトレント6区にかけて検出された軽石集積地の状況や楕円形環状の配石の周囲以外の遺物の出土状況



第7図 山ノ口遺跡の現況

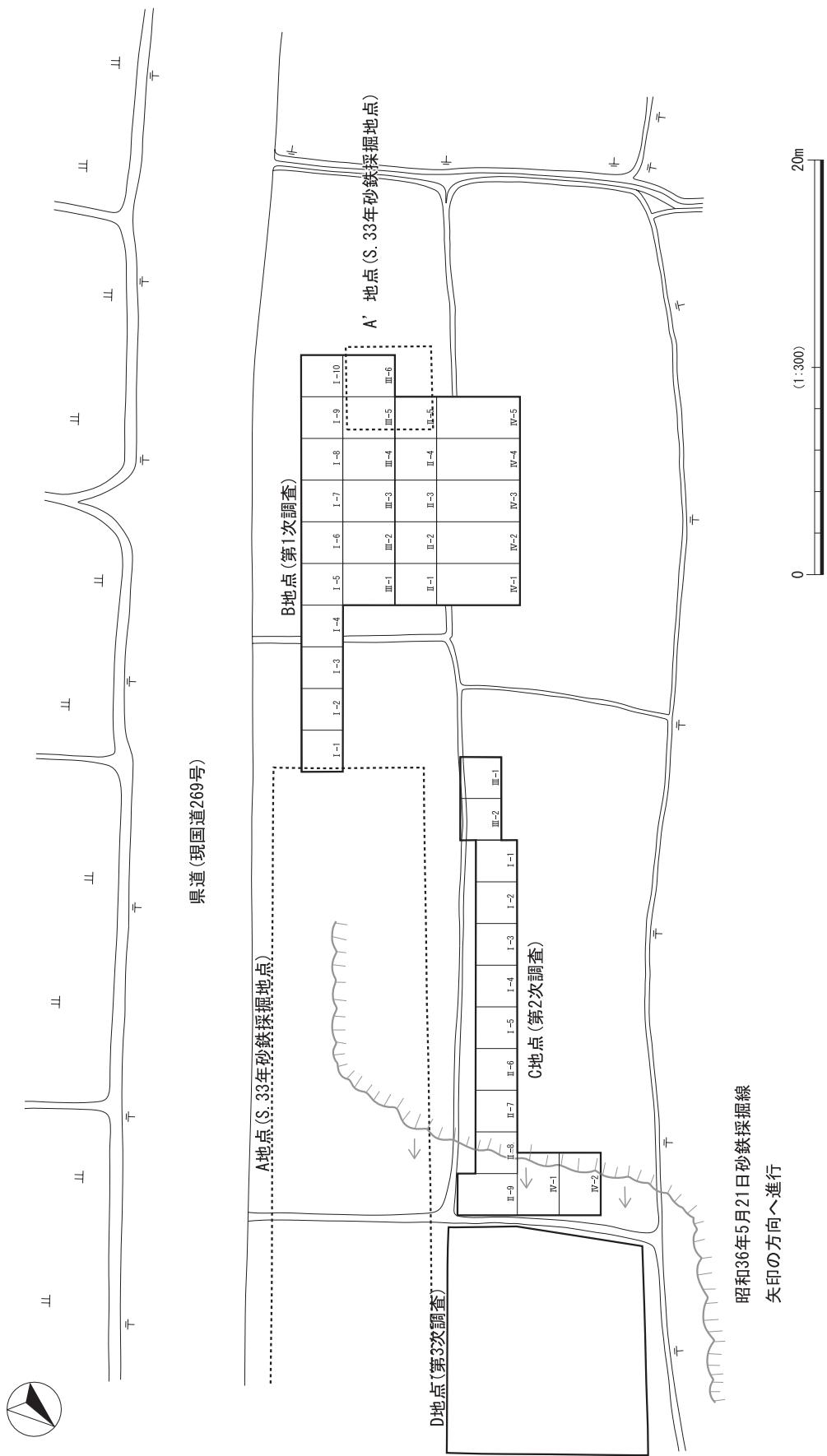
等が明らかになった。併せて、遺物実測図も配置した。

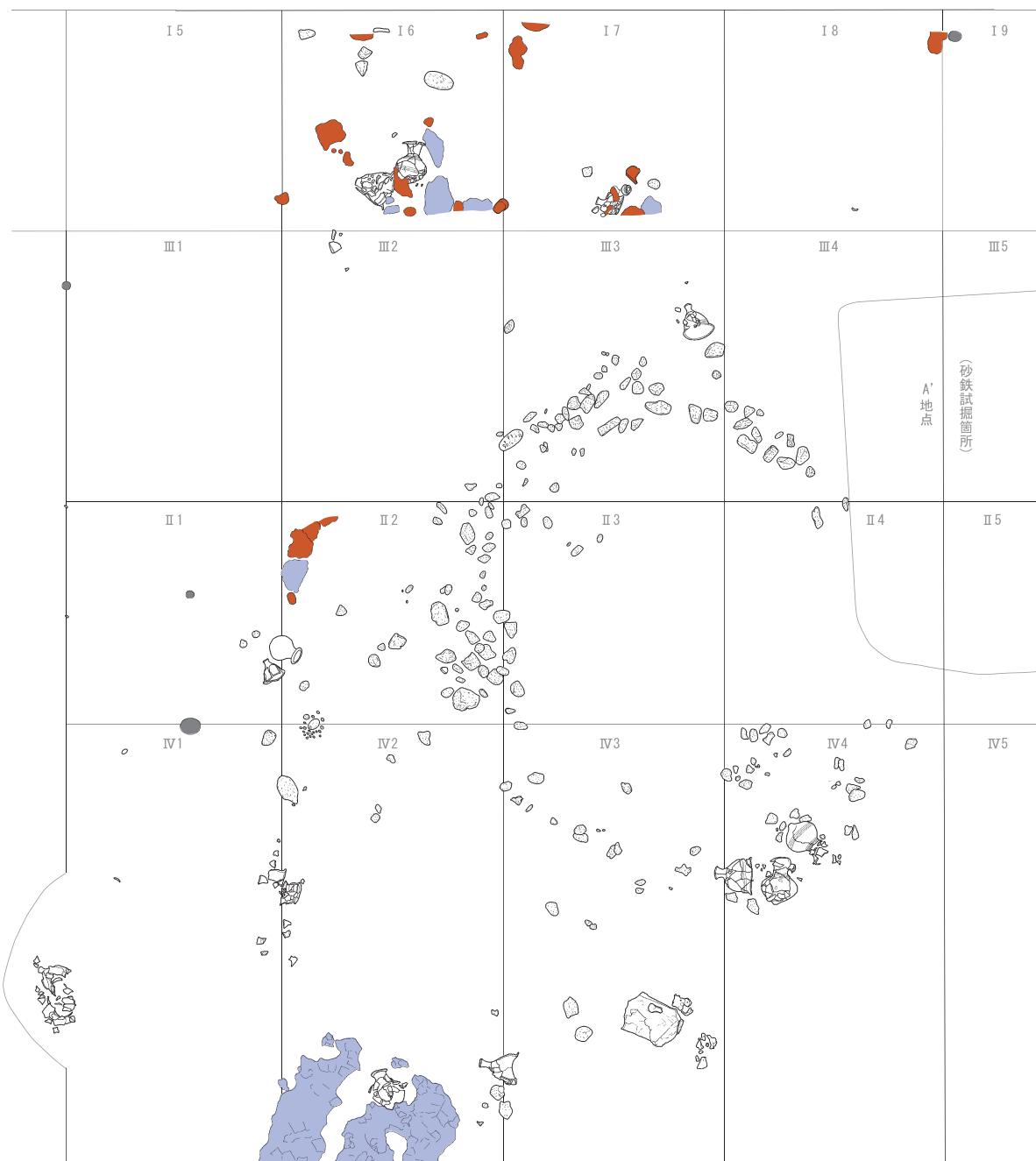
第12図は、C地点出土の陰石とされる軽石製品出土状況のメモである。旧報告では出土状況について「配石端より30cmの間隔をおいて34cm×24cmの軽石に、19cm×7cmの楕円形で深さ10.5cmの凹穴を刻んだ礫を配し、その上を加工した二箇の軽石で蓋し、更に薄板状の粘板岩で覆っている。」とあり、その状況をメモしたものと思われる。

第13図は陰石とされる軽石製品の出土状況写真である。左から右へ撮影された順に配置している。まず、陰石とされる軽石製品単体の出土状況の写真が撮影される。次に陰石とされる軽石製品の上に加工した2個の軽石を乗せた状況で撮影される。軽石の周囲は砂や竹串で固定されている。最後に固定していた砂や竹串をはずした状態で撮影される。このような撮影順序から、河口氏が陰石とされる軽石製品の出土を知った時にはすでに、蓋をしていた軽石や薄板状の粘板岩を取り上げていたものと思われる。その後、おそらく発掘した作業員に聞き取り、出土状況を復元して撮影したのである。なお、実測図は第13図右の写真的状況に近い。

第14図は、昭和36年の第3次調査前後、砂鉄採掘時に発見された軽石集積地の位置図のメモである。A地点とC地点の間に位置する。おそらく、図版10-①の写真はこの軽石集積地を状況を写したものと思われる。メモと写真から壺形土器が1点出土している状況が窺える。また、写真上部には、ポンプによる砂鉄採掘の際に生じた

第8図 山ノ口遺跡年度別調査地点位置図





----- 原図にある線

----- 加筆した線

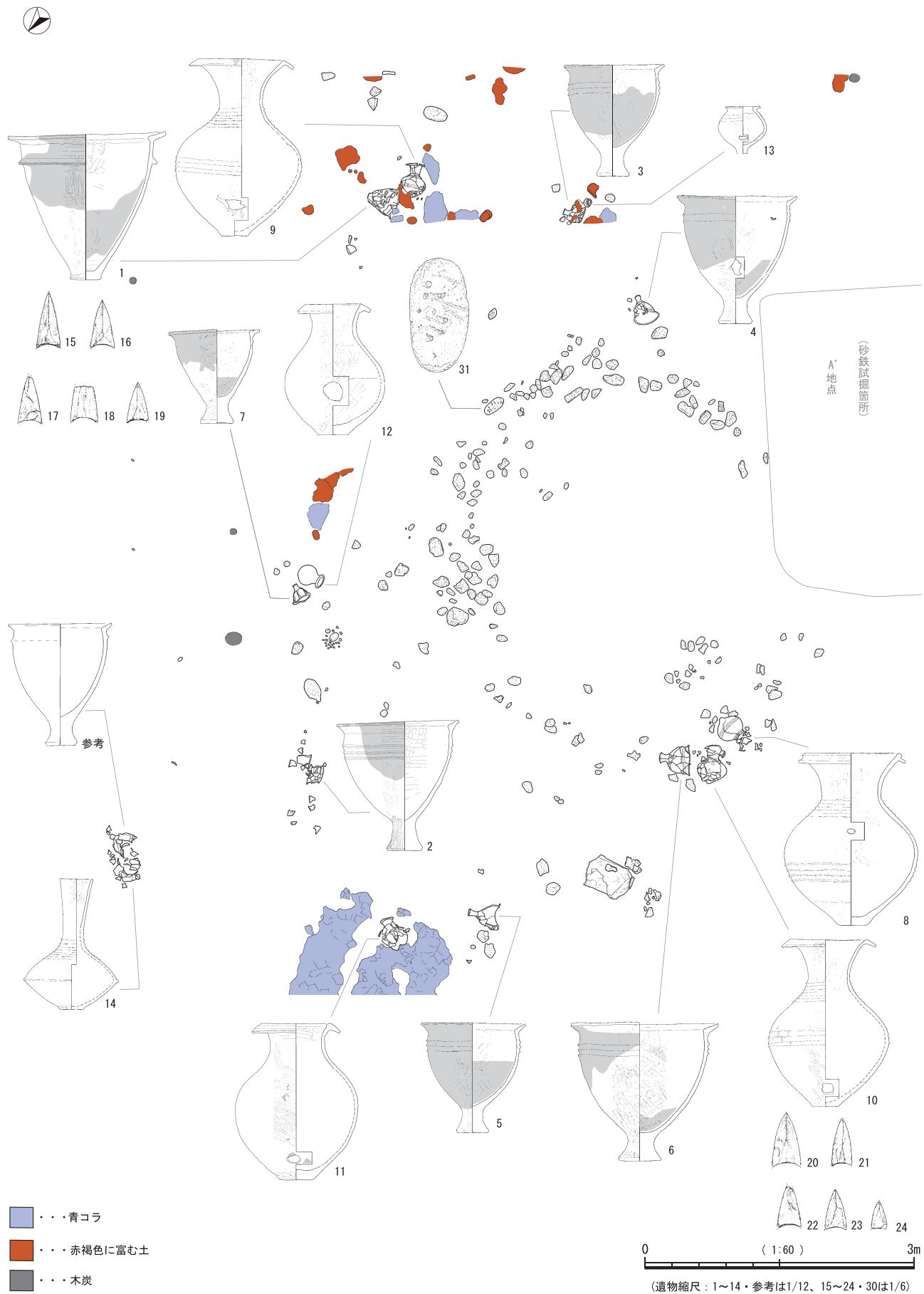
青コラ

赤褐色に富む土

木炭

0 (1:60) 3m

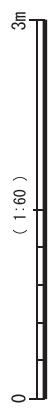
第9図 B地点遺構配置図及び遺物出土状況図①



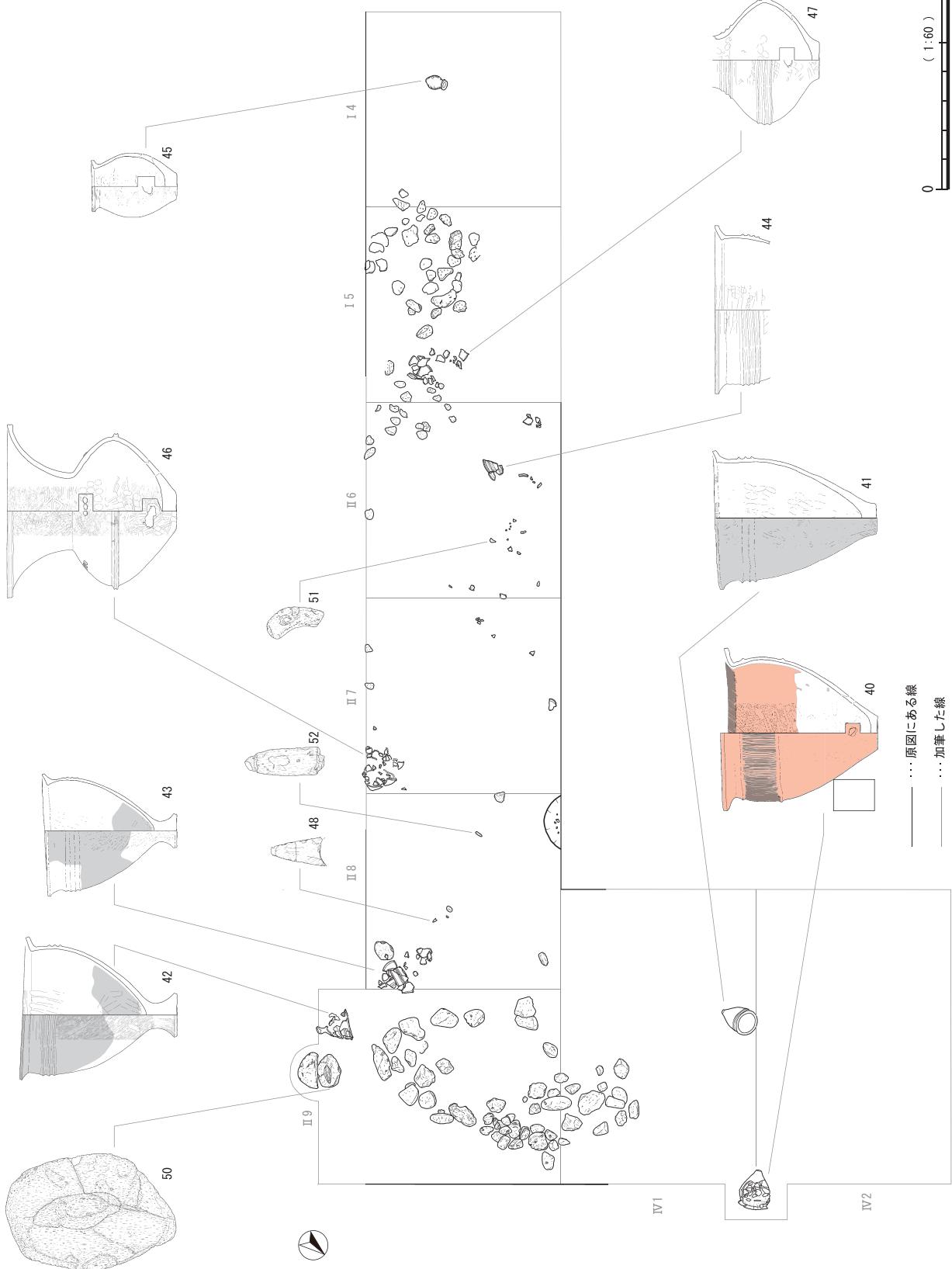
第10図 B地点遺構配置図及び遺物出土状況図②

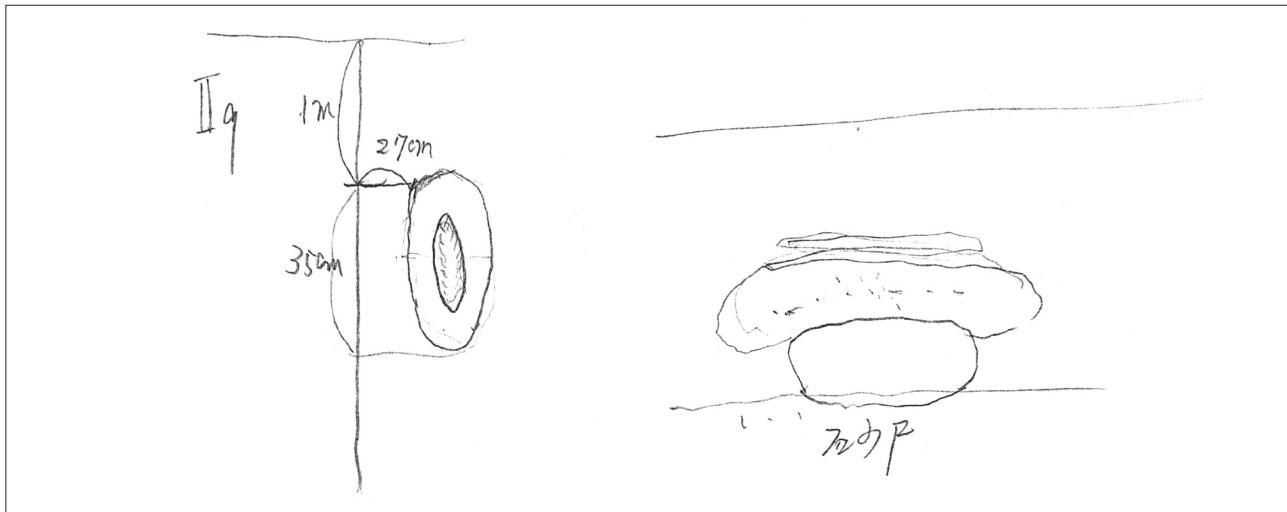
第11図 C地点遺構配置図及び遺物出土状況図

(遺物縮尺: 40~47・50は1/12、48・51・52は1/6)



—— 原図にある線  
— 加筆した線





第12図 C地点軽石製品出土状況メモ

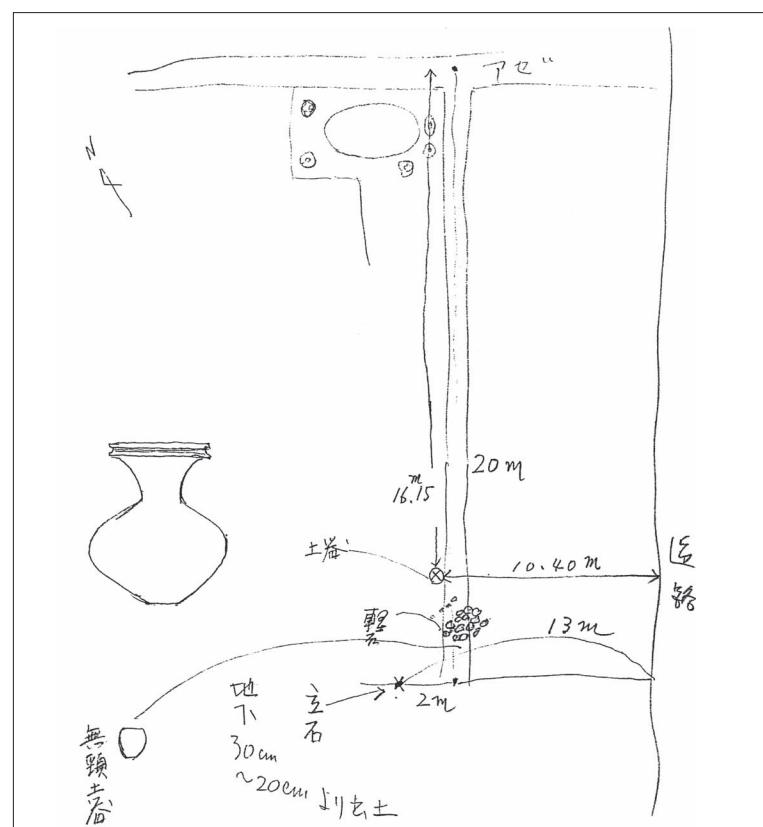


第13図 C地点軽石製品出土状況写真

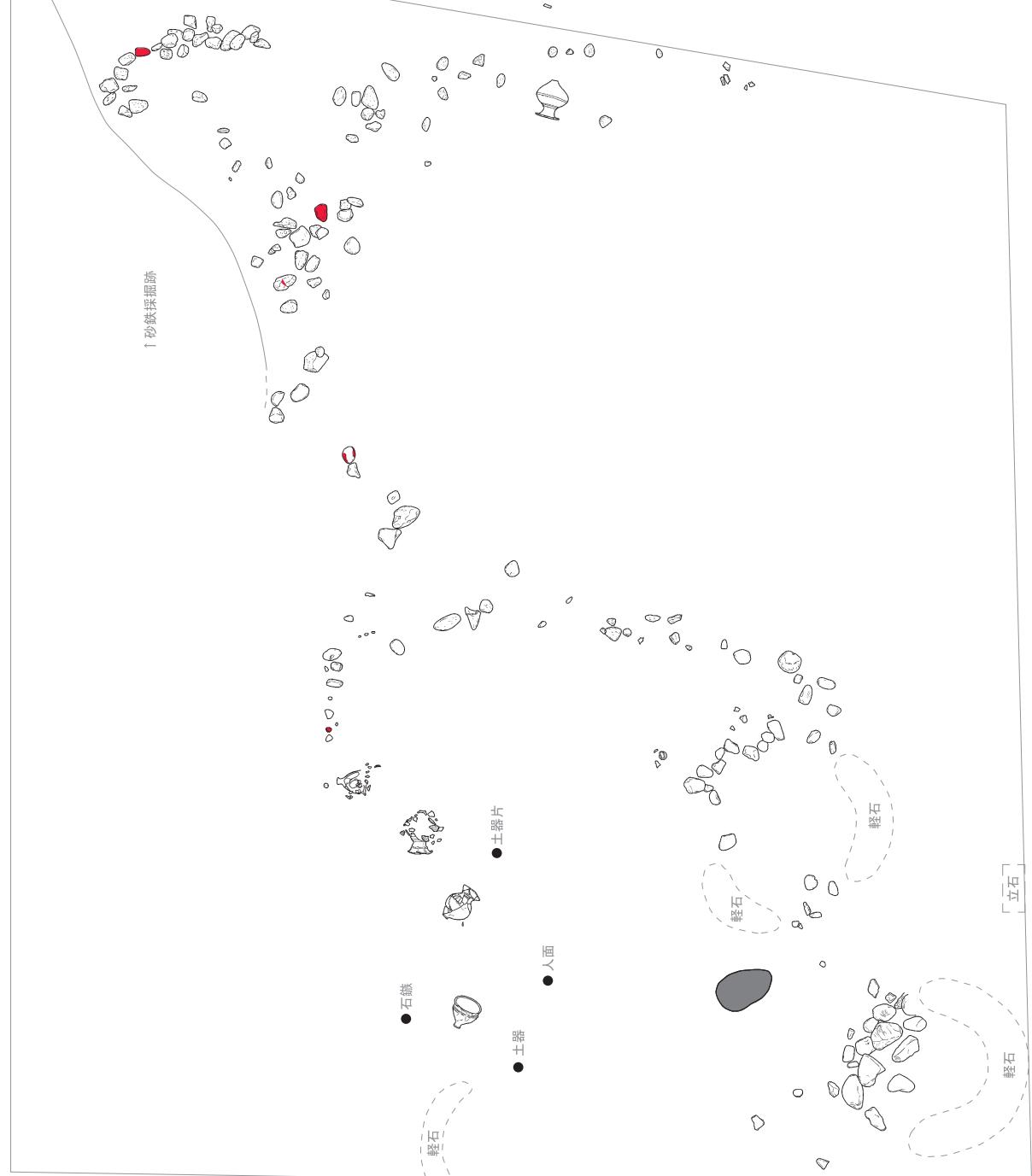
水が近くまで流れ込んでいる状況が写っており、応急的にメモと写真のみ記録した様子が窺える。

第15図は、D地点（第3次調査）の環状配石及び遺物出土状況図である。旧報告では、文章のみの報告であったため、今回初めて図化されたものである。残されている図面と出土状況の写真を見比べると、図化されていない軽石や遺物があった。そのため、写真を参考に加筆し、可能な限り出土状況の再現を行った。この図により、模式化した略図しかなかったD地点の状況がより詳細に分かるようになった。あわせて、第15図に分かり得た限り、遺物実測図も配置した。

このように第3次調査では、実測図が不十分であったり、メモや写真のみで済ませていたりすることから、極めて緊急性が高い状況で調査を行っていたことが窺える。



第14図 A地点とC地点で検出された軽石集積地位置図メモ

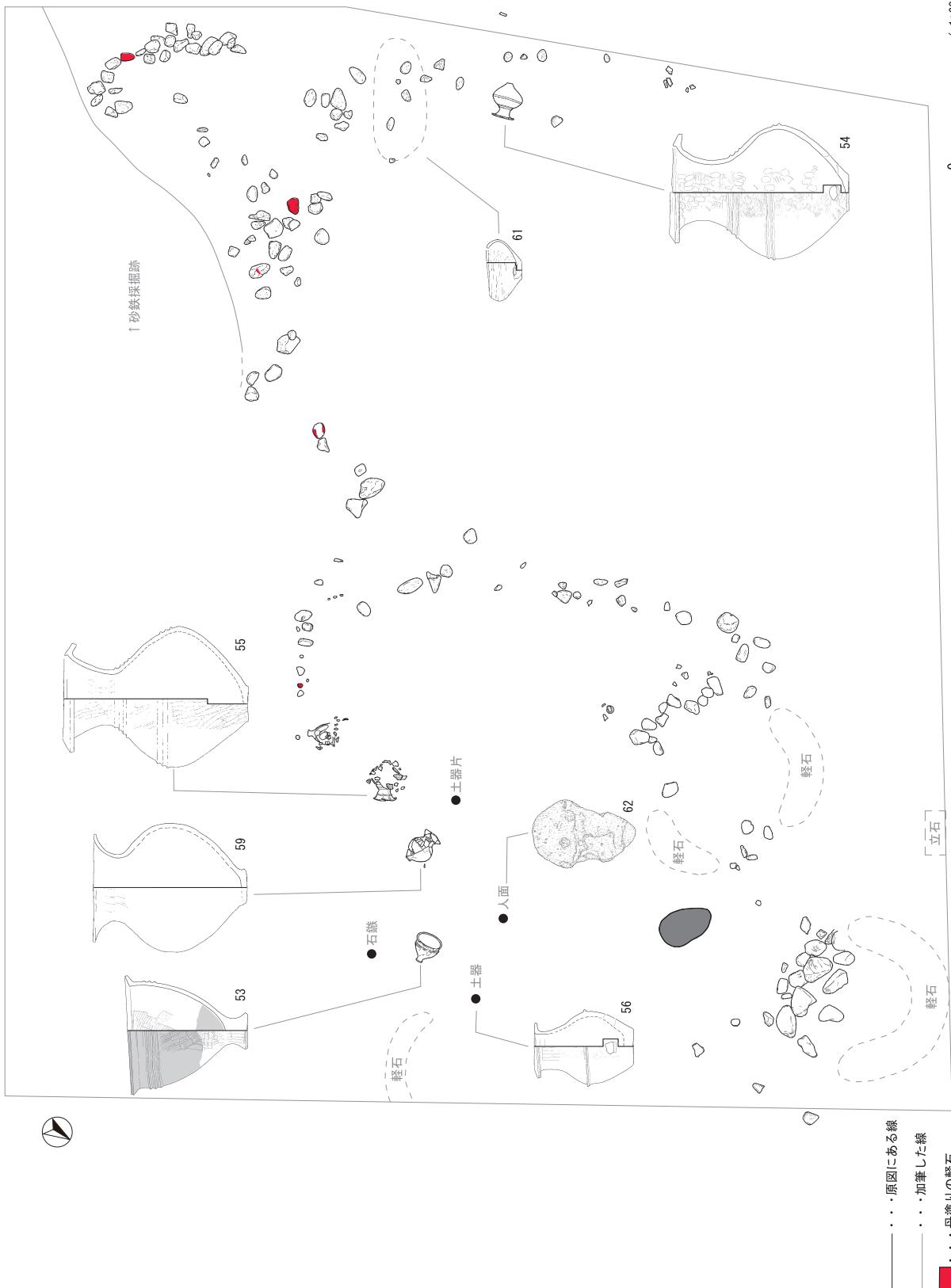


第15図 D地点遺構配置図及び遺物出土状況図1

・原図にある線  
・加筆した線  
・丹塗りの墻石  
・木炭を含む黒土

第16図 D地点遺構配置図及び遺物出土状況図2

遺物縮尺 : 53~56・59・61(±1/12、62(±1/6))  
0 ( 1:60 ) 3m



### 第3節 遺物の追加資料及び再実測

今回、これまで未発表の遺物の実測を行った。また、既に報告済みの遺物についても、現代的視点で改めて実測を行った。土器については、胴部片のみの破片を除く全ての遺物を、剥片石器は全ての遺物を、軽石・軽石製品については、加工が認められる全ての遺物を実測対象とした。以下、出土地点毎に遺物の説明を行う。

#### 1 B 地点（第1次調査）出土遺物

##### （1）土器（第17～21図）

1～7は甕である。1はやや小ぶりだが、大甕の形態を呈する。口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈し、内面には口縁部を貼り付けた際の突起が確認される。口唇部は凹線状となる。口縁部下には、断面形態がM字状を呈する1条の突帯を巡らす。底部は、端部がやや外側へ張り出す平底である。内外面に煤が付着する。口唇部にわずかながら暗紫ゴラと思われる灰色の付着物が確認される。2の口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下には、3条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は凹線状となる。外面胴下半部の調整に、ハケ目ではなく、縦方向のミガキを施すのが特徴である。外面には、部分的に暗紫ゴラや煤の付着が確認できる。3の口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下には、3条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は凹線状となる。内外面に煤が付着する。また、口唇部にわずかながら暗紫ゴラの付着が確認できる。4の口縁部は、やや内湾して斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下には、2条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は凹線状となる。内外面に煤が付着する。また、口唇部と胴上半部にわずかながら暗紫ゴラの付着が確認できる。胴下半部には孔が外面から穿たれている。5はやや小型の甕である。口縁部は、やや斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下には、3条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は凹線状となる。内外面に煤が付着する。6はやや大型の甕である。口縁部は、やや斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下には、3条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は凹線状となる。内外面に煤が付着する。7は小型の甕である。口縁部は、やや斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下の突帯はない。頸部に米粒状の刻みが連続的に施されている。文様として意識的につけたものか、調整時についてしまったものか判然としない。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は凹線状となる。このほか、旧報告では、B地点出土の甕がもう1点出土しているが所在を確認することができなかつた。再トレースした実測図を参考として掲載する（第19図参考）。

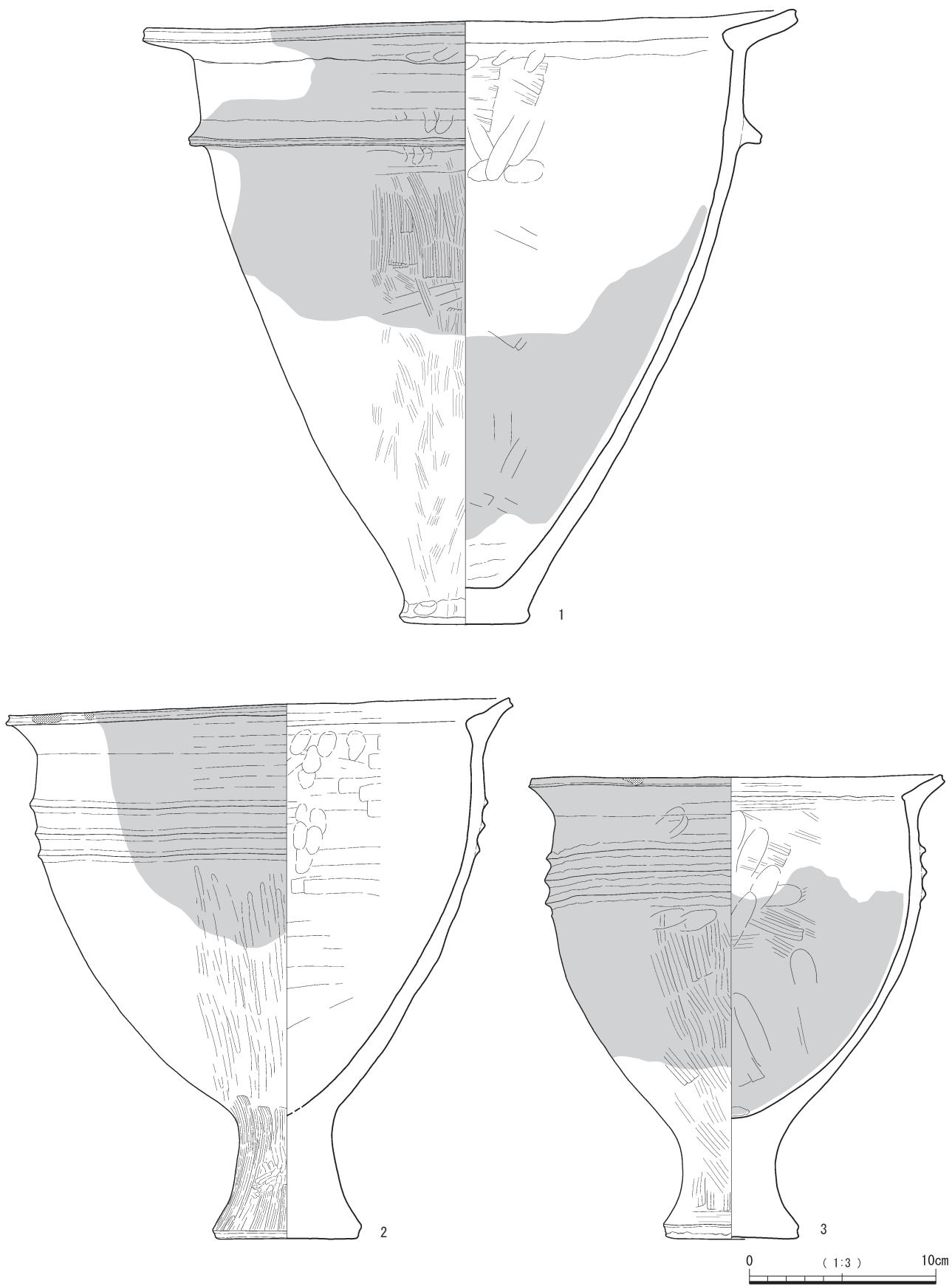
8～14は壺である。8は底部から胴下半部はストレー

トに外開きし、胴部中央から胴上半は球形に近い。胴部最大径のところに、4条の突帯を巡らす。胴上部と頸部の境は、形としては境が明瞭でないものの、6条の突帯を巡らすことから境が明らかである。口縁部は、やや垂れ下がった二叉状口縁である。内面に口縁部を貼り付けた際の突起が確認される。胴部上位には、孔が外面から穿たれている。赤褐色の胎土にミガキを施することで、丹塗のような印象を受ける。9・10は底部から胴下半部はストレートに外開きし、胴部中央から胴上半は球形に近い。胴部最大径のところには、4条の突帯を巡らす。胴上部と頸部の境は、形としては境が明瞭でないものの、7条の突帯を巡らすことから境が明らかである。口縁部は、やや垂れ下がった逆L字状を呈する。鋤先状の整形を意識したものであろうか、内面に口縁部を貼り付けた際の突起が確認される。口唇部は凹線状となる。底部附近には、孔が外面から穿たれている。外面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。11の口縁部は、やや垂れ下がった逆L字状を呈し、内面には口縁部を貼り付けた際の突起が確認される。胴部は、球形に近い形状を呈する。また、胴下半部には、孔が外側から開けられている。底部は、平底である。外面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。12は11とほぼ同様の形態だが、11に比べやや小ぶりである。胴部中央に孔が外面から穿たれている。13は台付小型壺である。脚台部の大半が欠損している。口縁部は逆L字状を呈し、ほぼ水平方向に伸びる。口縁部下には、3条の突帯を巡らす。胴部形態は球形に近い。胴部下位には孔が外面から穿たれている。14は長頸壺である。頸部下位から胴部上位にかけて8条、胴部中央に1条の突帯を巡らす。突帯の断面形態は頸部下位から胴部上位のものが三角形、胴部中央のものがM字状である。胴部は算盤玉状を呈する。底部には孔が外面から穿たれている。胴部中央の突帯の凹み部には暗紫ゴラが付着している。

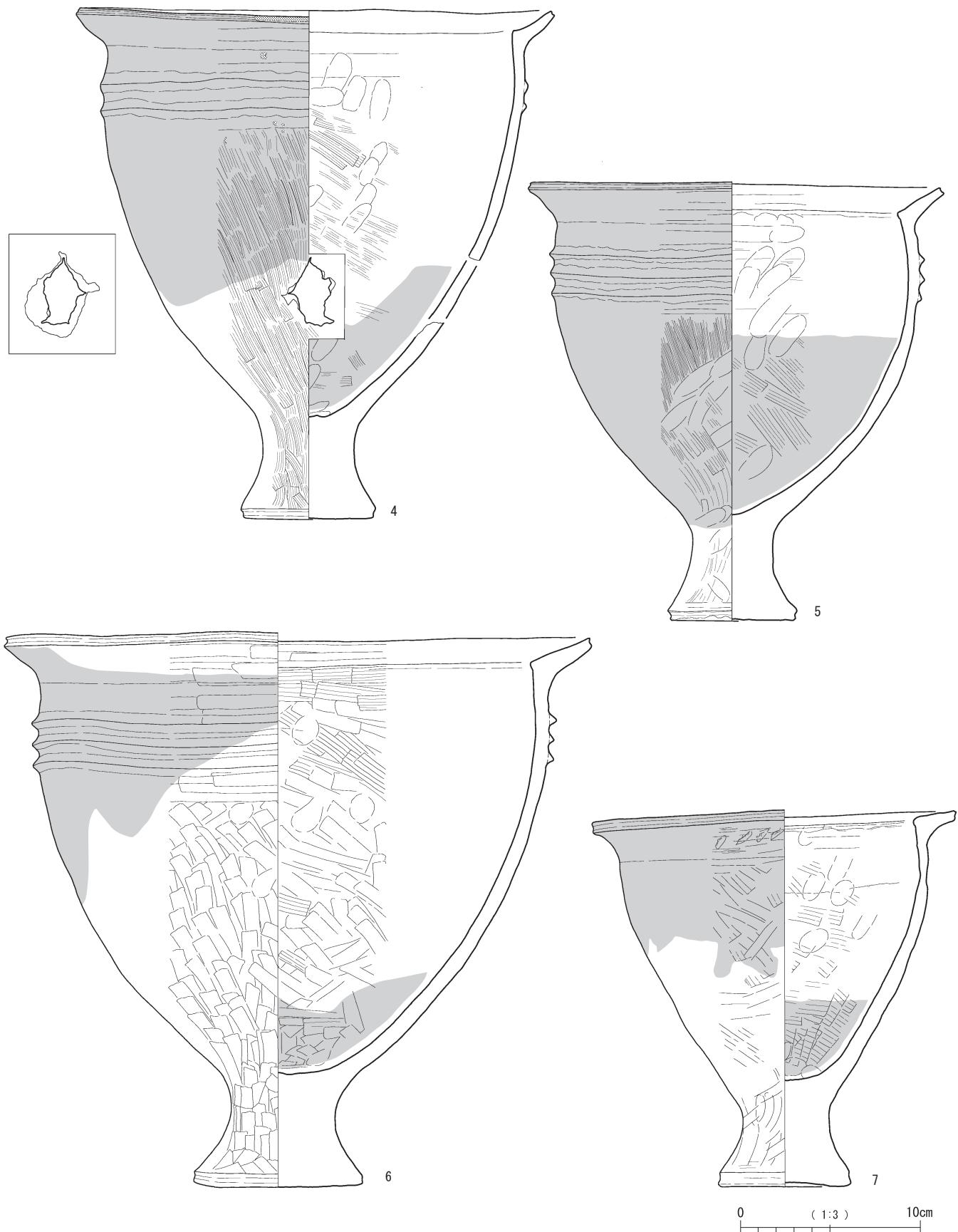
##### （2）石器・石製品（第22～25図）

15～25は磨製石鏃である。15～19は、1の土器付近で、20～24は、10の土器の直下からまとまって出土したとされる。粘板岩製のもの（15～19、21～24）と頁岩製のもの（20・25）がある。大きさは、長さ6cm程度の大型品（15・20）から、長さ3cm程度の小型品（24）までバリエーションがある。また、先端部は欠損しているものが多く、18や21のように鏃をもつものもみられる。

26～39は軽石製品である。26～28は勾玉である。両側から孔が穿たれている。29は勾玉状を呈する軽石製品である。孔は穿たれていない。30は線刻や小凹み穴を穿った軽石製品である。線刻は非常にシャープな加工である。31も同様な軽石製品である。小凹穴は、同じ斜め方向から穿たれている。また凹みから生じる短い線刻もほぼ同じ方向である。河口氏は30・31の軽石製品を呪術具と想



第17図 B地点出土土器実測図①



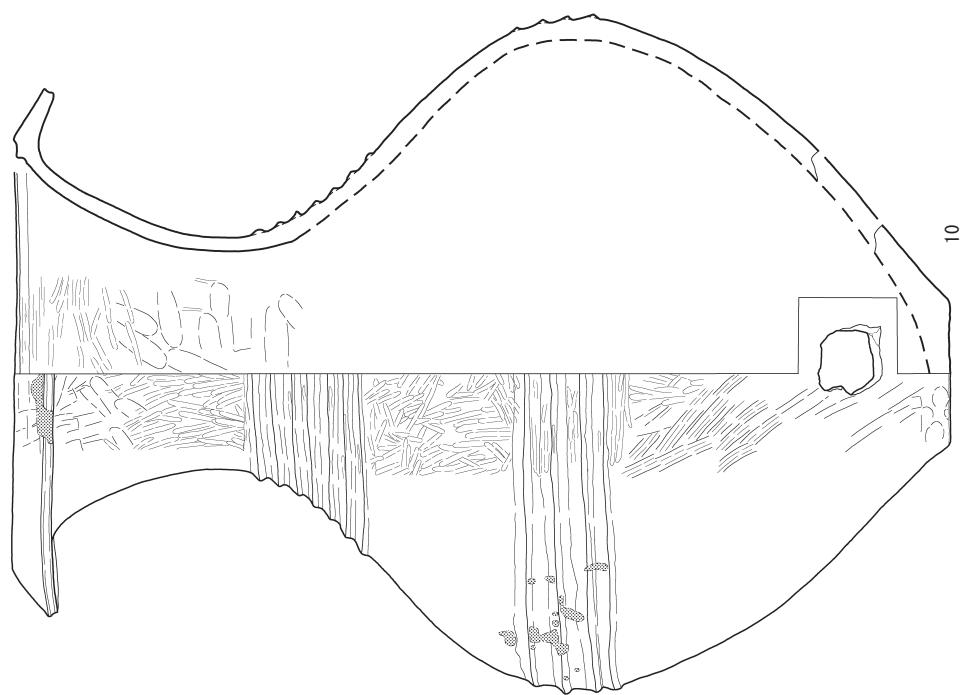
第18図 B地点出土土器実測図②

定している。しかし、31は底面が緩やかに磨かれ作業にあたって安定するように加工していることから、何らかの作業台の可能性もある<sup>(註1)</sup>。32～34は、幅1～2cm程度の棒状のものを研磨したと思われる軽石製品である。33・34には暗紫ゴラが付着している。35～39は、加工がみられるが用途不明の軽石製品である。35は側面に小凹穴が見られる。先の尖った工具で穴を穿ったと思われる。暗紫ゴラが付着している。36は正面2か所や底面1か所、直径2cm程度の凹穴が確認できる。37は両側面に加工が見られる。38は、研磨され、勾玉状に加工されるが、最大長が11.7cmあり、勾玉にしては大きい。39は中央に橢円形の凹穴があり陰石のように見えるが、凹穴が人為的なものかどうか判然としない。

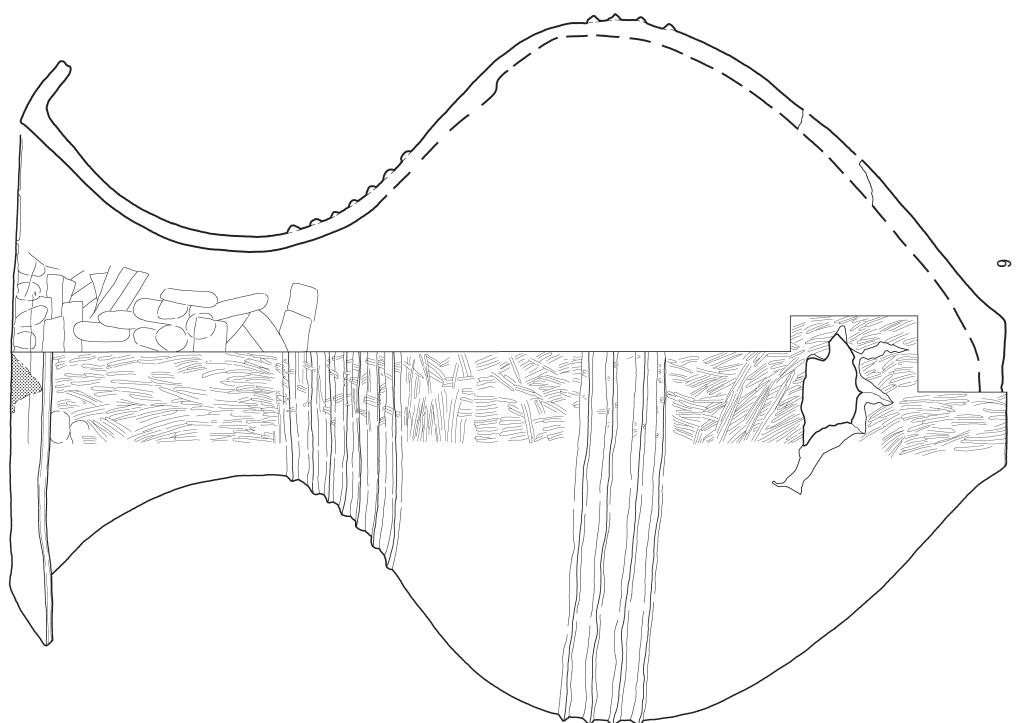


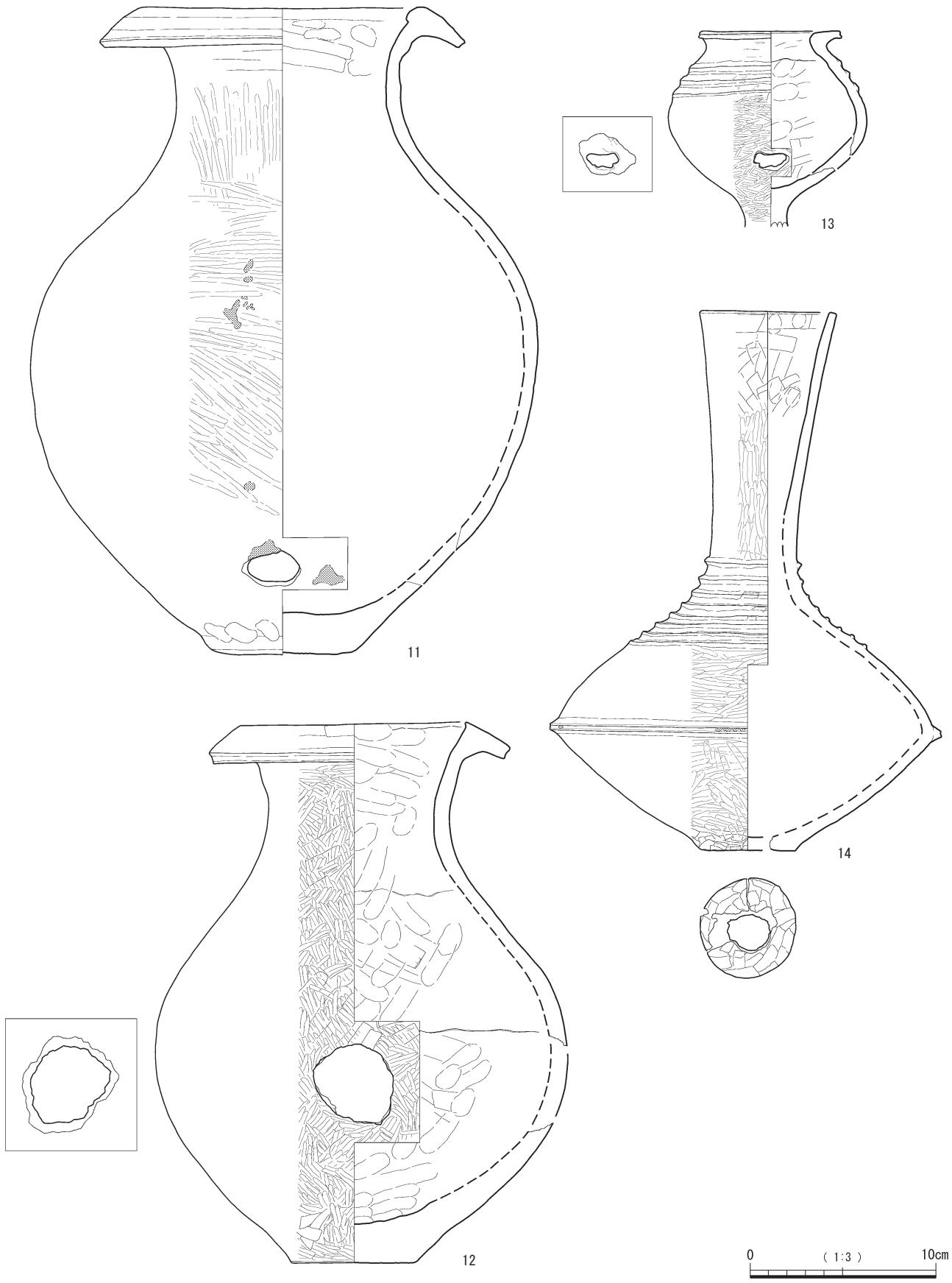
第19図 B地点出土土器実測図③

10cm  
0 ( 1:3 )

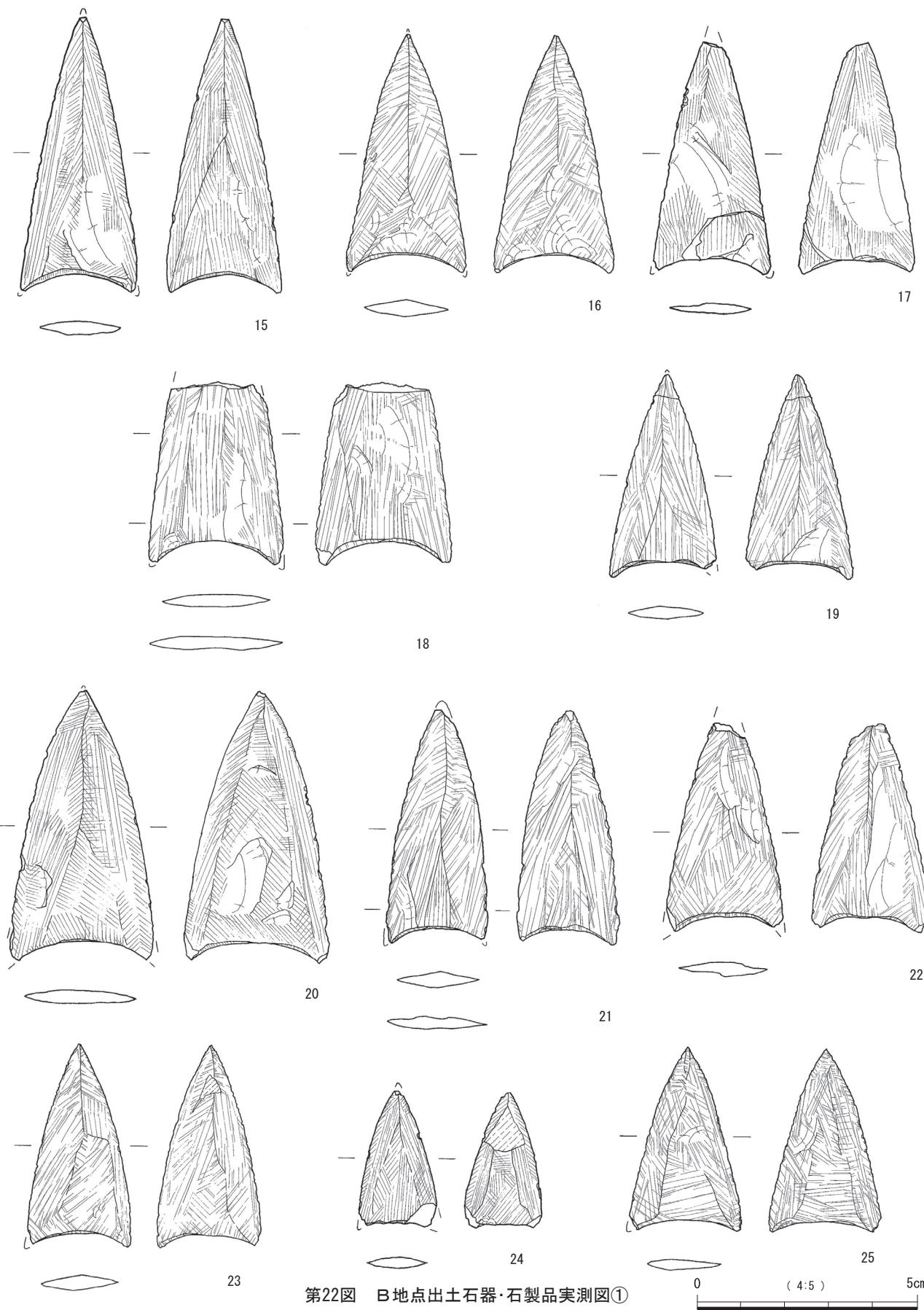


第20図 B地点出土土器実測図4





第21図 B地点出土土器実測図⑤

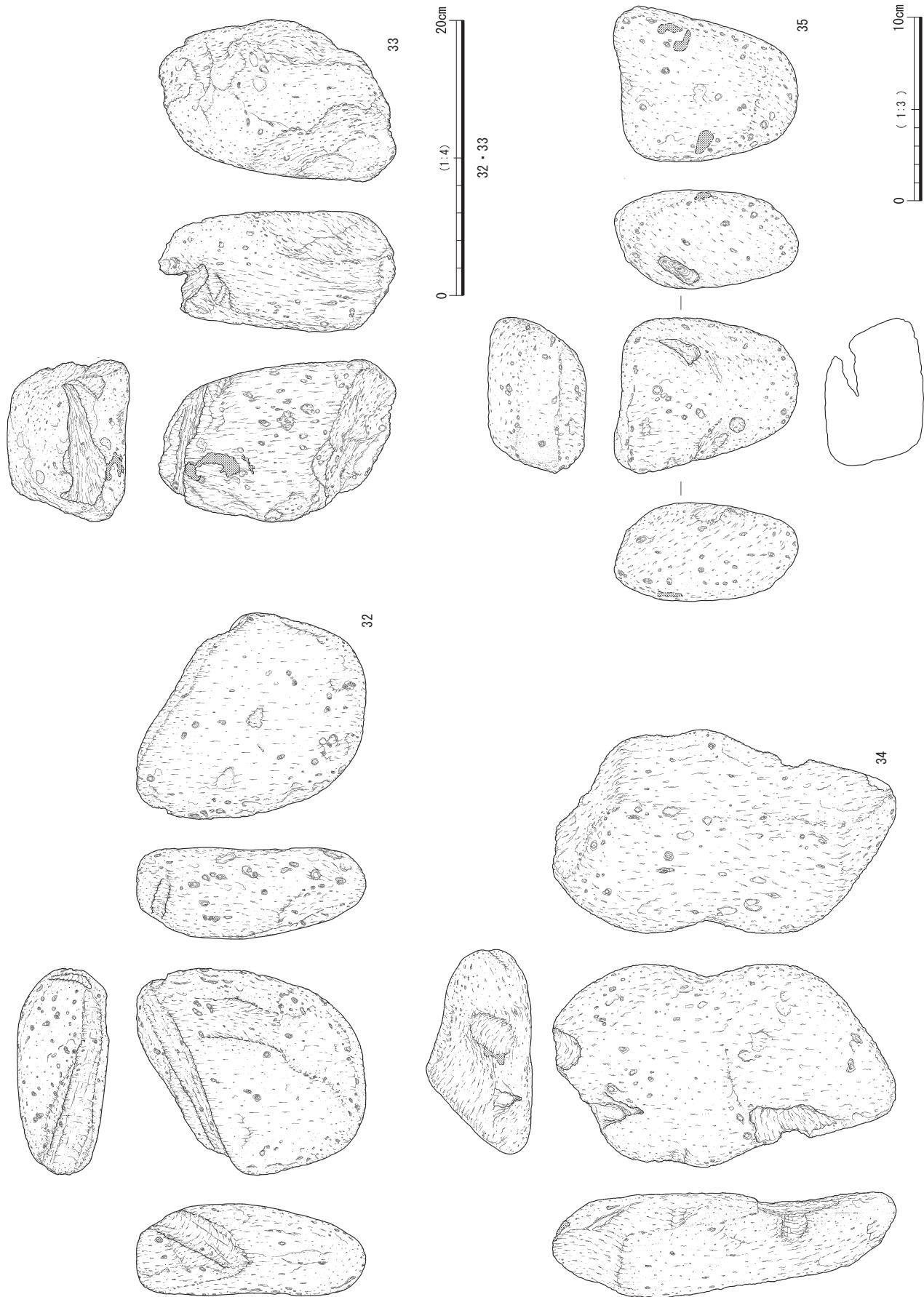


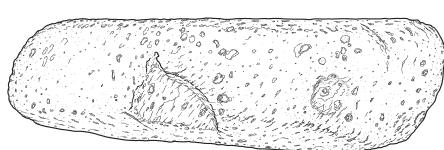
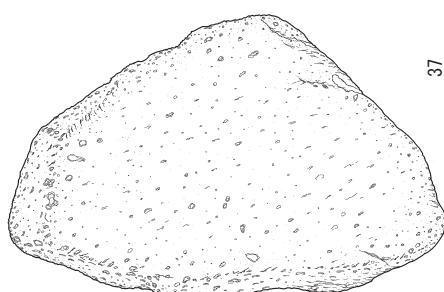
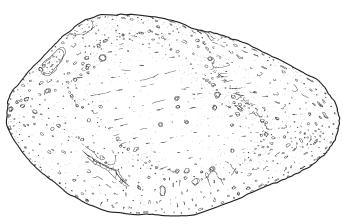
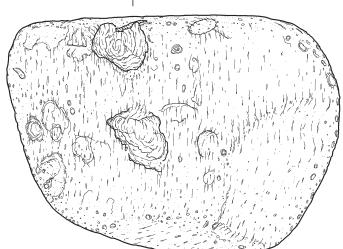
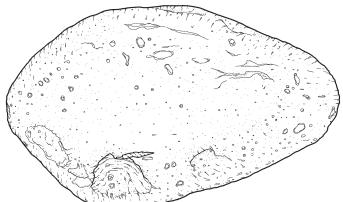
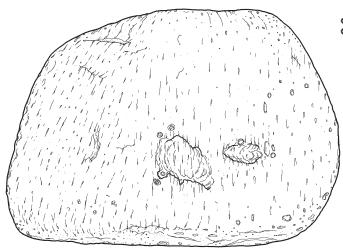
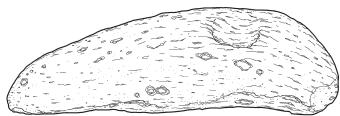
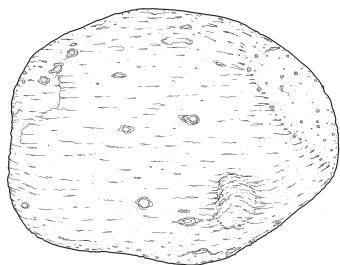
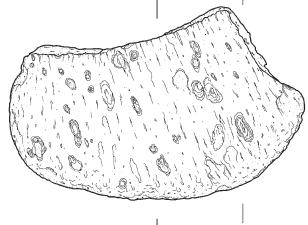
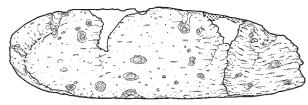
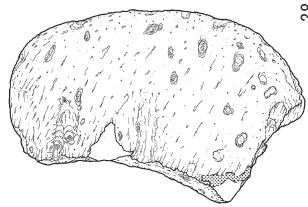
第22図 B地点出土石器・石製品実測図①



第23図 B地点出土石器・石製品実測図②

第24図 B地点出土石器・石製品実測図③





## 2 C地点（第2次調査）出土遺物

### (1) 土器（第26～28図）

40～44は、甕である。40の口縁部は斜め上方へ長く伸びる逆L字状を呈する。口唇部は凹線状となる。頸部直下及び胴部中位にそれぞれ1条の断面三角を呈する突帯を貼り付けている。底部はやや上げ底状である。口唇部内面及び外面の突帯間には暗文を施す。外面及び内面の口縁部～胴部中位まで赤色顔料が塗布されている。底部付近の胴部下位には、外側から孔が穿たれている。41の口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口唇部は凹線状となる。口縁部下には、3条の突帯を巡らす。底部は平底である。外面に煤の付着が確認できる。また、口唇部及び口縁部内面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。42の口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下には、3条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は凹線状となる。内外面とも、部分的に煤の付着が確認できる。43の口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下には、4条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は凹線状となる。内外面に煤が付着している。44は、口縁部片である。口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下には、4条の突帯を巡らす。口唇部は凹線状となる。内面に、爪状の圧痕が規則的に施されている。指オサエ時についた可能性が考えられる。

45～47は壺である。45は小型壺である。口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口唇部は凹線状となる。底部は平底である。胴部下位に外側から孔が穿たれている。46は広口壺である。口縁部は朝顔形に大きく開く。口唇部は凹線状となる。胴部は偏球状を呈し胴部中央に断面M字状の1条の突帯を巡らす。胴上部には、3個1組の円形浮文が5か所確認される。胴下半部に孔が内側からと外側からの2回の打撃により開けられている。底部は平底である。外面胴部の突帯には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。47は頸部～底部片である。胴部は偏球状を呈し、頸部と胴部中央にそれぞれ3条の突帯を巡らす。底部は平底である。胴部下位に外側から孔が穿たれている。

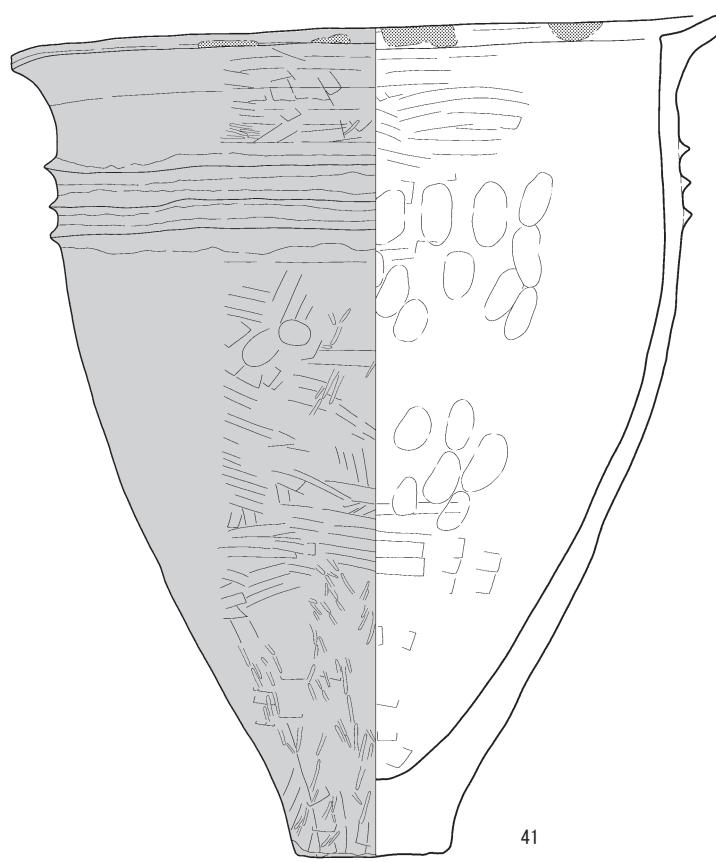
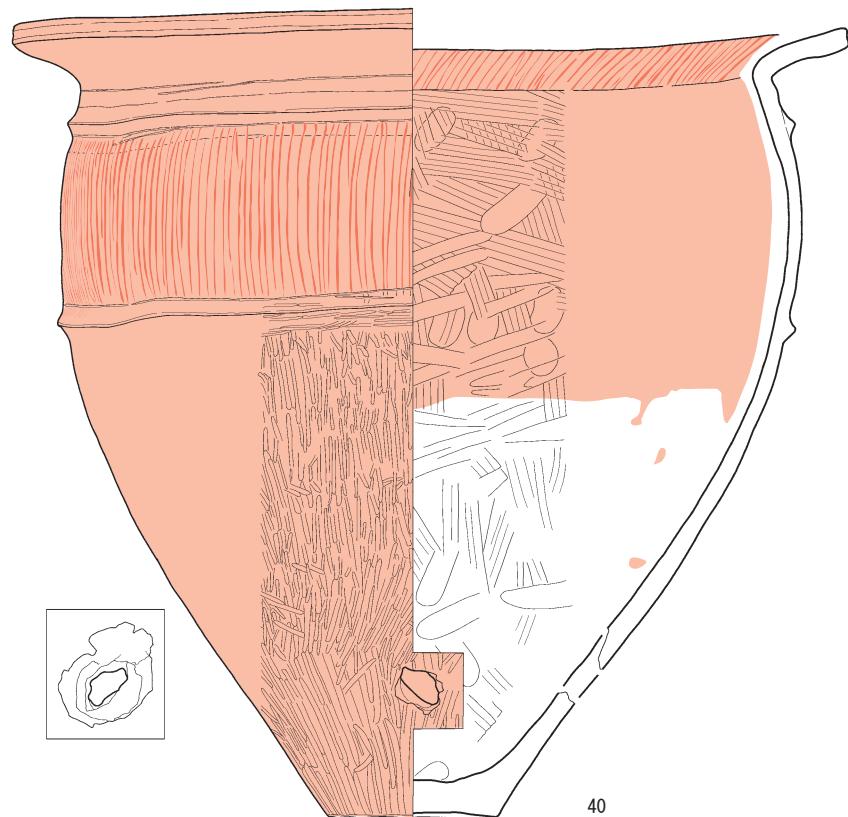
### (2) 石器・石製品（第28・29図）

48・49は磨製石鎌である。48は長さは残存部分のみで5.55cmある大型品で、端部はいずれも欠損している。49は長さ2.9cmの小型品である。

48はII9区出土と書かれた袋の中におさめられていた。しかし、写真との照合からC地点II8区出土の石鎌と判明した。49もII9区出土と書かれた袋の中におさめられていた。II9区が設定されているのは、C地点のみであるため、ここで報告した。つまりC地点出土と考えられる磨製石鎌は2点あるのだが、旧報告にある「C地点の遺物としては、粘板岩製の磨製石鎌1箇」という記

述と矛盾する。48は写真から確実にC地点出土ということがおさえられるため、49は他の地点から出土した可能性がある。

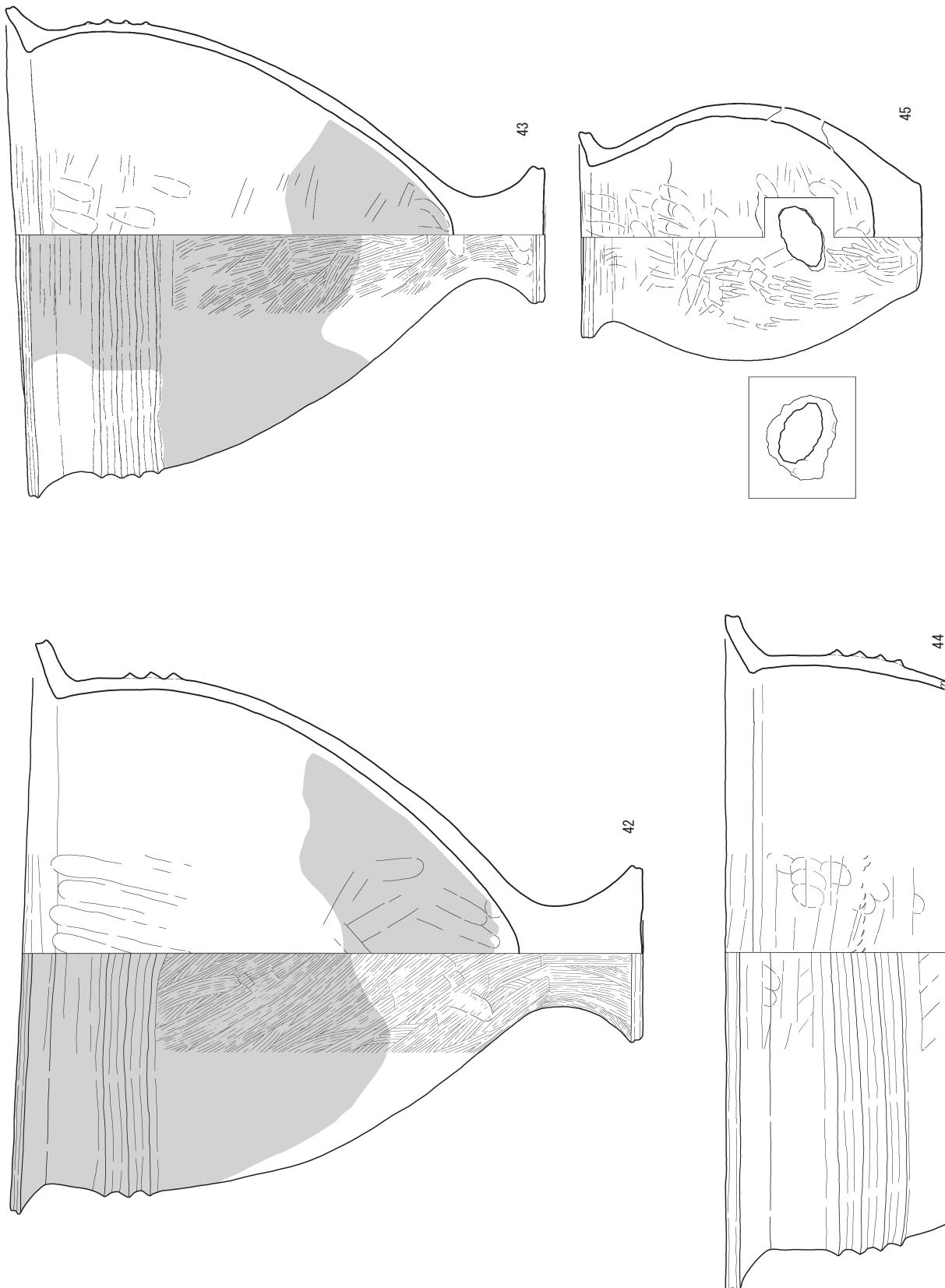
50～52は軽石製品である。50は正面中央に長さ18.0cm、幅7.5cm、深さ11.3cmの凹穴をもつ。平面形態は、楕円形、断面形態は凹状を呈する。右側面にも凹みを4か所確認される。これまで陰石と報告されてきたものである（河口1978など）が、前述の出土状況から陰石ではなく容器の可能性も否定できない<sup>(註2)</sup>。51は勾玉である。両側から孔が穿たれている。下半部は後世、欠損した可能性も考えたが、風化の具合が明らかにガジリと異なるため、意図的に磨いて整形したのではないかと思われる。52は旧報告で「円柱形軽石製品」や「まるい棒状の加工品」とされたものである。両端部に加工を施し、凸状の突起が形成されている。ソケット状のものと組わせて使用した可能性等が考えられるが、用途は不明である。

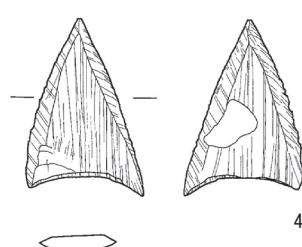
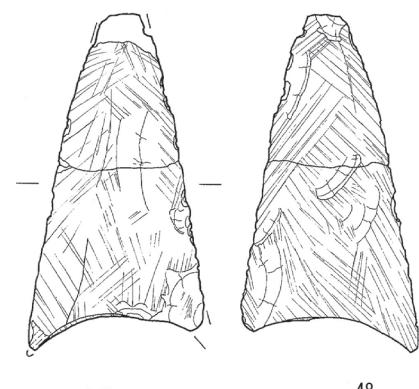
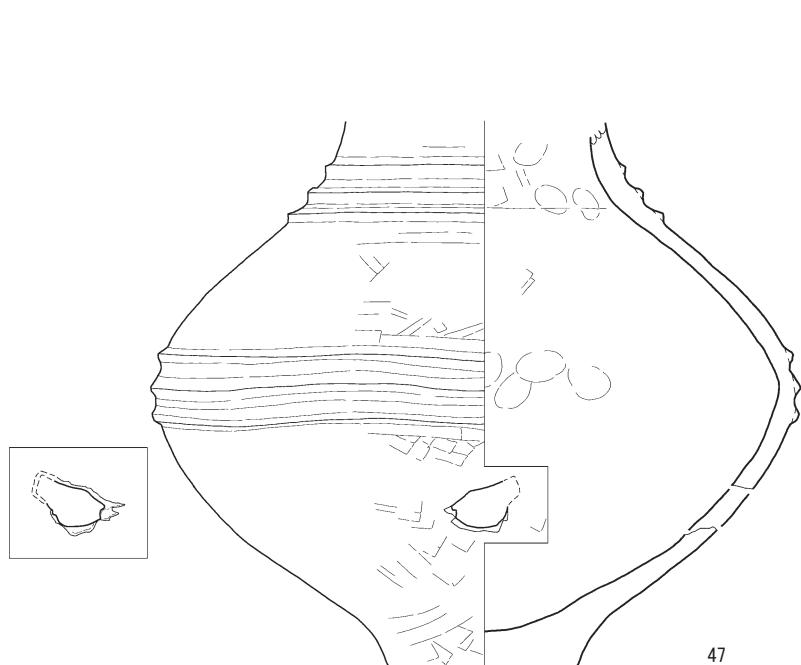
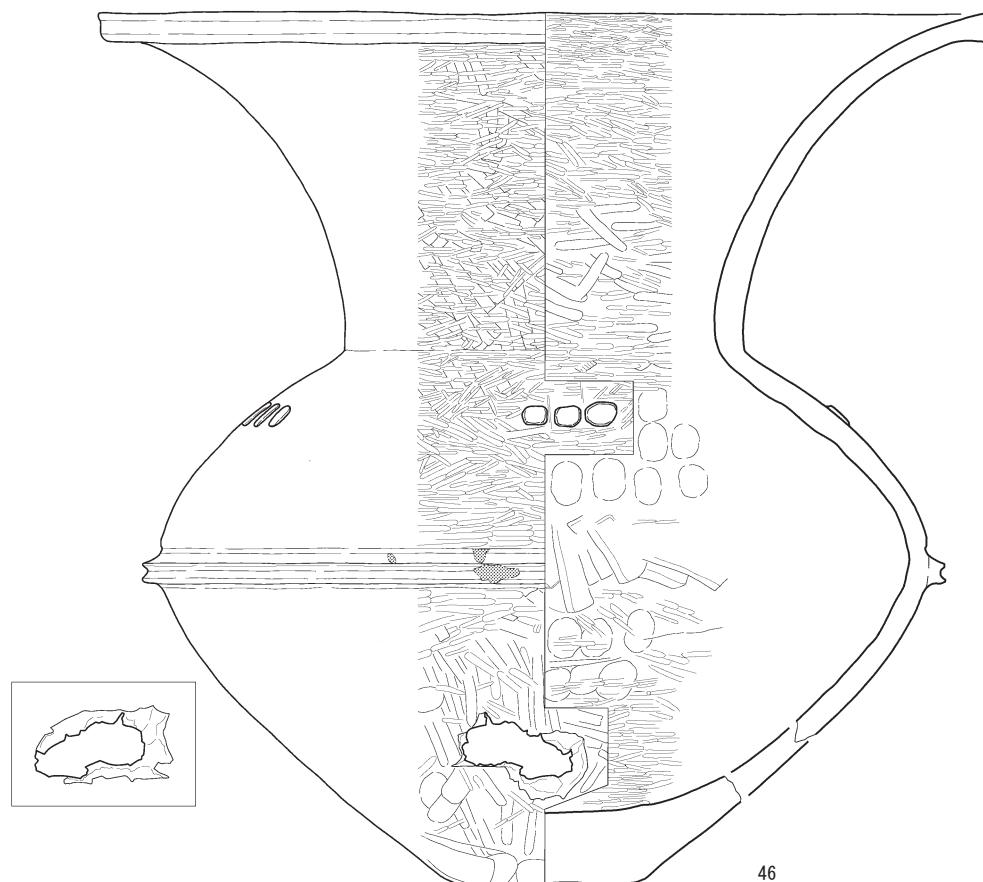


第26図 C地点出土土器実測図①

第27図 C地点出土土器実測図②

10cm  
0 ( 1:3 )

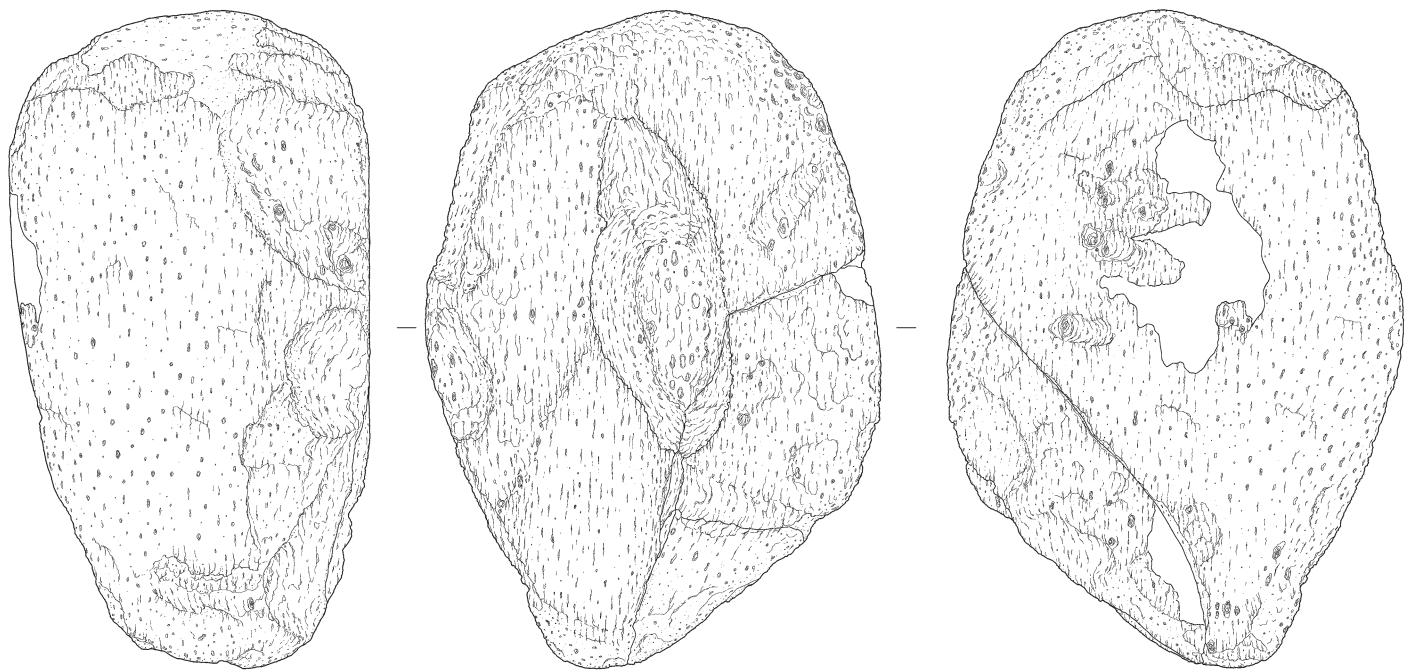




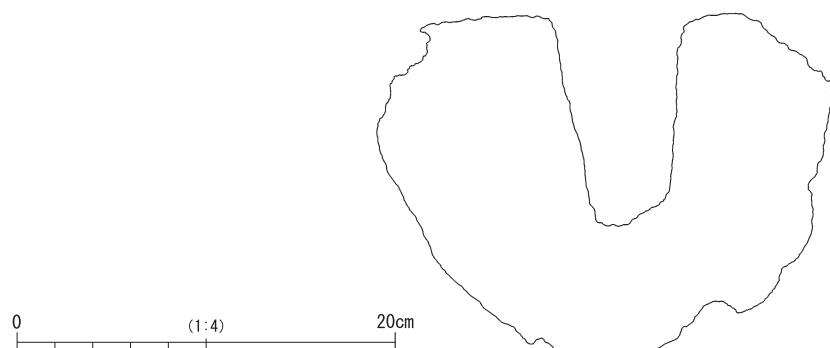
0 ( 1:3 ) 10cm  
46・47

0 ( 4:5 ) 5cm  
48・49

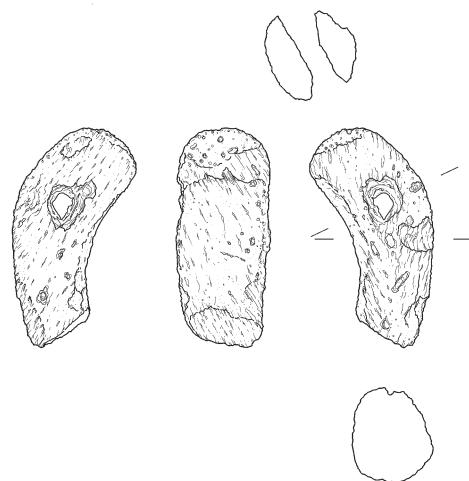
第28図 C地点出土土器実測図③及び石器・石製品実測図①



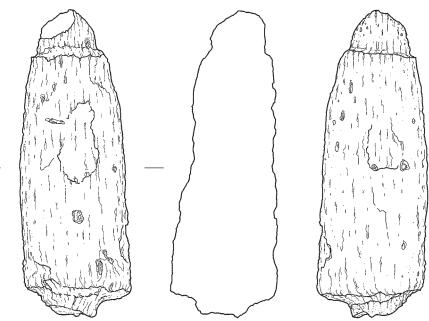
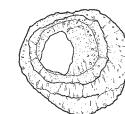
50



50



51



52 0 (1:2) 5cm

第29図 C地点出土石器・石製品実測図②

51・52

### 3 D地点（第3次調査）出土遺物

53～72は、錦江町教育委員会が所蔵する山ノ口遺跡出土遺物である。60～62は、これまでD地点（第3次調査）出土遺物として、報告されたものである。他の遺物については、どの地点から出土したものか確証は得られていない。しかし、出土状況図（第15図）や出土写真に類似する遺物が多数みられたことなどから、錦江町教育委員会が所蔵する遺物は、D地点出土遺物の可能性が高いと判断し、本項で詳述する。ただし、D地点の調査が行われた第3次調査時、再び砂鉄採掘作業も行われているため、一部、昭和36年の砂鉄採掘時の出土遺物も含まれている可能性があることも加えて指摘したい。

#### （1）土器（第30～32図）

53は甕である。脚台から、ゆるく内湾する胴部をもち、大きく外開きする口縁部に至る。口縁部下には3条の突帯を巡らす。口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部内面には明瞭な稜がみられるが、外面での境は明らかでない。口唇部および底部縁辺は凹線状となる。D地点からはもう1点甕が出しているが、所在不明である。

54～59は壺である。54は底部から胴下半部はストレートに外開きし、胴部中央から胴上半は球形に近い。胴部最大径の上よりも、2条の突帯を巡らす。胴上部と頸部の境は、形としては境が明瞭でないものの、3条の突帯を巡らすことから境が明らかである。口縁部は、やや垂れ下がった逆L字状を呈する。鋤先状の整形を意識したものであろうか、内面に口縁部を貼り付けた際の突起が確認される。口唇部は広く面取りし、凹線状となる。底部付近には、孔が外面から穿たれている。55は底部から胴下半部はストレートに外開きし、胴部中央から胴上半は球形に近い。胴部最大径より上に3条の突帯を巡らす。頸部の最も締まった部分から下には、4条の突帯を巡らす。口縁部は、やや垂れ下がった逆L字状を呈する。鋤先状の整形を意識したものであろうか、内面に口縁部を貼り付けた際の突起が確認される。口唇部は広く面取りし凹線状となる。口縁部の内側は、鋤先状の整形を意識している。外面の調整はハケ目状の工具によるが、ミガキ様のナデに近い光沢をもつ。胴部から底部にかけて何か所か欠けているので、孔が穿たれていたかどうかは不明である。56は小型壺である。安定した底部から内湾気味に胴部中央に至る。器高のほぼ中央に胴部最大径があり、1条の突帯を巡らす。胴上部と頸部の境は、はっきりとしない。口縁部は、水平方向に伸びる逆L字状を呈する。胴下半部には、孔が外面から開けられている。57は大型長頸壺である。口縁部付近が欠損しているものの、ほぼ全体の形が残っている。不安定な底部から胴下半部はストレートに外開きし、胴部最大径は上位にあって、胴上部は球形状となる。頸部との境付近には、3条

の突帯を巡らす。突帯の断面形状は、三角形ではなく台形に近い。頸部はやや内湾気味に外開きしながら口縁部へ至る。頸部内面の途中には、工具が当たった痕跡があり、口縁部を調整する際に付いた可能性もある。胎土は花崗岩質を基本とするものの、金色の雲母は目立たない。胴部最大径付近には、焼成後に孔が外面から開けられている。胴部の一部が欠けているが、故意によるものかどうかは不明である。本資料は同時期の南九州にはあまりみられない器形であり、山ノ口遺跡出土品であるかどうかの確証は得られていない。ただし、穿孔の仕方など共通点も多いことから、当遺跡の出土品として扱った。58は広口壺である。安定した底部から球形に近い胴部をもち、境が明瞭で締まった頸部から大きく開く口縁部へ至る。口縁部付近は水平に近く、口唇部は広く面取りし、凹ませている。胴部最大径よりも口縁部が広いことが特徴である。底面はわずかに上げ底状となり、同じ方向に指ナデされる。底部縁辺はわずかな反りがみられる。胴下半部には、孔が外面から開けられている。59は不安定な底部から球形に近い胴部をもち、締まった頸部から大きく開く口縁部へ至る。頸部と口縁部および胴部境は明瞭でない点が特徴である。外面は全体的に摩耗が著しく、調整は明らかでない。また、口唇部も広く面取りをしているものの、凹線状になるかは不明である。胴部の一部が欠けているが、故意によるものかは確認できない。

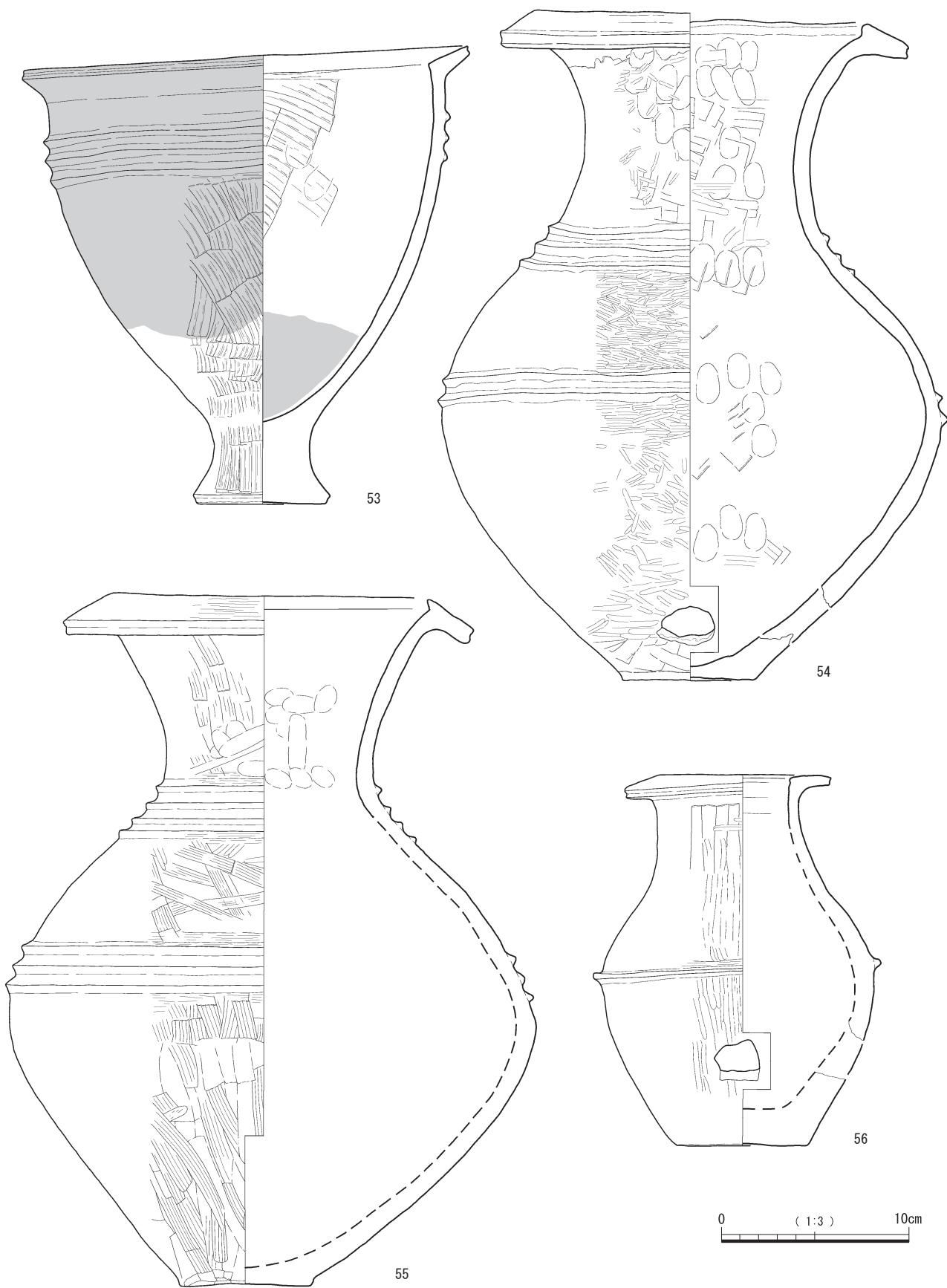
60は高杯である。椀形の杯部とラップ状に開く脚部を有する。杯部と脚部の接合部分には、円盤状というよりは、Uの字状に近い粘土塊を充填している。外面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。また、内外面に赤色顔料が塗付されている。

61は小型の鉢である。安定した底部から球形に近い胴部を経て、内湾する口縁部へ至る。口唇部は平坦面を有する。内外面には、赤色顔料が塗布されている。また、胴部下半の底部付近に、内側から孔が穿たれている。

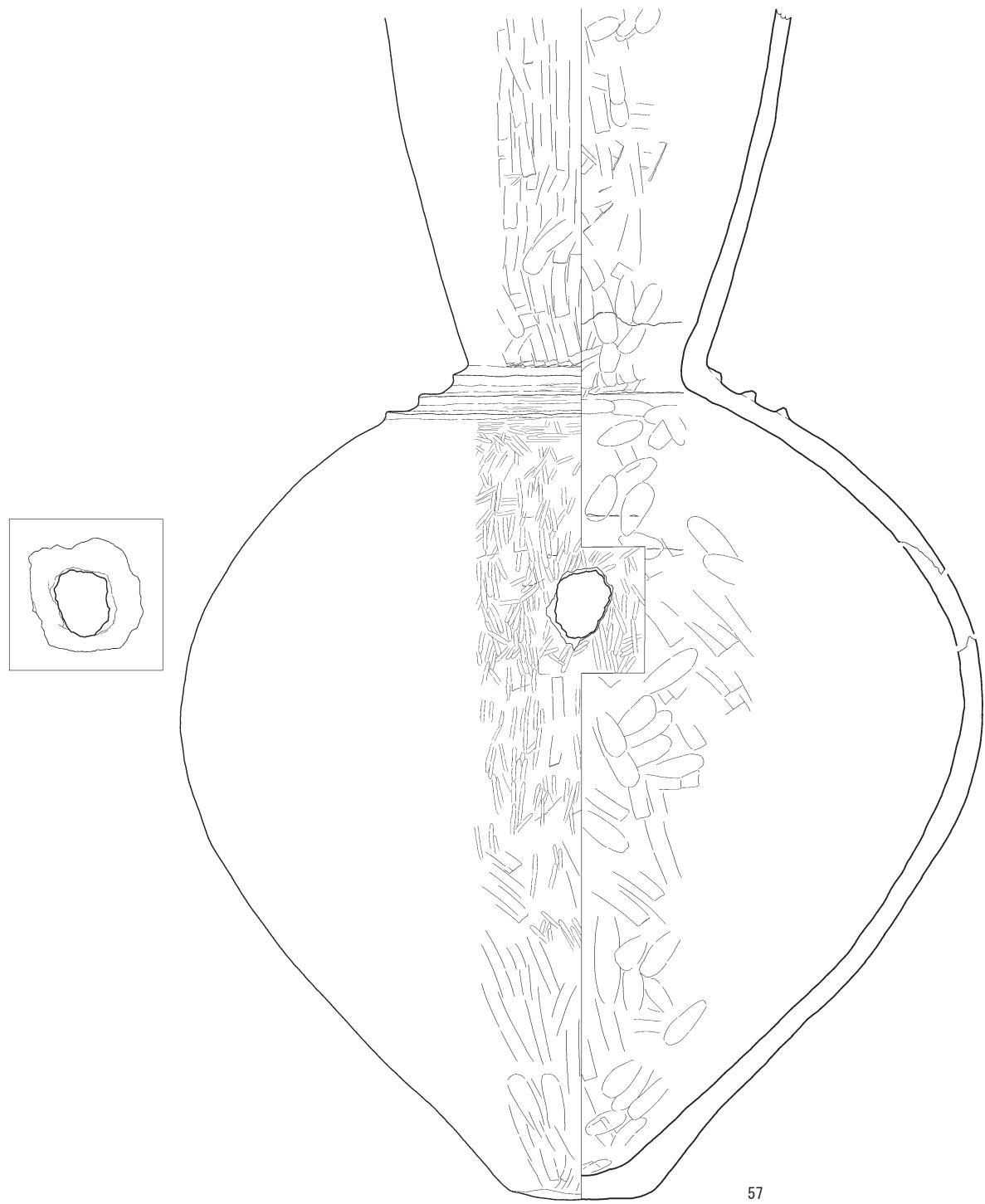
#### （2）石製品（第33～35図）

62～72は、軽石製品である。62は、旧報告で「顔面を思わせる軽石加工品」との記述があるものである。平形態が橢円形の軽石を素材とする。断面形態は舟形状を呈し、一面は平坦である。この平坦面は、人為的なものか、元来の軽石の形態か、明瞭な擦痕がみられないと判断できなかった。また、平坦面には目を思わせる二箇所の人為的な円形の凹みが確認される。両側面中央付近では、硬質の工具を用いて、抉りを入れている。

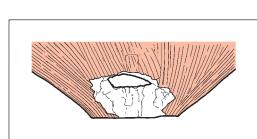
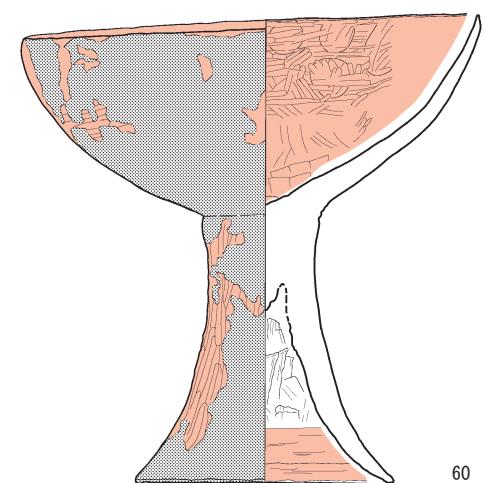
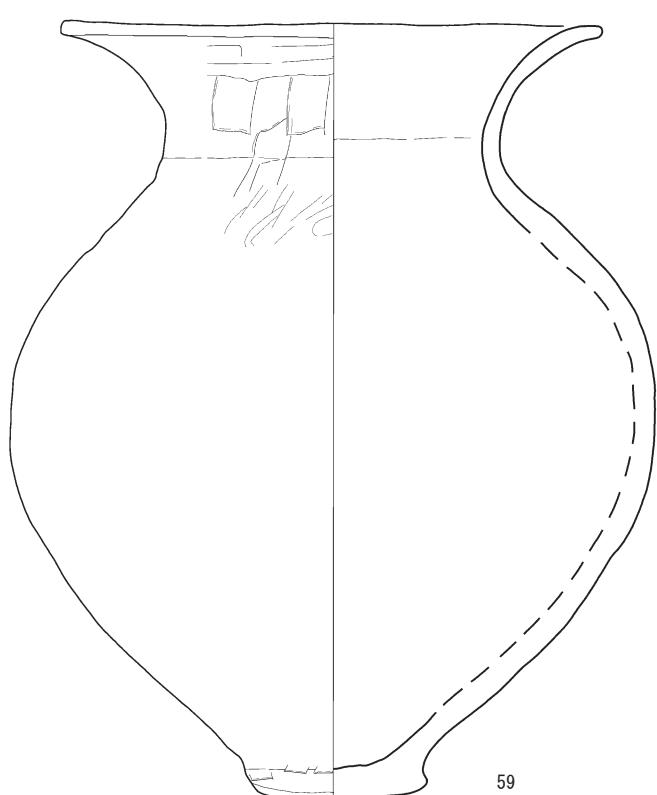
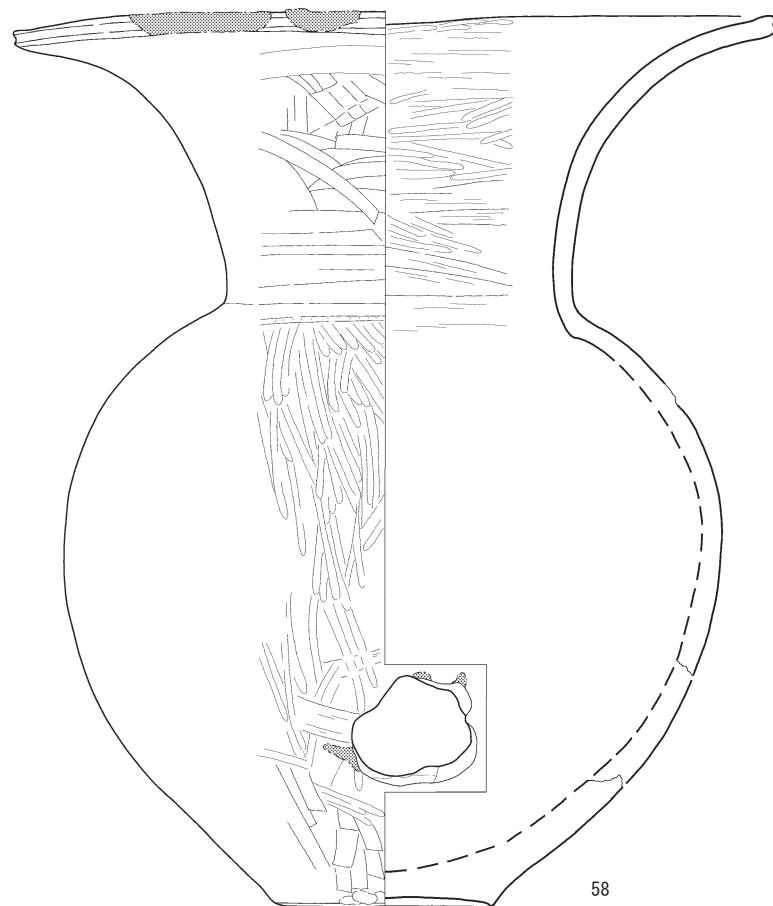
63～65は、旧報告で「曲玉状の加工品」との記述があるものであろうか。63は勾玉状の形をしたものであり、断面はほぼ円形である。両方の端部は平坦面をつくり出している。丁寧な加工は、全周に及んでいる。穿孔はみられない。64は勾玉状の形をしたものであり、腹部を除き全体的には明瞭な加工痕はみられない。腹部に横方向



第30図 D地点出土土器（錦江町所蔵）実測図①



第31図 D地点出土土器（錦江町所蔵）実測図②



第32図 D地点出土土器（錦江町所蔵）実測図③

からの加工を間隔をおいて施してあり、獸形勾玉を意識しているとも考えられる。穿孔はみられない。65は幅広ではあるが、形状的には勾玉状の形をしたものである。両方の端部は平坦に面取りし、背部は中央と両側に分けて面取りしてある。腹部の加工は上から下に行い、側縁部は軽く面取りしてある。穿孔はみられない。

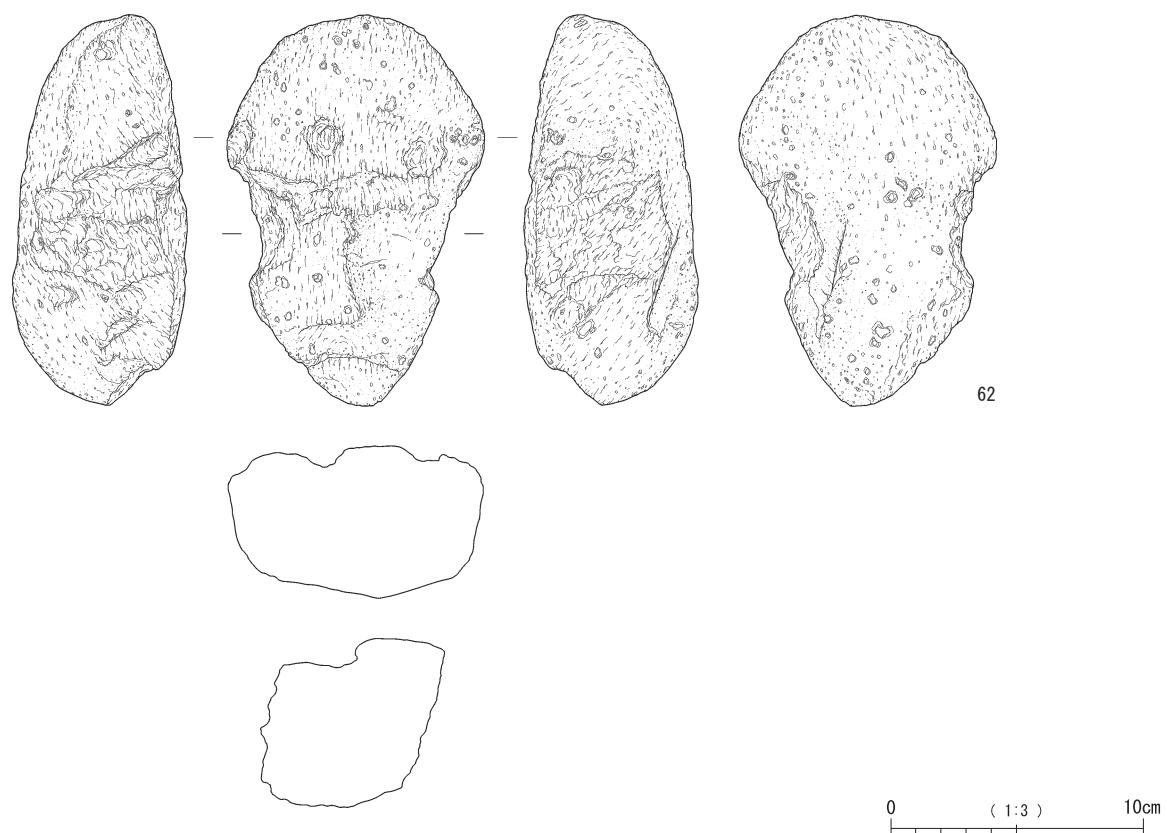
66・67は、陰石状を呈する輕石製品である。66は3つに割れた状態で保管されていた。不定形の大きな輕石を用いたもので、粗削りではあるものの一面をつくり出している。この面の中央部を大きく抉り出しておき、深いところで5cmを測る。工具の痕跡から、幅約5cmの手斧状の鉄製品が使われたと推察される。ほぼ半分に割れていると考えられ、割れ目の風化は著しい。67は不定形な輕石を用いている。平坦な一面の中央部を、抉ることによって凹みをつくり出している。凹みは深さ1.4cmを測る。

68・69は略半月状を呈する輕石製品である。68は、抉りを除いて特別に加工した部分は認められない。側面の端部寄りに、橢円形を呈する、深さ3cmの抉りをもつ。69は特別に加工した部分は認められないが、表面の端部寄りに敲打によるものと思われる凹みが確認できる。ま

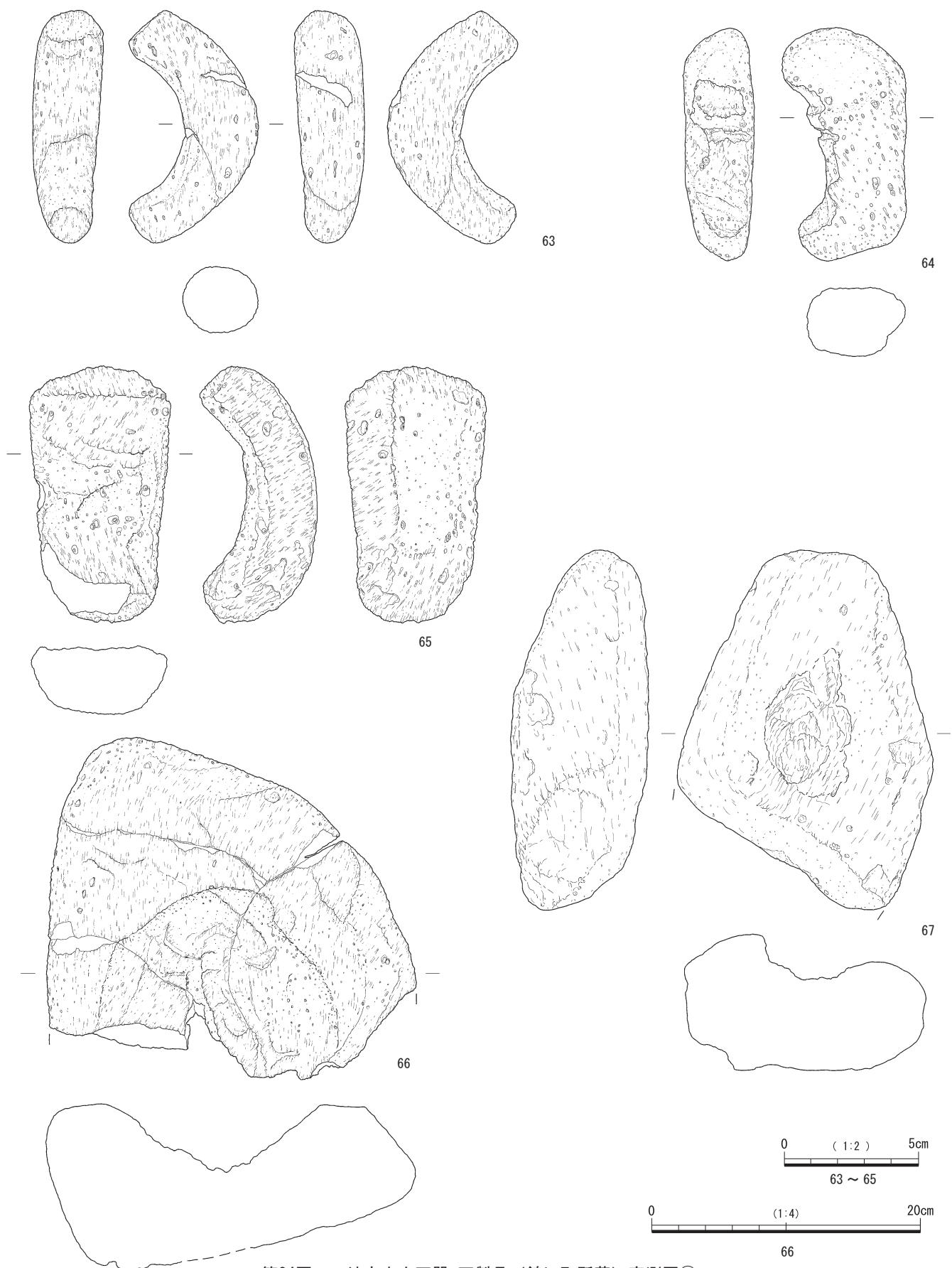
た、一面が赤色化しており、披熱した可能性もある。70は大部分が欠損しているため、本来の形状は不明である。両面に平坦面をつくり出しており、側面と比較して非常に平滑である。意識して磨面をつくったのか、使用痕としての磨面なのかは明らかでない。割れ口の風化が著しいことから、当時故意に割られたか、その後のかなり以前に割れたと思われる。

71は半球形状で一面が浅い凹面状となっている。全周とも、明瞭な加工痕はみられない。72は略三角形を呈し、正面に2か所の加工状の痕跡がみられる。一つは上下から切り込みを入れたものである。もう一つは2mm幅の串状の快りである。ただし、両方とも明瞭なものではなく、自然の可能性もある。

これらに加え、もう1点錦江町教育委員会が所蔵している輕石がある。巻頭写真3右下の写真の一番上にある輕石である。略測、長さ19cm、幅21cm、厚さ12cmを測る。全周にわたって、特別な加工はみられないため、図化は行わなかった。ただし、平坦な両面は、噴火時の発泡によると考えられる石畳状となっていることから、意識的に遺跡に持ち込んだ可能性がある。



第33図 D地点出土石器・石製品（錦江町所蔵）実測図①



第34図 D地点出土石器・石製品（錦江町所蔵）実測図②



第35図 D地点出土石器・石製品（錦江町所蔵）実測図③

#### 4 A 地点（昭和33年砂鉄採掘時）下層出土遺物

A 地点遺物包含層は地表下 1 m の旧砂浜と思われる砂層上部と、地表下約 3 m の同砂層の深部との上・下 2 層があると報告されている。そのうち下層から出土した遺物について詳述する（第36図）。

73は甕である。口縁部は S 字状に屈曲する。頸部に強いヨコナデを施すことで、口縁部と胴部の境が明瞭になっている。底部は欠損している。内外面に煤が付着している。74は壺である。口唇部は強くナデられ、凹線状となる。頸部がきつく締まり、肩部が張る形態である。頸部～肩部外面と口縁部内面に 3～5 本で 1 組の沈線文が施されている。75は小型壺である。口縁部は外反し、ラッパ状に開く。胴部は球形状を呈する。底部は小さな脚台状となる。胴部中央付近に外面から孔が穿たれている。76は台付鉢である。杯部はボウル状を呈する。口縁部は大きく外反し、内面に段を有する。器面全体に黒色顔料が塗られ、外面に赤色顔料で鋸歯文等の文様を描かれている。口縁部内面には、黒色顔料で鋸歯文を描いている。脚台部上位に 2 条の突帯を貼り付け、その下に方形の透孔を設けていたようである。また、円盤充填の様子も窺える。なお、内面には「昭和三十三年六月二十八日 大根占町馬場山ノ口水田ノ地下十尺砂鉄層ヨリ單独出土 同地点地下三尺砂丘層ヨリ彌生式土器 軽石製人形 家形 軽石製曲玉模造品併出 シダ化石出土」と墨で書かれており、当時の出土状況を窺い知ることができる。

#### 5 A 地点（昭和33年砂鉄採掘時）上層出土遺物

A 地点遺物包含層のうち、砂層上層から出土した遺物について詳述する。「山之口 坂」や「山之口坂福」の注記があるものが多い。おそらく「坂」「福」は発見者の坂元貞夫氏、福苗久光氏を表していると思われる。

##### （1）土器（第37～40図）

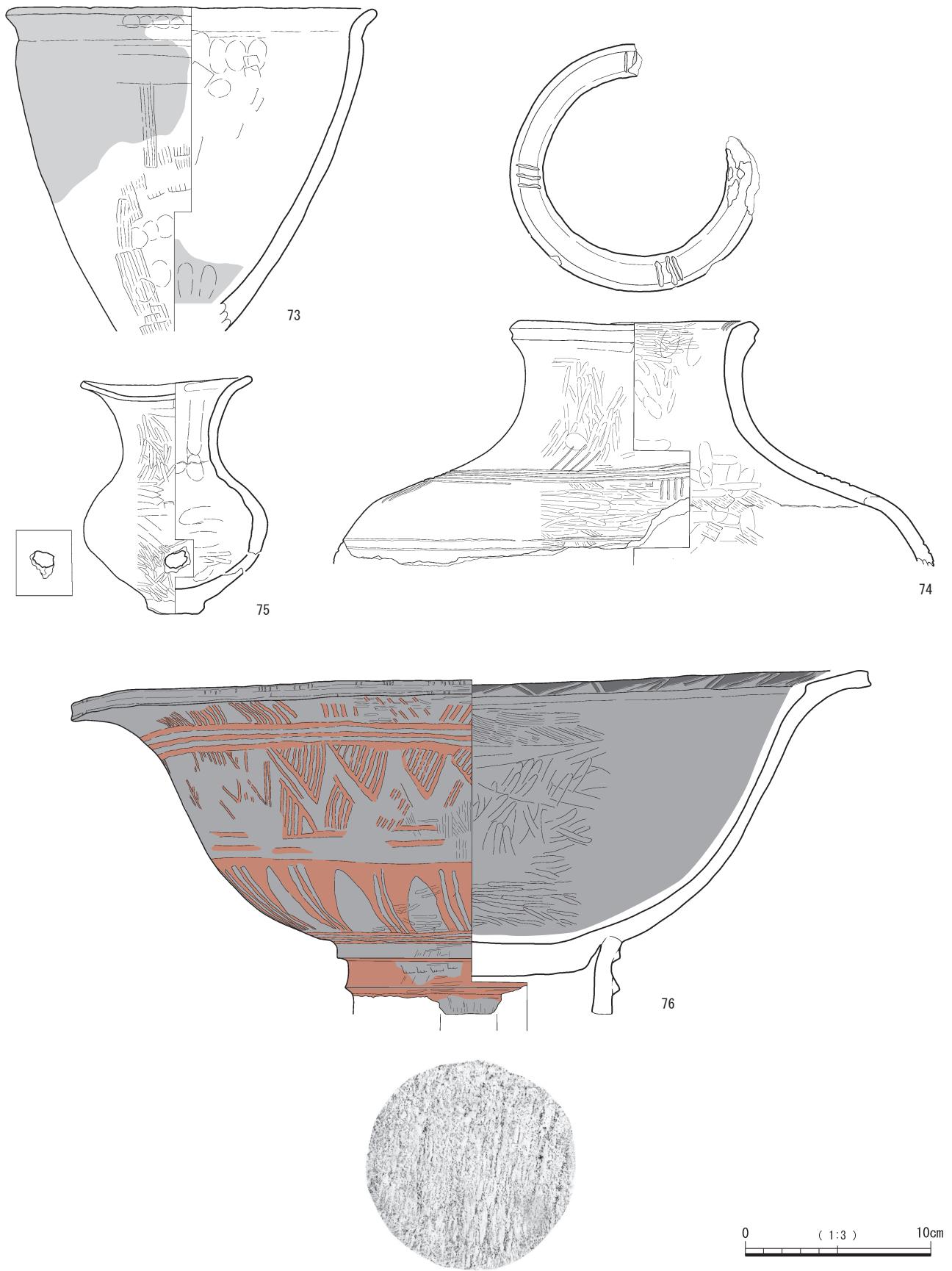
77～81は甕である。77の口縁部は、斜め上方へ伸びる逆 L 字状を呈する。口縁部下には、3 条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は凹線状となる。外面に煤の付着が確認できる。78の口縁部は、斜め上方へ伸びる逆 L 字状を呈する。口縁部下には、1 条の突帯を巡らす。充実脚台を有する。口唇部及び脚台端部は凹線状となる。外面に煤の付着が確認できる。外面胴部下位の調整はミガキである。79の口縁部は、斜め上方へ伸びる逆 L 字状を呈する。口縁部下には、1 条の突帯を巡らす。充実脚台を有し、底面はやや上げ底を呈する。口唇部及び脚台端部は凹線状となる。内・外面に煤の付着が確認できる。外面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。80・81は胴部下半～脚台部片である。いずれ

も内面に煤が付着している。81の脚台端部は凹線状となるが、80の脚台端部は凹線状とならない。

82～88は壺である。82の口縁部は、やや垂れ下がった逆 L 字状を呈する。口唇部は凹線状となる。胴部はあまり張らず、卵形に近い形狀を呈する。底部は平底である。また、胴下半部には、孔が外側から 2 か所開けられている。外面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。また、内面には種子圧痕が確認される。83の口縁部は、やや垂れ下がった逆 L 字状を呈する。口唇部は凹線状となる。胴部は球形に近い形狀を呈する。底部は平底である。また、胴下半部には、孔が外側から開けられている。外面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。84は口縁端部が欠損している。口縁部は外側へ開く。頸部と胴部の境は明瞭で、胴部は球形に近い形狀を呈する。底部は不安定な平底である。胴下半部には、孔が外側から開けられている。おそらく 2 回以上の打撃で穿たれたものと思われる。また、内面に種子圧痕が確認できる。85は広口壺である。口縁部は朝顔形に大きく開く。胴部は偏球状を呈し、胴部中央に 1 条の突帯を巡らす。胴部中央と胴下半部の 2 か所に孔が内側から開けられている。底部は平底である。外面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。86は口縁部～頸部片である。口縁部は、やや垂れ下がった逆 L 字状を呈し、内面には口縁部を貼り付けた際の突起が確認される。口唇部は、凹線状となる。頸部には、現状 6 条の突帯を巡らしているが、頸部より下部が欠けているため、本来の突帯の条数は不明である。外面には、部分的に暗紫ゴラの付着が確認できる。87は胴部中位～底部片である。胴部は、球形に近い形狀を呈する。底部は平底である。88は無頸壺である。口縁部は斜め上方へ伸びる逆 L 字状を呈する。一部口縁部が剥落しており、擬口縁となっている。胴部は球形に近い形狀を呈する。底部は上げ底となっている。胴部中央には孔が外面から穿たれている。

89～91は鉢である。89・90の口縁部は水平方向へ短く伸びる逆 L 字状を呈する。底部は厚く、脚台状になっている。89の脚台端部より 90 の脚台端部のほうが外側へ張り出す。90は外面に煤が付着している。91は小型の鉢である。器形はコップ状を呈する。口縁部は逆 L 字状を呈し、水平方向に延びる。底部は厚く、脚台状を呈する。外面に煤が付着している。

92・93は台付鉢である。口縁部は斜め上方へ伸びる逆 L 字状を呈する。口縁部下に 3 条、脚台部上位に 1 条の突帯を巡らす。脚端部にも 1 条の突帯を巡らし、その上に連続したハの字状の沈線を施す。円盤充填技法も確認できる。口縁部下の 3 条の突帯の下に外面から孔が穿たれている。93は脚台部片である。脚台部上位と脚端部にそれぞれ 1 条の突帯を巡らす。脚台部内面は黒色処理が施されている。94は小型の台付鉢である。口縁部は水平



第36図 A地点下層出土土器実測図

方向へ伸びる逆L字状を呈する。口縁部下に2条の突帯を巡らす。

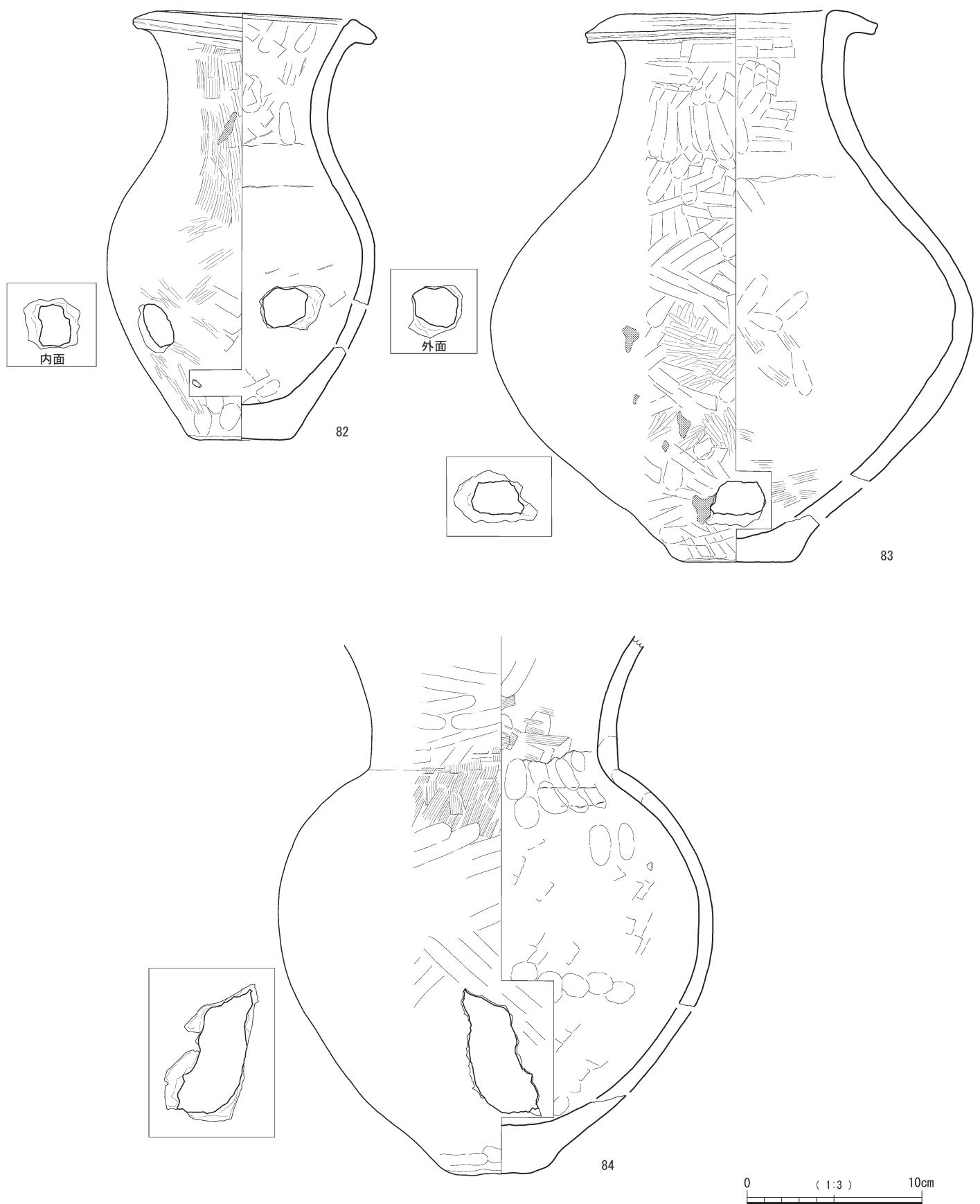
95は高杯の脚部である。脚柱部が長く、脚柱部と脚裾部の境に1条の突帯を貼り付けている。外面は剥落が激しいが、わずかながら縦方向のミガキ調整が確認できる。

96はジョッキ形土器である。口縁部から胴下部にかけて把手がつく。外面及び口縁部内面に赤色顔料が塗布さ

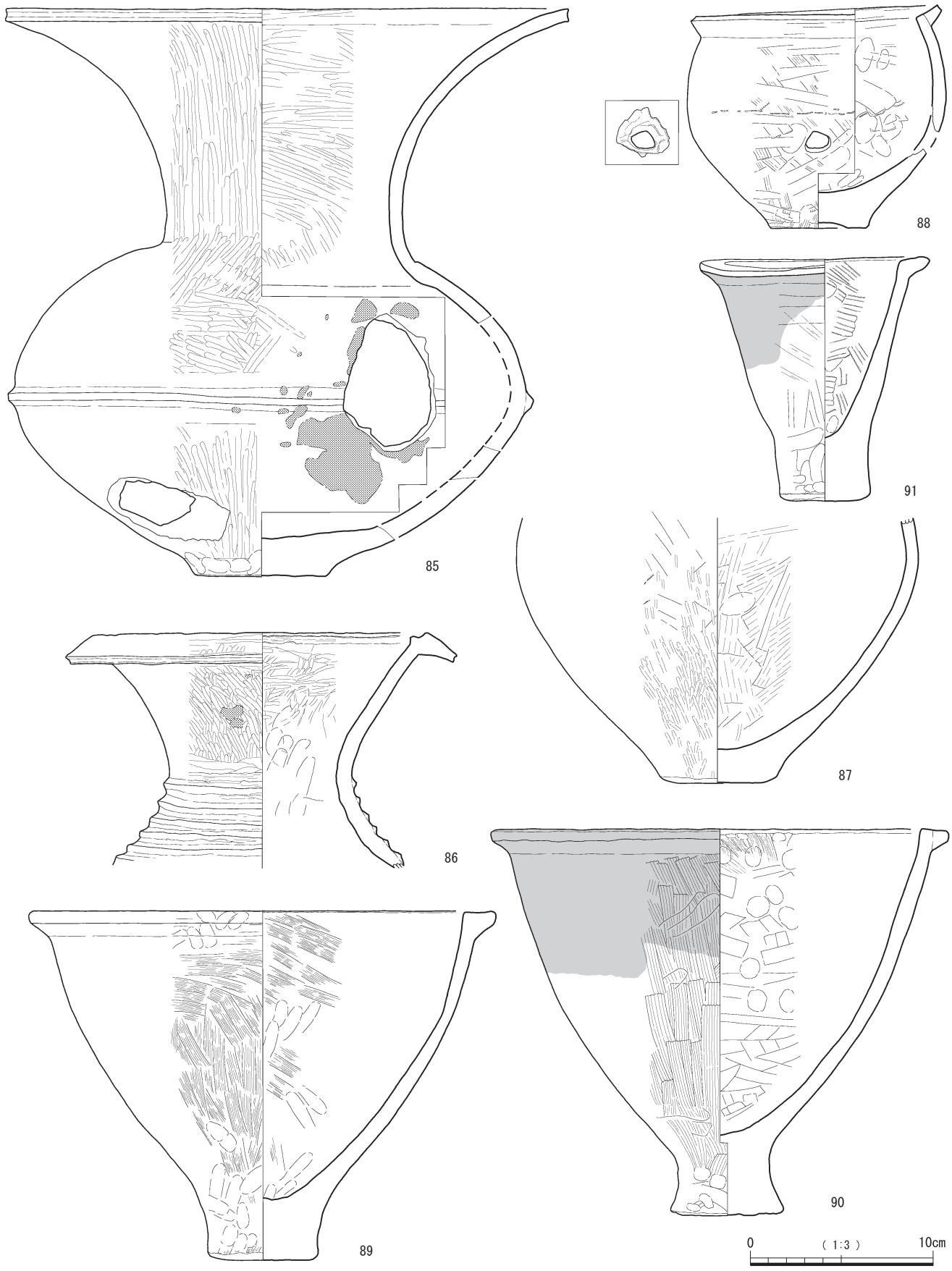
れている。旧報告では「下方より1/4の箇所に小孔をあく」と記述され、実測図にも表現されているが、現在そのような小孔は確認できなかった。石膏を用いて復元がなされているため、小孔部分が埋められてしまった可能性がある。



第37図 A地点上層出土土器実測図①



第38図 A地点上層出土土器実測図②



第39図 A地点上層出土土器実測図③



第40図 A地点上層出土土器実測図④

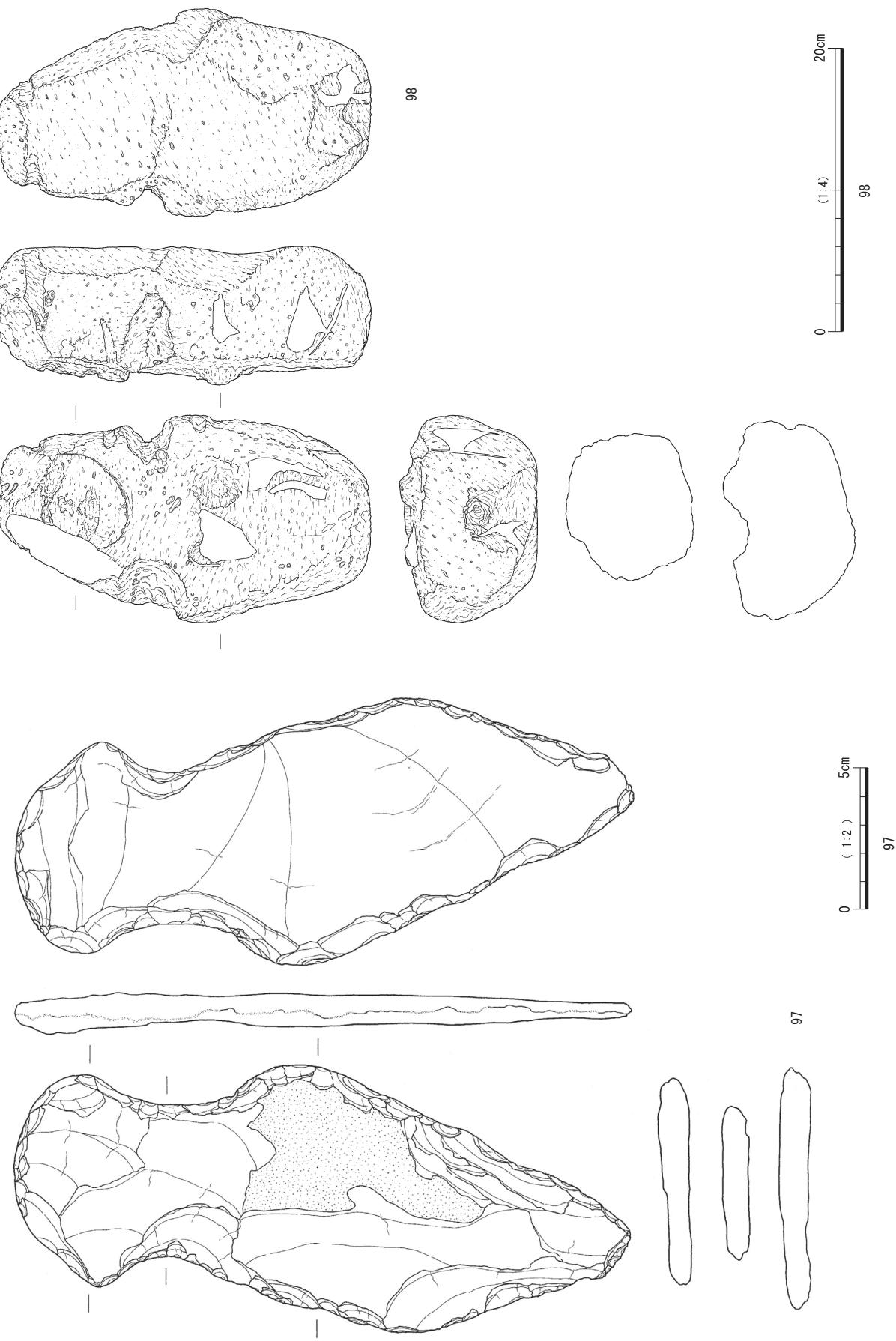
## (2) 石器・石製品 (第41~43図)

97は頁岩製の打製土掘具である。基部は両側から抉りを入れて造り出している。先端は細く仕上げている。全体的に磨滅による光沢がある。装着時のズレにより生じた可能性がある。

98~102は軽石製品である。98は女性を表した岩偶である。顔面部分を一段高く掘り出し、目と口は凹め、鼻を隆起させ、顔を表現している。また、顔部分の側面に

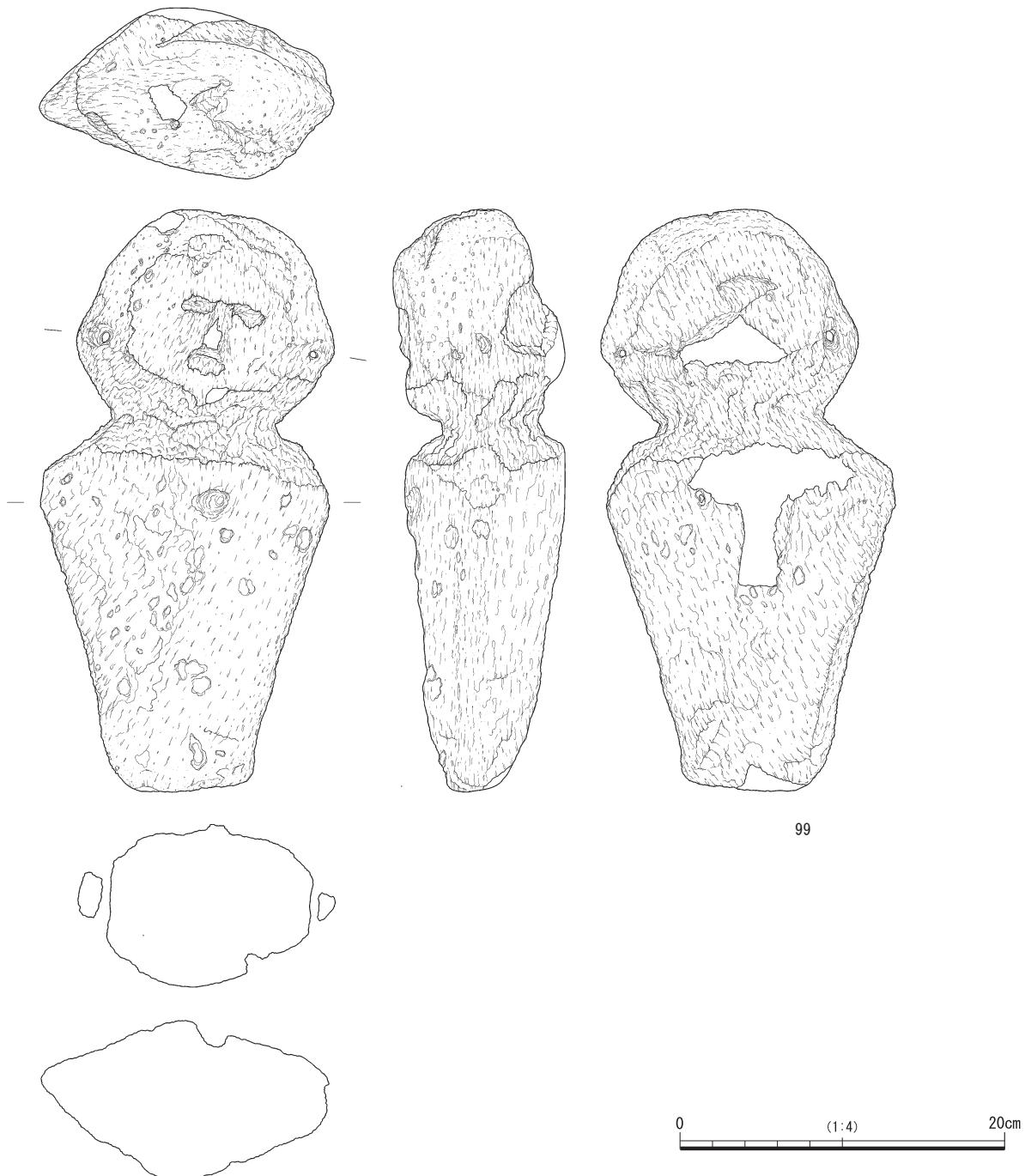
刻みを入れることで髪を表現している。中央付近には、両側面から抉りが入れられ、顔と胴体が明確に区分されている。胴体中央には乳房を表現した突起が2か所確認される。下面には直径2cm、深さ4cmの穴が穿たれている。手足の表現は省略されている。99は男性を表した岩偶であろうか。98と同様、顔面は一段高く掘り出され、目と口は凹め、鼻を隆起させ、顔を表現している。両耳部分には孔が穿たれている。おそらく、耳飾りを表現し

第41図 A地点上層出土石器・石製品実測図①



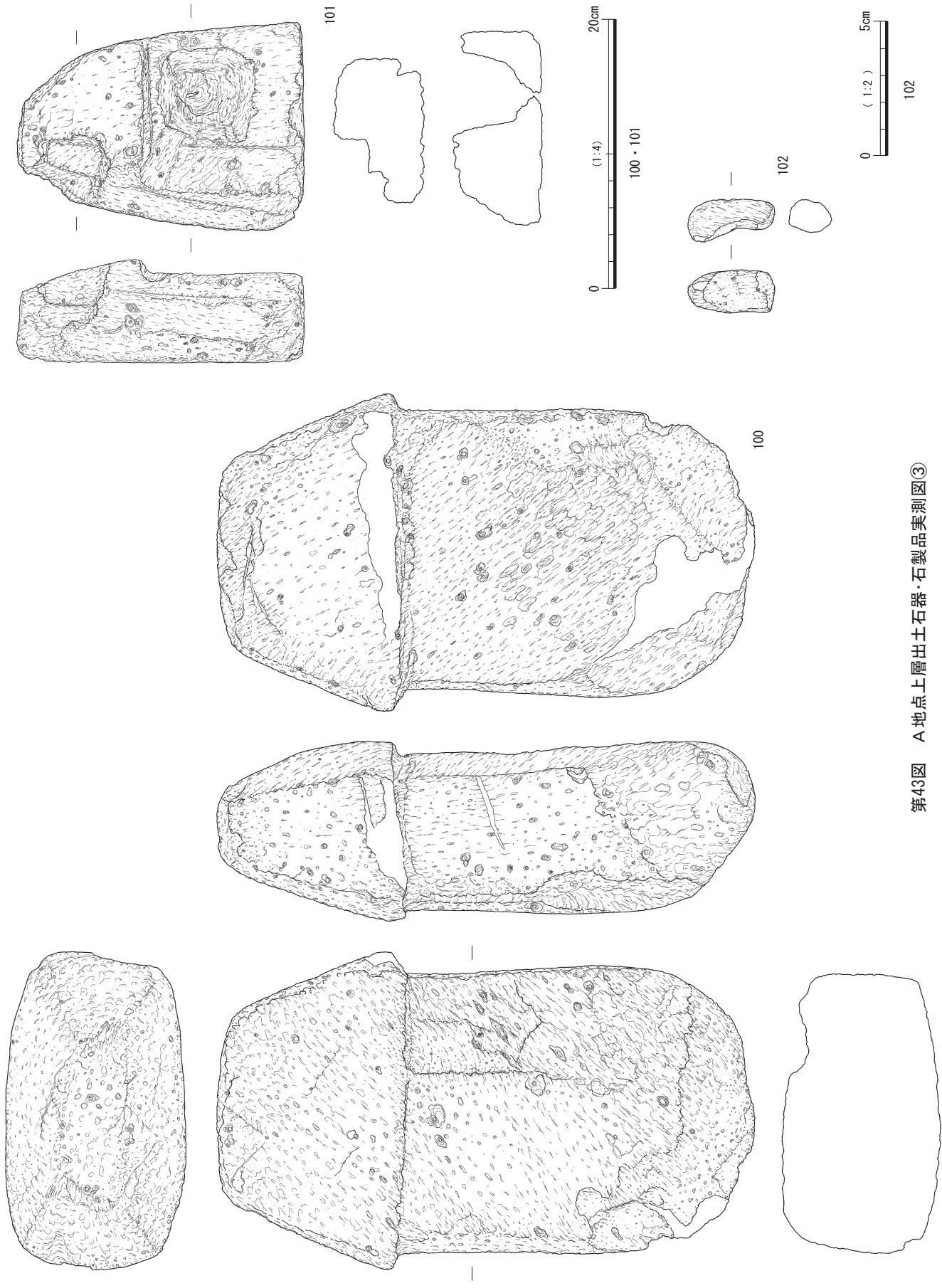
ているのであろう。胴体の形態は断面が菱形を呈し、下方へいくにつれ次第に窄まる。胴体中央部分に、直径2 cm、深さ1.5cmの穴が穿たれている。手足の表現は省略されている。100は、旧報告で石棒とされていたが、後に河口氏が軽石製家と訂正している（河口2005）ものである。家形とした場合、庇や窓と思われる表現がなされている。屋根は寄棟である。下端部の整形は粗いため、地中に埋めて使用した可能性が考えられる。101は家形の軽石製品である。線刻や穴により、庇や窓と思われる

表現がなされている。線刻は非常にシャープな加工である。102は勾玉状を呈する。孔は穿たれていない。下半部は欠損している。第1次調査の旧報告で写真が掲載されているが、A地点のものかB地点のものか判然としなかった。



第42図 A地点上層出土石器・石製品実測図②

第43図 A地点上層出土石器・石製品実測図③



## 6 A' 地点（昭和33年砂鉄試掘時）出土遺物

B地点の南西に隣接した地点で試掘が行われた際出土した土器である。第44図103は高杯である。口縁部は大きく外反する。杯部中央には1条の突帯を巡らす。また、杯部内面には把手状の粘土紐が貼り付けられている。脚柱部は円柱状で、脚裾部はラッパ状に開く。外面及び杯部内面に赤色顔料が塗布されている。旧報告では、土器が4点出土したとあるが、103以外の残り3点の土器については詳細不明である。

## 7 昭和36年5月砂鉄採掘地点出土遺物

第44図104は昭和36年のメモ帳に「砂鉄採掘地点ヨリ出土」とある軽石製勾玉である。丁字頭で両側から穴が穿たれるが貫通しない。穴の周囲に線刻を巡らす。

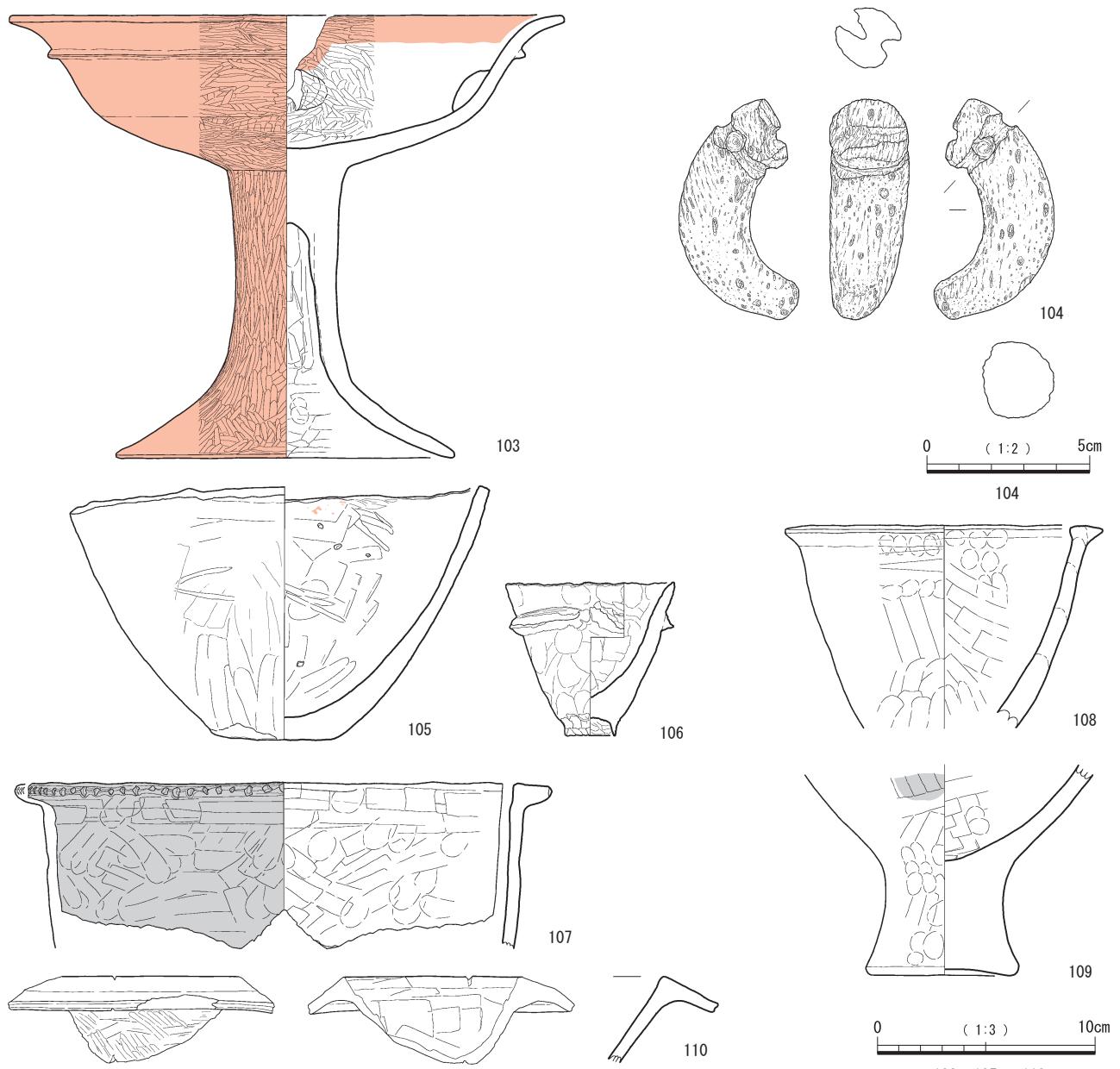
穿たれるが貫通しない。穴の周囲に線刻を巡らす。

## 8 山ノ口遺跡東水田表採遺物

「山ノ口、東、水田入口共伴」と注記された遺物である。第44図105は鉢である。やや不安定な平底の底部から、外側へ直線的に開く。口縁部内面に赤色顔料が、内外面の器面に多数の種子圧痕が確認された。第44図106はミニチュア土器である。壺形で口縁部下に1条の突帯を巡らす。底部は脚台状を呈する。

## 9 出土地点不明の遺物

注記より本遺跡から出土したことは分かるが、どの地点から出土したか判然としない遺物をまとめた。



第44図 その他地点及び出土地不明遺物実測図①

### (1) 土器 (第44図107~110)

107~109は甕である。107は口縁部に刻目突帯文を有する。外面に煤が付着する。108は小型の甕である。口縁部は水平方向へ短く伸びる逆L字状を呈する。109は甕の底部片である。充実脚台である。外面に煤が付着する。110は壺の口縁部片である。口縁部はやや垂れ下がり逆L字状を呈する。口唇部は凹線状となる。

### (2) 石製品 (第45図)

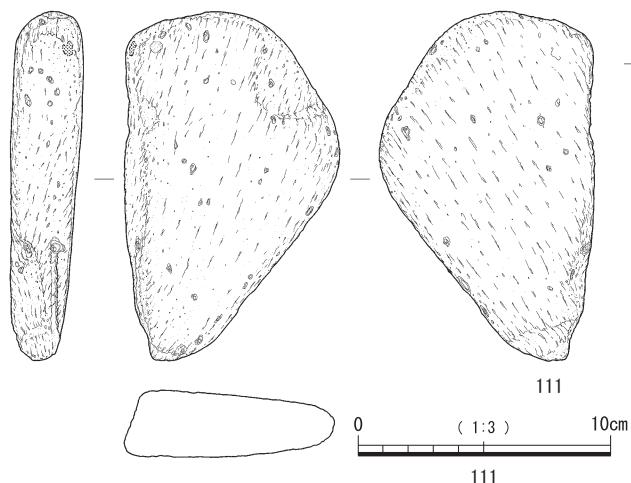
111~113は軽石製品である。111はほぼ全面研磨されている。112は溝状の凹みが確認される。113は上方から方形の穴を穿っている。

## 10 その他の遺物

注記等がないが、器形や胎土、石材等から本遺跡出土の可能性が高いものをまとめた。

### (1) 土器 (第46図114~117)

114・115は甕である。114の口縁部は、斜め上方へ短く伸びる逆L字状を呈する。口縁部下に、3条の突帯を巡らす。充実脚台である。口唇部及び脚台端部は凹線状となる。内外面とも煤が付着する。115はやや小型の甕



である。口縁部は、斜め上方へ伸びる逆L字状を呈する。内面に煤が付着する。

116・117は壺である。116は広口壺の口縁部である。口唇部は凹線状となり、一部暗紫ゴラが付着する。117は頸部～底部片である。胴部は偏球状を呈し、胴部中央に1条の突帯を巡らす。底部は平底である。

### (2) 石器 (第46図118)

118は頁岩製の剥片である。両側縁に二次加工が施されるが、その意図は不明である。

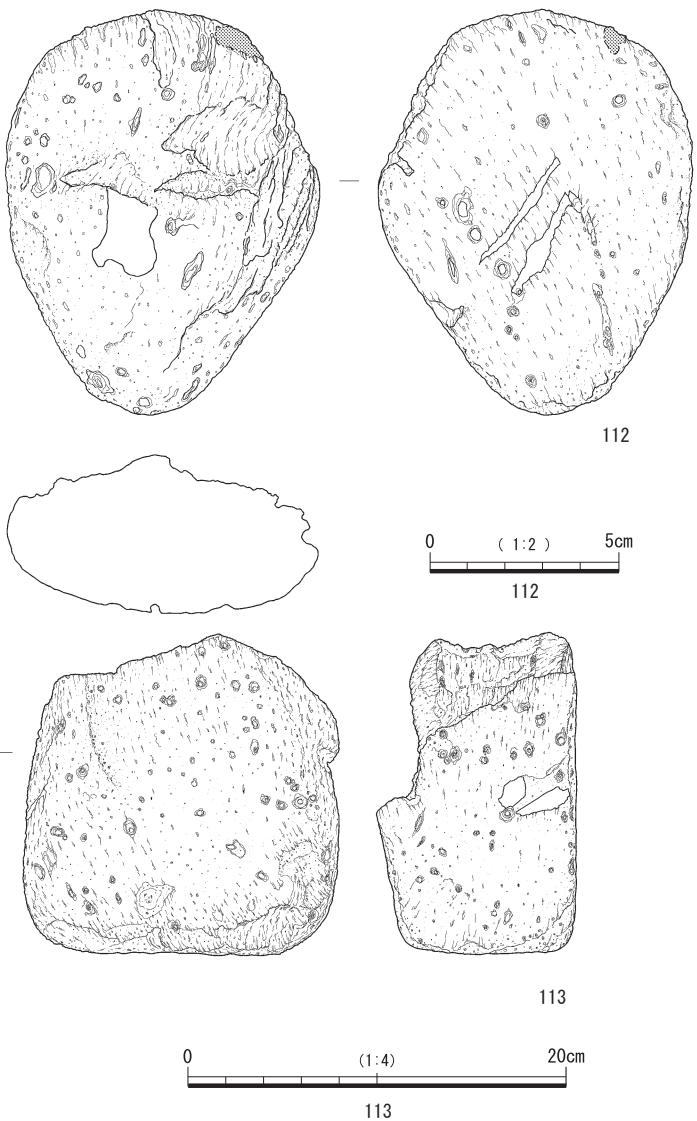
#### 【註釈】

- 1 寒川朋枝氏のご教示による。
- 2 長野真一氏のご教示による。

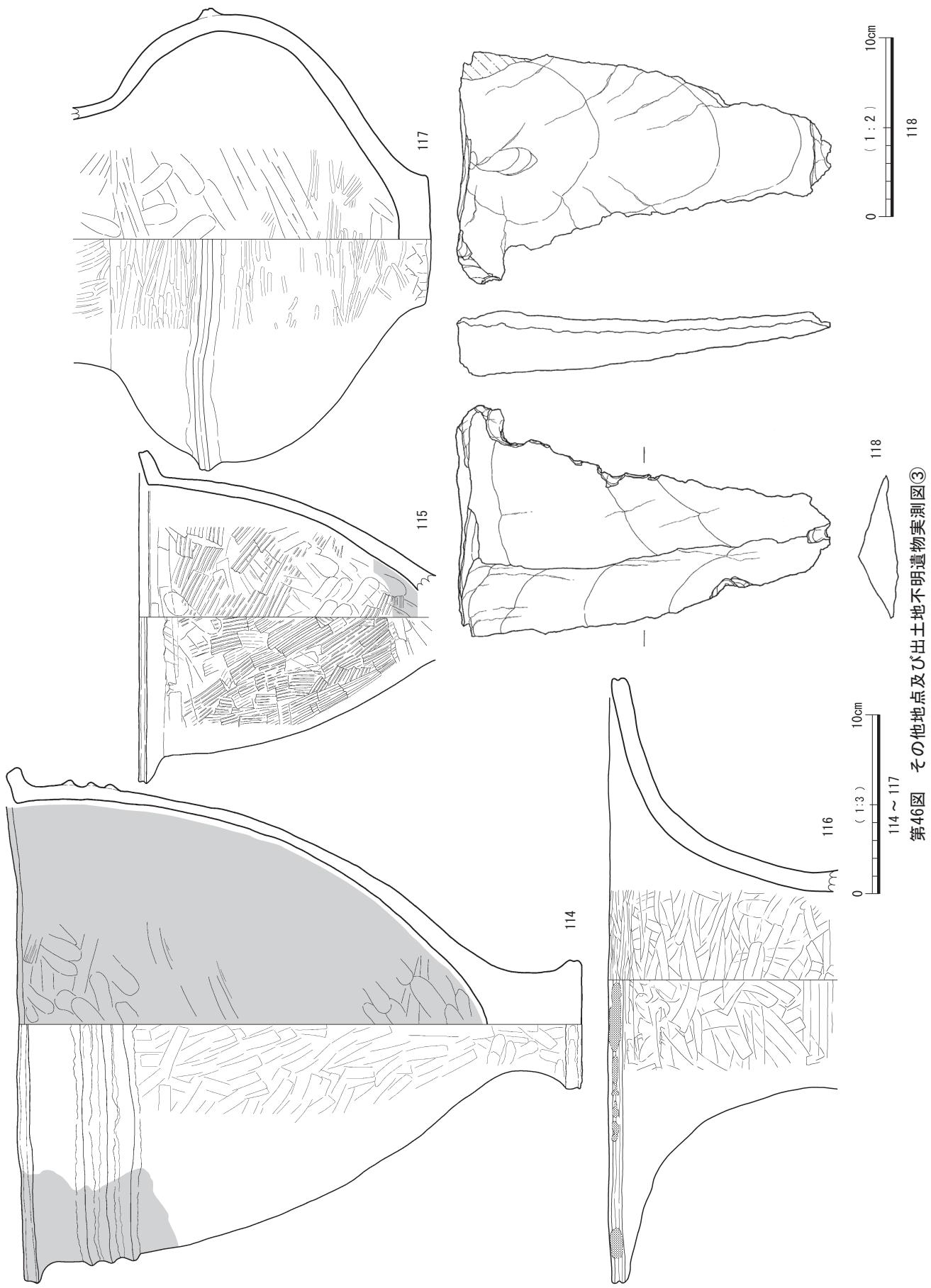
#### 【引用・参考文献】

河口貞徳 1978 「弥生時代の祭祀遺跡 大隅半島山ノ口遺跡」  
『えとのす』第10号

河口貞徳 2005 「山ノ口遺跡」『先史・古代の鹿児島 資料編』



第45図 その他地点及び出土地不明遺物実測図②



第46図 その他地点及び出土地不明遺物実測図3

第5表 山ノ口遺跡出土器観察表①

相図番号	出土地点	出土区	層位	器種	部位	法量 (cm)			測定			色調			胎土			旧報告番号			備考								
						口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	雲母	石英	長石	角閃石	白ゼラ	その他	文獻	插図	図版								
1	B地点	1 6 区	砂鉄層上	甕	完形	35.0	7.0	32.8	ヨコナナデ後指オサエ、工具ナナデ後指オサエ、工具ナナデ後指オサエ、工具ナナデ後指オサエ	ハケ目、指オサエ	○	○	○	明黄鑑 10YR6/6	10YR6/4	10YR6/6	10YR6/4	○	○	河口1960	6-24	8-15	A30305	19	「K7」	1条の突帯、煤付着			
17	2	B地点	IV 1 区	砂鉄層上	甕	完形	26.8	7.4	28.8	ヨコナナデ、ミガキ、工具ナナデ、工具ナナデ、工具ナナデ	ハケ目、指オサエ	にぶい黄鑑 7.5YR5/3	○	△	△	△	△	△	△	△	△	河口1960	6-18	9-17	黎明館所蔵	124		3条の突帯、煤付着、	
3	B地点	1 7 区	砂鉄層上	甕	完形	22.2	7.2	24.9	ヨコナナデ、ハケ目、指ナナデ、ハケ目、ハケ目、指ナナデ	ハケ目、指ナナデ、ハケ目、指ナナデ	にぶい黄鑑 7.5YR6/4	○	△	○	にぶい黄鑑 10YR6/4	10YR6/4	10YR6/4	10YR6/4	○	△	河口1960	6-22	9-22	A30405	17	「K13」	3条の突帯、煤付着、		
4	B地点	III 3 区	砂鉄層上	甕	完形	26.5	7.5	28.3	ヨコナナデ、ハケ目、指ナナデ、ハケ目、ハケ目、指ナナデ	ハケ目、指ナナデ、ハケ目、指ナナデ	にぶい黄鑑 10YR7/4	○	△	○	にぶい黄鑑 10YR7/4	10YR7/4	10YR7/4	10YR7/4	○	△	河口1960	6-26	9-19	A30405	20	「K22」	2条の突帯、煤付着、		
5	B地点	IV 2 ~ 3 区	砂鉄層上	甕	完形	23.0	7.2	24.3	ヨコナナデ、ハケ目、指ナナデ、ナナデ	ハケ目、指ナナデ、ナナデ	にぶい黄鑑 10YR6/4	○	△	△	にぶい黄鑑 7.5YR7/4	7.5YR7/4	7.5YR7/4	7.5YR7/4	○	△	河口1960	6-21	9-20	A30405	16	「K16」	3条の突帯、煤付着		
6	B地点	IV 3 ~ 4 区	砂鉄層上	甕	完形	22.6	9.4	30.8	ヨコナナデ、工具ナナデ、工具ナナデ、工具ナナデ	ハケ目、指ナナデ、ナナデ	にぶい黄鑑 10YR6/4	○	△	△	にぶい黄鑑 7.5YR5/4	7.5YR5/4	7.5YR5/4	7.5YR5/4	○	○	河口1960	6-19	8-16	県埋文センター所蔵	未指定	「K5」	3条の突帯、煤付着		
7	B地点	II 1 ~ 2 区	砂鉄層上	甕	完形	20.2	7.4	20.9	ヨコナナデ、ハケ目、指ナナデ、ナナデ	ハケ目、指ナナデ、ナナデ	にぶい黄鑑 10YR6/4	○	○	○	にぶい黄鑑 7.5YR6/4	7.5YR6/4	7.5YR6/4	7.5YR6/4	○	○	河口1960	6-23	9-21	A30405	18	「K14」	3条の突帯、煤付着		
19	8	B地点	IV 4 区	砂鉄層上	甕	完形	21.3	7.1	38.5	ヨコナナデ後ミガキ、工具ナナデ後ミガキ、工具ナナデ	ハケ目後ミガキ、工具ナナデ	明赤褐色 5YR5/6	△	△	△	赤褐色 5YR4/6	5YR4/6	5YR4/6	5YR4/6	○	○	河口1960	5.9	8-11	A30405	7	「K9」	剽部と胴上部の端に7条・肩部に3条の突帯、穿孔あり	
9	B地点	I 6 区	砂鉄層上	甕	完形	18.3	6.0	39.2	ヨコナナデ、ミガキ	工具ナナデ後指オサエ	橙 5YR6/6	○	△	○	橙 5YR6/6	5YR6/6	5YR6/6	5YR6/6	○	○	河口1960	5.5	8-10	A30405	4	「K4」	剽部と胴上部の端に7条・肩部に3条の突帯、穿孔あり		
20	10	B地点	IV 4 区	砂鉄層上	甕	完形	17.0	5.8	37.1	ヨコナナデ工具ナナデ後指ナナデ、ミガキ、ヨコナナデ後指ナナデ、ミガキ、ヨコナナデ後指ナナデ	ミガキ、指ナナデ、工具ナナデ後指ナナデ、ミガキ、指ナナデ、工具ナナデ後指ナナデ	にぶい黄鑑 10YR6/4	○	△	○	にぶい黄鑑 10YR5/4	10YR6/3	10YR7/4	10YR7/4	○	△	○	河口1960	5-12	8-9	A30405	9	「K6」	剽部と胴上部の端に7条・肩部に3条の突帯、穿孔あり
11	11	B地点	IV 2 区	砂鉄層上	甕	完形	15.0	5.7	34.6	ヨコナナデ、ミガキ、工具ナナデ後指ナナデ、ミガキ、ヨコナナデ後指ナナデ	ミガキ、指ナナデ、工具ナナデ後指ナナデ、ミガキ、指ナナデ、工具ナナデ後指ナナデ	にぶい黄鑑 10YR6/3	○	△	○	にぶい黄鑑 10YR5/4	10YR4/6	10YR4/6	10YR4/6	○	○	河口1960	5-8	8-12	黎明館所蔵	121			
12	12	B地点	II 1 ~ 2 区	砂鉄層上	甕	完形	12.1	6.8	29.0	ヨコナナデ後指ナナデ	ミガキ	褐 7.5YR5/4	○	○	○	にぶい黄鑑 10YR5/4	10YR4/6	10YR4/6	10YR4/6	○	○	河口1960	5-4	8-13	A30302	3	「K15」	穿孔あり	
21	13	B地点	1 7 区	砂鉄層上	甕(台付小型蓋)	完形	7.7	-	-	ヨコナナデ、ミガキ	工具ナナデ後指ナナデ、ミガキ	にぶい黄鑑 2.5Y6/4	○	△	△	にぶい黄鑑 2.5Y6/4	2.5Y6/4	2.5Y6/4	2.5Y6/4	○	△	河口1960	5.6	10-30	A30302	5	「K21」	剽部下部から胴部上部にかけて8条・肩部に3条の突帯、穿孔あり	
14	14	B地点	IV 1 区	砂鉄層上	(長頸甕)	完形	7.6	5.5	29.0	ヨコナナデ、工具ナナデ後指ナナデ、ミガキ	工具ナナデ後指ナナデ、ミガキ	浅黃鑑 7.5YR8/4	△	△	△	浅黃鑑 7.5YR8/4	7.5YR8/4	7.5YR8/4	7.5YR8/4	○	△	河口1962	5.7	8-14	A30305	6	「K17」	剽部下部から胴部上部にかけて8条・肩部に3条の突帯、穿孔あり	
40	41	C地点	W1 ~ 2 区	砂鉄層上	甕	完形	33.0	6.6	31.9	ヨコナナデ、工具ナナデ後指ナナデ、ミガキ	工具ナナデ後指ナナデ、ミガキ	明赤褐色 5YR5/6	△	△	△	明赤褐色 5YR5/6	5YR5/6	5YR5/6	5YR5/6	○	△	河口1962	5.1	-	A30505	28	「K23」	剽部に1条・肩部に1条の突帯、穿孔あり、赤色顔料塗付	
22	41	C地点	IV 1 区	砂鉄層上	甕	完形	28.2	6.2	33.2	ヨコナナデ、工具ナナデ後指ナナデ、ミガキ	工具ナナデ後指ナナデ、ミガキ	にぶい黄鑑 7.5YR6/4	○	△	△	にぶい黄鑑 7.5YR6/4	7.5YR6/4	7.5YR6/4	7.5YR6/4	○	△	河口1962	5.2	-	A30305	29	「K8」	3条の突帯、煤付着、穿孔あり	

第6表 山ノ口遺跡出土器観察表②

掘出番号	出土地點	出土区	層位	器種	部位	法量(cm)			測定			色調			胎土			旧報告番号			河口郵 所蔵番号	黒指定 番号	注記等	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	雲母	石英 長石	角閃石	白色粒 石	その他	文献	捕図	図版	河口11962	53	-	黎明前所蔵	125	3条の突帯、縫付着
42	C地点	II 9区	砂鉄層上	甕	完形	28.7	8.3	32.0	ヨコナデ、ハケ目、 ナデ	ヨコナデ、指ナデ ナ後指サエ、工具ナ 具ナデ	にぶい黄澄 10YR7/3	○	△	△	○	河口11962	5.3	-	黎明前所蔵	125	3条の突帯、縫付着			
43	C地点	II 8区	砂鉄層上	甕	完形	24.9	7.0	27.4	ヨコナデ、ハケ 目、ハケ目後指オ サエ、ナデ	ヨコナデ、工具ナ ナ後指サエ、工 具ナデ	にぶい黄澄 10YR7/4	○	△	○	○	河口11962	5.4	-	A30505	30	[K.19]	4条の突帯、縫付着		
27	44	C地点	II 6区	砂鉄層上	甕	口縁部～ 脚部	(34.2)	-	ヨコナデ、工具ナ ナ後指サエ	ヨコナデ、工具ナ エ、ナデ	にぶい黄澄 10YR6/6	○	△	△	小蝶 △	-	-	-	A30402	未指定	4条の突帯			
45	C地点	I 4区	砂鉄層上	甕 (小型壺)	完形	10.5	5.4	17.4	ヨコナデ、工具ナ サエ	ヨコナデ、指オサ エ、ミガキ、指オ サエ	にぶい黄澄 10YR6/4	○	○	○	○	河口11962	5.5	-	A30505	31	[K.18 I4 No.2]	穿孔あり		
28	46	C地点	II 7区	砂鉄層上	甕 (広口壺)	完形	35.2	8.0	34.5	ヨコナデ、ミガキ、 工具ナデ、指オサ エ後指ミガキ	ミガキ、指ナサエ、 工具ナデ、指オサ エ後指ミガキ	にぶい黄澄 7.5YR5/4	○	△	△	○	河口11962	5.7	-	A30405	33	[K.10]	1条の突帯、暗紫ゴ ラ仕着、穿孔あり、 浮文(3端) 5か所	
47	47	C地点	I 5区	砂鉄層上	甕	頸部～ 底部	-	7.1	ヨコナデ、ナデ	工具ナデ、ナデ	にぶい黄澄 7.5YR6/6	○	△	○	○	河口11962	5.6	-	A30505	32		頭部に3条・胴部に3 条の突帯、穿孔あり		
53	53	D地点	-	砂鉄層上	甕	完形	23.8	7.0	23.8	ヨコナデ、ハケ目、 ナデ	ヨコナデ、ハケ目 後指ナサエ	にぶい褐 7.5YR5/4	○	○	△	-	-	-	-	錦江町所蔵	139	3条の突帯、縫付着		
54	54	D地点?	-	砂鉄層上	甕	完形	21.7	7.2	23.5	ヨコナデ、ミガキ	工具ナデ後指オサ エ	にぶい褐 5YR5/4	○	△	○	○	河口11962	5.6	-	錦江町所蔵	140		頭部に3条・胴部に2 条の突帯、穿孔あり	
30	55	D地点?	-	砂鉄層上	甕	完形	16.8	7.0	36.7	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、指オサ エ	にぶい赤褐 5YR5/4	○	△	○	○	河口11962	5.6	-	錦江町所蔵	143		頭部に4条・胴部に3 条の突帯	
56	56	D地点?	-	砂鉄層上	甕 (小型壺)	完形	11.0	7.0	19.6	ヨコナデ、工具ナ キ	ヨコナデ、工具ナ キ	にぶい赤褐 5YR5/4	△	○	○	○	河口12002	4.6	-	錦江町所蔵	138	1条の突帯、穿孔あ り		
31	57	D地点?	-	砂鉄層上	甕 (大型 長頸 壺)	口縁部～ 底部	-	6.8	-	工具ナデ、ヨコナ デ、指ナデ、ミガ キ	工具ナデ、指ナデ、 ミガキ	にぶい黄澄 7.5YR6/4	△	△	○	-	-	-	-	錦江町所蔵	144	3条の突帯、穿孔あ り		
58	58	D地 点?	-	砂鉄層上	甕 (広口壺)	完形	30.0	8.7	35.0	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ、 指ナサエ	にぶい褐 7.5YR5/4	○	○	○	-	-	-	-	錦江町所蔵	141	暗紫ゴラ仕着、穿孔 あり		
59	59	D地 点?	-	砂鉄層上	甕	完形	21.1	7.4	30.7	ヨコナデ、工具ナ キ	摩滅により不明	にぶい褐 7.5YR6/4	△	□	○	○	-	-	-	錦江町所蔵	142			
32	60	D地 点?	-	砂鉄層上	高杯	完形	18.0	10.2	18.5	ミガキ	指ナサエ工後ミガ キ、工具ナデ、ヨ コナデ	工具ナデ、ハ ケ目後指オサ エ	にぶい赤褐 7.5YR6/6	○	△	△	-	-	-	-	錦江町所蔵	146	暗紫ゴラ仕着、赤色 顔料塗付	
61	61	D地点?	-	砂鉄層上	鉢 (小型鉢)	完形	9.4	3.5	7.1	工具ナデ、ハケ目	指ナサエ、指ナデ ナ後指オサエ	にぶい赤褐 2.5YR4/3	△	○	○	○	河口12002	4.6	-	錦江町所蔵	145			
73	73	A地点	-	砂鉄層下	甕	口縁部～ 胸部	(20.0)	-	-	ヨコナデ後指オサ エ、ハケ目後指オ サエ	ヨコナデ、工具ナ キ	にぶい褐 7.5YR5/4	○	△	○	○	河口11960	6.15	7.1	A30302	12	[昭33.6.13 山之口]	焼付着	
36	74	A地点	-	砂鉄層下	甕	口縁部～ 肩部	13.4	-	-	ハケ目後ミガキ、 ナデ	ミガキ、ハケ目後 指ナサエ	にぶい褐 7.5YR4/4	○	△	△	○	河口11960	5.1	7.2	A30302	1	[昭33.6.13 山之口]	浅縞文	
75	75	A地点	-	砂鉄層下	甕 (小型壺)	完形	9.2	3.1	12.8	工具ナデ、指ナデ	工具ナデ、指ナデ	にぶい黄澄 10YR6/4	○	△	○	○	河口11960	5.3	10.33	A30302	2	[昭33.6.13 坂]	穿孔あり	

第7表 山ノ口遺跡出土器観察表③

掲 番 号	出 土 地 点	出 土 区	層 位	器種	部 位	口徑 底 径	器 高	法量 (cm)		測 定		色 調		胎 土		日報告番号		河口郵 所蔵番号	黒指定 番号	注記等	備 考		
								外 面	内 面	外 面	内 面	雲母	石英 長石	角閃石 輝石	白色粒 白石	その他	文 獻	攝 圖	圖 版				
36	76	A地点	-	砂鉄層下 (台付鉢)	口縁部~ 脚部	430	-	ヨコナデ、ミガキ, ハケ目、ミガキ, ハケ目	10YR3/1	黒褐色 10YR3/1	○	△	△	○	○	河口1960	6-16	10-335	A30302	13	「K118」 〔昭33.6.10 坂 坂〕	2条の突帯、方形透 孔、黒色顔料添付、 赤彩、黒彩	
77	77	A地点	-	砂鉄層上	甌	口縁部~ 底部	(21.9)	7.0	24.5 ヨコナデ後指オサ エ、工具ナデ後指 オサエ、指ナデ	2.5YR6/4	にぶい黄 7.5YR6/4	○	○	○	○	○	河口2002	2-9	-	A30402	37	「昭33.6.13 山之口 坂」	3条の突帯、焼付着
78	78	A地点	-	砂鉄層上	甌	口縁部~ 底部	(26.4)	8.0	24.6 ヨコナデ後指ナ デ、工具ナデ後 ミ ガキ、ヨコナデ、 指ナデ	7.5YR5/4	にぶい褐 5YR5/4	○	○	○	○	○	河口1962 河口2002	2-11	9-24 (1962)	A30402	27	「昭33.6.13 山之口 坂」	1条の突帯、焼付着
79	79	A地点	-	砂鉄層上	甌	完形	22.0	7.7	21.8 ヨコナデ後指ナ デ、工具ナデ後 ミ ガキ、ヨコナデ、 指ナデ	10YR7/4	にぶい黄 10YR7/4	○	△	○	○	○	河口1962 河口2002	2-10	9-23 (1962)	A30302	26	「昭33.6.13 坂」	1条の突帯、焼付着、 暗紫コラ付着
80	80	A地点	-	砂鉄層上	甌	脚部~ 底部	-	4.1	- ハケ目、指ナデ	10YR7/4	にぶい黄 10YR7/4	○	○	○	○	○	河口1995	5-44	-	A30402	41	「昭33.6.13 山之口 坂」	焼付着
81	81	A地点	-	砂鉄層上	甌	脚部~ 底部	-	7.8	- ハケ目、ハケ目後 指ナデ、指ナデ	10YR4/1	褐色 10YR4/1	○	△	○	○	○	河口1995	5-45	-	A30402	36	「昭33.6.16 山ノ口 坂」	焼付着
82	82	A地点	-	砂鉄層上	甌	完形	13.9	5.2	24.5 ヨコナデ、工具ナ デ、工具ナデ後指 ナデ、指ナデ	7.5YR6/4	にぶい黄 7.5YR6/4	○	△	○	○	○	河口1962	-	7-6	A30302	25	「K20」	暗紫コラ付着、穿孔 あり、種子压痕あり
83	83	A地点	-	砂鉄層上	甌	完形	16.7	6.4	31.5 ヨコナデ、指ナデ、 工具ナデ、ミガキ 目	10YR7/4	にぶい黄 10YR7/4	○	○	○	○	○	河口1960	5-11	7-8	A30302	8		暗紫コラ付着、穿孔 あり
84	84	A地点	-	砂鉄層上	甌	口縁部~ 底部	-	4.5	- 指ナデ、ハケ目	10YR6/4	にぶい黄 10YR5/4	○	○	△	○	○	河口1960	5-10	7-7	A30402	34	「昭33.6.10 山之 坂」	穿孔あり、種子压痕 あり
85	85	A地点	-	砂鉄層上 (玄口甌)	甌	完形	30.5	7.0	30.9 ヨコナデ、ミガキ、 指ナデ、ミガキ、 工具ナデ	7.5YR7/4	にぶい黄 7.5YR6/4	○	△	△	○	○	河口1960	5-10	7-7	黎明館所藏	122		1条の突帯、暗紫コ ラ付着、穿孔あり(2 孔)
86	86	A地点	-	砂鉄層上	甌	口縁部~ 脚部	18.0	-	- ヨコナデ、ミガキ、 工具ナデ	7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	○	△	○	○	○	河口1995	-	-	-	-	黎明館所藏	123 「昭和33.6.13 山之 坂」
87	87	A地点	-	砂鉄層上	甌	脚部~ 底部	-	6.4	- 工具ナデ、ミガキ	7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	○	△	○	○	○	河口1995	5-41	-	A30402	39	「昭和33.6.13 山之 坂」	口海崖 坂元「昭三十六十三 山之口 壴」
88	88	A地点	-	砂鉄層上 (無頸甌)	甌	完形	13.8	5.2	12.2 ヨコナデ、ハケ目 後指ナデ	10YR7/4	にぶい黄 10YR6/4	○	○	○	○	○	河口1960	6-28	9-27	A30402	22	「K12」	穿孔あり
89	89	A地点	-	砂鉄層上	鉢	口縁部~ 底部	(25.6)	6.1	19.1 ヨコナデ後指オサ エ、ハケ目、ハケ 目後指オサエ	10YR6/4	にぶい黄 10YR6/4	○	○	○	○	○	河口1960	6-29	9-28	A30302	23	「昭33.6.13 山ノ口 坂」	
90	90	A地点	-	砂鉄層上	鉢	口縁部~ 底部	(25.0)	6.2	21.1 ヨコナデ、ハケ目、 ハケ目後指オサエ エ、工具ナデ後指 オサエ	7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR6/4	○	○	○	○	○	河口1960	-	-	A30402	35	「昭33.6.13 山之口 坂」	焼付着

第8表 山ノ口遺跡出土器観察表④

掲 番 号	出 土 地 点	出 土 区	層 位	器種	部 位	法量 (cm)			測 定			色 調			胎 土			日報告番号			河口郵 所蔵番号	黒指定 番号	注記等	備 考
						口 徑	底 径	器 高	外 面	内 面	内 面	石 英 長 石	角 閃 石	白 色 粒	其 他	文 獻	捕 図	圖 版						
38	91	A地点	-	砂鉄層上 (小型鉢)	完形	125	50	134	ヨコナデ、工具ナ デ、指ナデ、指オサ エ	ハケ目後指ナデ、 指オサエ	にぶい黄澄 10YR6/4	◎	△	○	河口1990	6-13	10-34	A30302	10	「大根上町山ノ口 水田下三尺四 丘層ヨ八尺二八」	燃付着			
92	92	A地点	-	砂鉄層上 (台付鉢)	完形	(26.4)	186	287	ヨコナデ、ハケ目、 工具ナデ後ミガキ	ヨコナデ、ハケ目、 工具ナデ、指ナデ、 ミガキ	にぶい黄澄 10YR7/4	にぶい黄澄 7.5YR6/4	○	○	○	河口1990	6-17	10-31	A30302	14	「K1」	口縁部下に3条・脚 台部上に1条・脚 端部に1条の突帯、 穿孔あり、洗浄文 り		
93	93	A地点	-	砂鉄層上 (台付鉢)	脚部	-	147	-	ミガキ、ヨコナデ、 工具ナデ、指ナデ、 ミガキ	工具ナデ後指ナデ、 指オサエ	にぶい黄澄 10YR7/4	にぶい黄澄 10YR7/2	△	○	○	河口1990	6-27	7-5	A30402	21	脚部部上位に1条・ 脚端部上位に1条の 突帶	脚部部上位に1条・ 脚端部上位に1条の 突帶		
40	94	A地点	-	砂鉄層上 (小型台 付鉢)	完形	9.7	6.8	10.8	ヨコナデ後指オサ エ、ミガキ	工具ナデ後指オサ エ	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい褐色 7.5YR5/4	○	○	○	河口1990	6-14	10-32	A30302	11	「K.11」	2条の突帶		
95	95	A地点	-	砂鉄層上 高杯	脚部	-	-	-	ミガキ?	シボリ後指ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/4	にぶい褐色 10YR7/4	△	△	△	小螺 ◎	河口2002	214	-	A30302	38	「昭33.6.13 坂」	1条の突帶	
96	96	A地点	-	砂鉄層上 高杯	ジョッキ 形土器	完形	(10.1)	7.8	21.4	ミガキ	にぶい赤褐色 2.5YR5/4	にぶい黄澄 10YR6/4	○	○	△	河口1990	6-20	9-26	A30302	15	「K24」 「昭33.5.21 之口 奥」	赤色顔料塗付		
103	103	A地点	-	砂鉄層上 高杯	口縁部～ 底部	(25.6)	15.6	20.3	ミガキ	ミガキ、シボリ後 指ナデ、工具ナデ、 指オサエ	赤 10R4/6	赤 10R4/8	△	○	○	△	河口1990	6-30	10-29	A30305	24	1条の突帶、赤色顔 料塗付	1条の突帶、赤色顔 料塗付	
105	105	東水田	-	不明	鉢	完形	18.7	5.0	11.7	ナデ、指オサエ	ナデ	浅黃 2.5Y7/4	にぶい褐色 7.5YR6/4	△	△	△	-	-	-	A30501	未指定	「山ノ口 東水田入 共伴」	赤色顔料付着、種子 压痕あり	
106	106	東水田	-	不明	ミニチエ ア士器	完形	7.6	22	7.0	指ナデ、指オサエ、 指ナデ、指オサエ、 指ナデ、指ナデ	指ナデ、指オサエ 工具ナデ、指 エ、工具ナデ、指 ナデ	にぶい黄澄 10YR6/4	にぶい褐色 7.5YR6/4	□	○	○	△	-	-	-	A30501	未指定	「山ノ口 東 水田」	1条の突帶
44	107	不明	-	不明	甕	口縁部	(24.6)	-	-	ヨコナデ、指ナデ	ヨコナデ、指ナデ	にぶい褐色 7.5YR5/3	にぶい褐色 7.5YR6/4	○	△	○	△	-	-	-	A30302	未指定	「山ノ口」	刻印突端、焼付着
108	108	不明	-	不明	甕	口縁部～ 胴部	(14.6)	-	-	ヨコナデ、指オサエ 工具ナデ、指 エ、工具ナデ、指 ナデ	ヨコナデ、指オサエ 工具ナデ、指 エ、工具ナデ、指 ナデ	にぶい黄澄 10YR6/4	にぶい褐色 7.5YR6/4	□	○	○	△	-	-	-	A30402	42	「山口」	刻印突端、焼付着
109	109	不明	-	不明	甕	胴部～ 底部	-	70	-	工具ナデ、工具ナ デ後指オサエ	工具ナデ、工具ナ デ後指オサエ	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR5/4	○	△	○	△	-	-	-	A30302	40	「山ノ口」	焼付着
110	110	不明	-	不明	甕	口縁部	-	-	-	ヨコナデ、工具ナ デ、指ナデ	工具ナデ、指ナデ	にぶい褐色 7.5YR4/3	にぶい褐色 7.5YR6/4	○	△	○	△	-	-	-	A30302	未指定	「山口 No. 4」	
114	114	不明	-	不明	甕	完形	23.7	7.2	32.0	工具ナデ、指ナデ	工具ナデ、指ナデ	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR6/4	○	△	△	△	-	-	-	A30305	未指定	3条の突帶、焼付着	
115	115	不明	-	不明	甕	口縁部～ 底部	(18.4)	-	-	ハケ目後工具ナ デ、指ナデ	ハケ目後指ナデ、 指ナデ、指オサエ 工具ナデ	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR6/4	○	△	△	○	-	-	-	A30402	未指定	瞬紫コラ付着	焼付着
46	116	不明	-	不明	甕 (広口甕)	口縁部	33.8	-	-	ヨコナデ、指ナデ	ヨコナデ、指ナデ	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい褐色 10YR4/4	△	△	○	△	-	-	-	A30402	未指定	瞬紫コラ付着	1条の突帶
117	117	不明	-	不明	甕	胴部～ 底部	-	72	-	ヘラミガキ、工具 ケズリ、ヘラナデ、 指ナデ、指オサエ	済草鶏 7.5YR8/4	済草鶏 10YR4/1	済草鶏 10YR4/1	○	□	△	○	-	-	-	A30402	未指定	1条の突帶	

第9表 山ノ口遺跡出土土器・石製品計測表①

揮団 番号	埋載 番号	出土 地点	トレンチ	層位	遺構名	石材	器種	法量(重量はg、重量以外はcm)			文献	挿図	図版	日報告掲載番号	河口即 所蔵番号	県指定 番号	注記等	備考
								最大長	最大幅	最大厚								
15	B地点	I 6~ III 1区	砂鉄層	磨製石鏃	粘板岩	(6.1)	(2.6)	0.35	4.76	河口1960	7-7	12-C	A102706	49	「弥生時代No.7」 「山ノ口 I t 6区 III t 1区」			
16	B地点	I 6~ III 1区	砂鉄層	磨製石鏃	粘板岩	(5.3)	(2.7)	0.38	4.37	河口1960	7-6	12-C	A102706	48	「弥生時代No.6」 「山ノ口 I t 6区 III t 1区」			
17	B地点	I 6~ III 1区	砂鉄層	磨製石鏃	粘板岩	(5.15)	(2.65)	0.3	3.92	河口1960	7-9	12-C	A102706	51	「弥生時代No.9」 「I 6~III 1」			
18	B地点	I 6~ III 1区	砂鉄層	磨製石鏃	粘板岩	(4.1)	(3.0)	0.33	5.24	河口1960		12-C	A102706	55	「弥生時代No.1土器刷」 「I 6区~III t 1区」			
19	B地点	III 4区	砂鉄層	磨製石鏃	粘板岩	(4.55)	(2.4)	0.3	2.82	河口1960	7-8	12-C	A102706	50	「弥生時代No.8」 「III t 4区」			
20	B地点	IV 4区	砂鉄層	磨製石鏃	頁岩	(6.1)	(3.25)	0.35	7.31	河口1960	7-3	12-B	A102706	45	「山ノ口」			
21	B地点	IV 4区	砂鉄層	磨製石鏃	粘板岩	(5.25)	(2.3)	0.4	4.35	河口1960	7-5	12-B	A102706	47	「弥生時代No.5」 「IV t 4区」			
22	B地点	IV 4区	砂鉄層	磨製石鏃	粘板岩	(4.7)	(2.65)	0.38	3.86	河口1960	7-2	12-B	A102706	44	「弥生時代No.3」 「IV t 4区」			
23	B地点	IV 4区	砂鉄層	磨製石鏃	粘板岩	(4.55)	(2.35)	0.33	3.30	河口1960	7-4	12-B	A102706	46	「出土地大槻古町山ノ口 月日昭33. 12. 25 地層IV 4層 弥生時代No. 1」			
24	B地点	IV 4区	砂鉄層	磨製石鏃	粘板岩	(3.0)	(1.75)	0.27	1.55	河口1960	7-1	12-B	A102706	43				
25	B地点	IV 4区	砂鉄層	磨製石鏃	頁岩	(4.1)	(2.55)	0.25	2.50	—	—	—	A102706	52	「弥生時代No. 2」 「IV t 4区」			
26	B地点	II 10区	砂鉄層	軽石製品	軽石	4.6	2.5	1.45	2.83	河口1960	7-B	11-D	A102706	59	勾玉			
27	B地点	III 4区	砂鉄層	軽石製品	軽石	6.05	2.95	1.9	5.06	河口1960	7-C	11-D	A102706	56	勾玉			
28	B地点	I 8区	砂鉄層	軽石製品	軽石	6.05	3.5	1.55	5.78	河口1960	7-A	11-D	A102706	58	勾玉			
29	B地点	III 1区	不明	軽石製品	軽石	3.4	2.2	1.05	2.25	—	—	—	A101305	未指定	「山ノ口 III t 1区」			
30	B地点	III 2区	不明	軽石製品	軽石	14.8	9.0	6.4	187	—	—	—	A30305	66	「山口III 2」	縹刻繡		
31	B地点	III 3区	不明	軽石製品	軽石	25.3	13.0	5.8	522	—	—	—	A30305	67	「山口III 3」	縹刻繡		
32	B地点	II 4区	不明	軽石製品	軽石	16.7	15.05	6.7	311	—	—	—	A117105	72	「山口II 4」	勾玉様		
33	B地点	III ?区	不明	軽石製品	軽石	17.15	11.8	8.8	402	—	—	—	A117105	71	「山口III □」	暗紫ゴラ付着		
34	B地点	III 4区	不明	軽石製品	軽石	18.6	11.0	5.75	222	—	—	—	A117105	80	「山口III 4」	暗紫ゴラ付着		
35	B地点	II 2区	不明	軽石製品	軽石	10.0	8.45	5.3	111	—	—	—	A117105	75	「山口II 2」	暗紫ゴラ付着		
36	B地点	IV 2区	不明	軽石製品	軽石	17.65	12.6	10.65	628	—	—	—	A117105	79	「山口IV 2」			
37	B地点	II 2区	不明	軽石製品	軽石	23.05	15.1	7.1	583	—	—	—	A117105	73	「山口II 4」			
38	B地点	IV 4区	不明	軽石製品	軽石	11.7	7.7	3.65	—	—	—	—	A117105	78	「山口IV 4」			
39	B地点	IV 3区	不明	軽石製品	軽石	13.1	10.1	4.25	113	—	—	—	A117105	76	「山口IV 3」			
40	C地点?	II 8区	不明	磨製石鏃	粘板岩	2.9	1.9	0.27	1.31	—	—	—	A102706	53	「山ノ口9 石鏃」			

第10表 山ノ口遺跡出土土器・石製品計測表(2)

掲載番号	出土地点	出土トレンチ	層位 遺構名	石材	器種	法量(重量はg、重量以外はcm)	最大長	最大幅	最大厚	重量	文献	挿図	図版	日報告掲載番号	河口邸 所蔵番号	県指定 番号	注記等	備考
29	50 C地点	II 9区	不明	軽石製品	軽石	348	24.15	19.0	3322	河口1988	-	28	A105202	64	「山ノ口 軽石陰石」			
51	51 C地点	II 6区	不明	軽石製品	軽石	5.85	3.35	2.5	7.23	-	-	-	A102706	57	「山ノ口 II 6区 勾玉 北中部」	勾玉	陰石若しくは容器か	
52	52 C地点	II 8区	不明	軽石製品	軽石	8.1	2.95	2.9	17	-	-	-	A102706	68	「山ノ口 II 8」			
33	62 D地点	-	不明	軽石製品	軽石	15.4	10.2	6.9	238	-	-	-	錦江町 所蔵	136				
63	63 D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	8.7	4.7	2.6	20	-	-	-	錦江町 所蔵	126				
64	64 D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	8.7	4.8	2.6	22	-	-	-	錦江町 所蔵	129				
34	65 D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	9.6	5.2	2.5	38	-	-	-	錦江町 所蔵	128				
66	66 D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	(25.4)	(27.5)	12.5	1470	-	-	-	錦江町 所蔵	135			陰石若しくは容器か	
67	67 D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	13.4	9.5	5.1	138	-	-	-	錦江町 所蔵	130			陰石若しくは容器か	
68	68 D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	30.5	17.3	9.5	994	-	-	-	錦江町 所蔵	134				
69	69 D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	27.8	14.5	10.4	1234	-	-	-	錦江町 所蔵	133				
35	70 D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	(30.5)	(9.6)	8.6	582	-	-	-	錦江町 所蔵	132				
71	71 D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	10.8	11.5	6.0	164	-	-	-	錦江町 所蔵	131				
72	72 D地点?	-	不明	軽石製品	軽石	4.0	4.2	3.0	14	-	-	-	錦江町 所蔵	127				
41	97 A地点	-	不明	打製土掘具	頁岩	21.65	9.25	1.5	275.5	河口11960	-	12-A	A10424	70	「山ノ口」			
42	98 A地点	-	不明	軽石製品	軽石	26.4	14.65	9.75	732.5	河口11960	-	11-A	A30305	62	「昭336 山之口」	岩偶		
43	99 A地点	-	不明	軽石製品	軽石	35.8	17.8	10.6	1144	河口11960	-	11-B	A104503	61	「昭336.13 山之口海岸」	岩偶	陽石若しくは家形か	
100	100 A地点	-	不明	軽石製品	軽石	39.9	23.7	13.4	3418	-	-	-	A104701	63	「昭336.13 山ノ口 錦石 陽石」			
101	101 A地点	-	不明	軽石製品	軽石	21.35	15.4	7.65	872	河口11995	8	グラビア 1	A30305	65		家形		
102	102 A又は B地点	-	不明	軽石製品	軽石	3.25	1.6	1.6	1.97	河口11960	-	11-D	A102706	60		勾玉様		
44	104 S36砂浜 採掘地 点	-	不明	軽石製品	軽石	6.75	3.75	2.55	11.3	-	-	-	不明	未指定				
111	111 不明	-	不明	軽石製品	軽石	13.8	8.5	2.95	74.5	-	-	-	A117105	74	「山口□□」			
45	112 不明	-	不明	軽石製品	軽石	10.7	8.35	4.7	87	-	-	-	A117105	77	「山口□□」		暗紫ゴラ付着	
113	113 不明	-	不明	軽石製品	軽石	17.0	16.7	10.55	906	-	-	-	A118105	69	「山口」			
46	118 不明	-	不明	剥片	頁岩	13.85	8.5	2.4	151.8	-	-	-	不明	未指定				

## 第IV章 山ノ口遺跡の再評価

### 第1節 山ノ口遺跡に関する研究史

遺跡や検出された遺構の性格については、報告者である河口貞徳氏をはじめ複数の研究者から複数の見解が示されている。本節では、これらの研究について概観していきたい。

#### 1 農耕祭祀説

河口氏は、第1次調査の報告で、遺構の性質に関係のある事項として以下の6点を挙げている。「1. 遺跡の位置が大根占の沖積低地の水田地帯及び、その西側に細長く延びる集落地帯の南端で山地が海岸にせまり、平地がせまくなつた所である。2. 遺構の構造が環状配石の内部には、なにもなく、その外部に土器等の遺物が配置され、またこれらを取りまいて、焚火の跡をとどめていることである。3. 遺物出土層は新鮮な砂層で、生活址らしい有機物の堆積がみられない。4. 土器のうち壺形土器のみは、全て故意に孔をあけてある。5. 遺構成立後、相当長期にわたって時日を経過しているにもかゝわらず、遺構があらざれずに保存されていたのは、立ち入ってはならない様な制約があったものと思われる。6. 軽石製の曲玉、軽石礫に刻目や穴を設けたもの等を配置している。」。そして、これらを総合的に考え、「遺構は農耕儀礼などの祭事が行われた場所で、当時の砂浜上に集落の共同の祭祀が行われた遺跡ではないか」と結論づけている（河口1960）。また、第1次調査の報告が翌年にもなされているが、河口氏はこの報告の中で遺構の性質に関係のある事項として上記6点を挙げ、さらに類例を加え、遺構の性格について検討した。まず、壺形土器に孔を穿った一例として、指宿市山川の成川遺跡弥生時代の墓葬を挙げ、「壺形土器に孔をあけたものが祭葬に關係があることは一般考えられているところである。」としている。また、人為的に埋設された土器が数個まとまって発見された例として群馬県上久保弥生時代遺跡を挙げ、報告者が遺跡の性格について祭祀遺跡として思考したいとしていることを付記している。これらから遺構の性格について「弥生時代集落の共同の祭祀が行われた遺構」としており、「農耕儀礼などの祭事」と具体化していないことが違ひとして挙げられる（河口1961）。しかし、河口氏が第2・3次調査の報告を行った際は、遺跡の性格についてはやはり「農耕に関する祭祀の行われた遺跡ではないか」としている（河口1962）。

その後も、河口氏は山ノ口遺跡を紹介する中で、遺跡や遺構の性格について触れている。1970年代以降の河口氏の研究では、縄文時代後晩期に南九州において発展した性器信仰が農耕文化と結びついて、山ノ口遺跡における祭祀になったことを新たに指摘している（河口1978・1988）。この点に加え、山ノ口遺跡や検出された遺構の

性格を「農耕儀礼などの祭事」と限定せず、「共同祭祀のあと」という表現にとどめている（河口1978・1988・2005など）ことが注目される。ただし、河口氏が意識的に「共同祭祀のあと」という表現にとどめているかどうかは定かではない。

金闇恕氏は、『魏書』東夷伝の農耕祭祀の記事にある鬼神（祖靈神）を祀る祭場「蘇塗」の中心に置かれていた祖靈像にあたるものとして山ノ口遺跡出土の男女一対の軽石製品を一例として挙げている（金闇1986）。つまり、金闇氏は河口氏同様、山ノ口遺跡を農耕祭祀が行われた遺跡として、位置付けているといえよう。

#### 2 墓地説

このように「農耕祭祀」「祭祀遺跡」としての評価がなされてきた山ノ口遺跡だが、遺跡の性格を「墓地」と考える研究者もいる。中園聰氏は、環状配石に立石が伴うことや壺の胴部に焼成前穿孔を施したもののが目立つ点から、西日本各地の墓地との類似性を指摘している。そして、環状配石を円形周溝墓と考え、環状配石を構成する軽石やその周囲で出土した土器を周溝の中に落ち込んだものとした。環状配石の中心にあったであろう墓擴は、砂地に掘り込まれた遺構であるため、当時の発掘技術等から検出されなかつたことは無理からぬこととした。また、同時期の円形周溝墓が検出された志布志市松山町京ノ峯遺跡や立石を伴う墓地の可能性が高い成川遺跡、枕崎市松ノ尾遺跡を類例として挙げた（中園2004b）。

長野真一氏は、蘇塗に関わる鳥杵や木彫像は、村や寺院の入り口に祭られたとされることを山ノ口遺跡の出土状況から充分に説明できているとは思えないとして、農耕祭祀説を否定した。一方、墓地の可能性を裏付けるものとして、配石遺構とそれに伴う立石の存在、規則的な土器の設置や穿孔慣習、磨製石鎌の埋納、軽石製岩偶や石棒、陰石等の配置、送り火とみられる焚火跡の存在等を挙げている。また、穿孔事例として成川遺跡や松ノ尾遺跡のほか、薩摩川内市下甑町の大原宮園遺跡、指宿市南摺ヶ浜遺跡、南さつま市金峰町中津野遺跡を挙げ、当時の普遍化した葬送儀礼とした。さらに墳墓祭祀遺跡とされる大分県大分市浜遺跡を類例として挙げたうえで、山ノ口遺跡を「集団墓地」「立石墓」とした（長野2017）。

このように近年、山ノ口遺跡を墓地と指摘する意見もあるが、本田道輝氏のように当時作成された地層図からその可能性は低いとする研究者もあり（本田2015）、未だ定説をみていないといえよう。

## 第2節 山ノ口式土器の研究史（第11表）

山ノ口遺跡は、南九州を代表する弥生時代中期後半の土器型式の標式遺跡としても著名である。そこで、本節では、型式設定から今日までの山ノ口式土器を巡る研究動向について、山ノ口遺跡の調査・報告者である河口貞徳氏を中心に研究が進んだ段階（1960年～1981年）とそれ以降の段階（1982年以降）に大別してみていき、現段階の位置づけについて整理していくこととする。

### 1 1960年～1981年の研究

山ノ口式土器は、山ノ口遺跡第1次調査の報告の中で初めて型式設定された。調査・報告した河口氏は、A地点（砂鉄採掘地点）、B地点（第1次調査地点）出土の土器を二つの型式に分け、A地点下層の土器を山ノ口一式、A地点上層及びB地点の土器を山ノ口二式とし、北部九州の土器との比較から、前者を弥生前期の終わりごろ、後者を弥生中期に位置付けている（河口1960・1964）。第2次調査（C地点）では、B地点の土器と同一型式の土器と城ノ越IV式（須玖式）との供出関係がみえたことで、弥生時代中期後半と時期幅を狭めている（河口1962）。また、同年に刊行された『弥生式土器集成』の中で、南九州（鹿児島県域）の弥生土器について第I～第Vの5様式に大別し、編年を提示した河口氏は、「第IV様式の土器のうち、山ノ口遺跡から出土したものを山ノ口式土器と呼ぶことにしたい」とし、改めて型式設定を行っている（河口1968）。ここで提示された山ノ口式土器とは、第1次調査の報告で河口氏が山ノ口二式とした土器である。この段階で初めて山ノ口二式のみが山ノ口式土器として、再設定されたといえる。しかしながら、第2次調査で供出関係がみえたとしていた山ノ口遺跡出土の須玖式土器を第III様式に位置付けるなどの矛盾点も生じている。

河口氏以外の研究者からも九州の弥生文化を説明する中で一部検討が行われている。森貞次郎氏は、山ノ口式土器を後期前半として位置付け、「主として大隅・薩摩に分布するきわめて特徴的な土器様式」としている（森1966）。河口氏が山ノ口式土器を中期後半に位置付けたのに対し、森氏が後期前半に位置付けた点が大きな相違点である。鏡山猛・乙益重隆両氏は、山ノ口式土器を中期後半の所産としながら、「南部九州における後期の土器は、山ノ口式（第3様式）の期間が長くつづき、次の1の宮式（第4様式）は短期間に終った」とする森氏の説を一部肯定するような記述を行っている点が注目される（鏡山・乙益1969）。

その後河口・出口浩両氏は、従来の編年の空白を埋める新たな資料が追加されたことにより、改めて南九州の弥生土器編年を再検討し、入来式土器の設定などを行っている（河口・出口1972）。この論文で山ノ口式土器のことにも触れ、『弥生式土器集成』編年の問題点として、

「他地方との関連に重点をおいて編年したために無理があった」とし、「山ノ口式土器と須玖式土器の同時性」や「山ノ口式は中期後半に位置するもの」と改めて位置づけを行っている。さらに河口氏は、更なる追加資料を加え、南九州の弥生土器を第I～VII様式に分けた。第I・II様式が前期とされ、それぞれ高橋I式土器・高橋II式土器と呼ばれる。第III～VII様式は中期とされ、それぞれ入来式土器、吉ヶ崎式土器、山ノ口式土器と呼ばれる。第VI～VII様式は後期とされ、それぞれ松木蘭I式土器、松木蘭II式土器、中津野式土器と呼ばれる（河口1981）。山ノ口式土器自体には大きな変更はないが、山ノ口式土器の前後の型式が整理されるなど、南九州の弥生土器編年の全容が初めてビジュアル的に示された点で大きな画期といえよう。

### 2 1982年以降の研究

1981年にいわゆる「河口編年」と呼ばれる南九州の弥生土器編年が完成して以降、河口氏以外の研究者による南九州の弥生土器の検討が活発となった。その中で、山ノ口式土器に関する重要な指摘についていくつかみていきたい。

#### （1）山ノ口式土器と他地域の土器との併行関係について

河口氏の中期後半説と森氏の後期前半説に対して、1990年代にクロスデーティングによる検証が行われた。中園聰氏は共伴関係から、山ノ口式（新）＝須玖II式（新）＝黒髪II式（新）＝中溝式＝瀬戸内第IV様式という併行関係を提示した（中園1993・1996）。また、中園氏は、山ノ口式土器自体も古段階と新段階に細分した。古段階は、鹿屋市串良町吉ヶ崎遺跡の焼失住居から出土したもので、吉ヶ崎式と呼ばれたり入来II式として括されてきたものである。この吉ヶ崎タイプが典型的な山ノ口式土器の分布範囲に一致することや、形態的に非常に類似し、その直前に位置付けられることが確実視されていることから、山ノ口式土器の古段階と位置付けられたものである（中園1996）。後に山ノ口式古段階・新段階は、山ノ口I式・山ノ口II式として再設定された（中園1997）。つまり現在、南九州の弥生土器編年として最も用いられている「中園編年」では、山ノ口遺跡から出土した一括資料を山ノ口式土器の新段階として、山ノ口II式と再設定されたことに注意されたい。また、共伴関係の新資料が追加される中で、クロスデーティングや様式論に基づく土器の動態に関する研究が今まで盛んに行われている（中園2004a、西谷2002、河野2013、平2015など）。このような研究の結果、北部九州から「周辺」地域への「伝播」をその主たる説明概念として用いていた山ノ口式後期前半説が否定され、山ノ口式土器が中期後半の土器型式として広く認知されるようになった。

## (2) 山ノ口式土器の分布域について

従来、南九州全域に分布すると考えられていた山ノ口式土器だが、本田道輝氏や中園氏により、再検討が行われた。本田氏は後期に位置付けられる松木蘭I・II式土器の祖型が山ノ口式土器ではなく、「松木蘭O式土器」と仮称する肥後系の土器群であるとし、中期中葉頃から地域を異にする異系統の土器が存在した可能性を示唆している（本田1984）。この説は後に中園聰氏によって補強されている。中園氏は、薩摩半島西部が山ノ口式土器の分布の空白地域であり、かつ黒髮式（松木蘭O式）土器の濃密な地域であることを根拠に、「南部九州では地域を異にした山ノ口式と黒髮式という2つの系統の土器群が存在していたとみられる」（第47図）としている（中園1997）。

## (3) その他の注目される研究について

河口氏は、1990～2000年代に山ノ口遺跡出土の土器に開聞岳の第二次爆発による暗紫ゴラが付着している資料が多いことに着目し、山ノ口式土器型式の再検討を行っている（河口1993・1995・2002）。

このほか、近年大規模な開発事業に伴う発掘調査により蓄積された資料をもとに小地域編年を行った内村憲和氏の研究が注目される（内村2015）。

## 第3節 山ノ口遺跡の現代的評価

第Ⅲ章で現場図面や出土遺物等の追加資料の図化及びこれまで報告されてきた遺物の再実測を行った。これらを踏まえたうえで、山ノ口遺跡の現代的評価を行う。

### 1 検出された遺構について

これまで、山ノ口遺跡で検出された「環状配石」や「軽石集積地」の状況は、全体図の中で模式的に示されていたほか、B地点（第1次調査）やC地点（第2次調査）で検出された環状配石の個別遺構図が報告されていたが、これら以外の「環状配石」や「軽石集積地」は文章記述が中心であり、具体的な状況については不明瞭であった。

今回、C地点やD地点の新たな追加資料を掲載したことにより、遺構の検出状況や出土遺物との関連性がよりつかめるようになった。加えて他遺跡との比較も以前に比べ、具体的に検討できるようになったといえよう。一方、遺跡・遺構の性格を墓地とする説を検証するために必要となる墓壙や周溝の有無についての記録は残されておらず、写真からの検証も困難であった。現代の調査と比較して、かけられる時間や予算が限られていること、検出状況から類推される遺跡・遺構の性格についての問題意識、類例の少なさなどが要因となり、検証材料がないことは否定できない。しかし、限られた中で少しでも記録を残そうとした河口氏をはじめとする発掘担当者の熱意が、今日でも山ノ口遺跡が南九州における弥生時

代の代表的な遺跡として、研究の俎上に載っている理由といえよう。

## 2 遺物の再実測について（第48図）

これまで、旧報告に掲載されていた土器の実測図は、器形や断面形態はもちろんのこと、穿孔やハケ目・ヨコナデの調整についても図化が行われていた。これは、河口氏が土器に穿孔がなされている重要性や調整技法を図化する必要性を認識していたことを示しているといえる。一方、今回土器の実測については、これらに加えミガキ・工具ナデ・指ナデの表現、接合痕の図化を行った。石器・石製品で擦痕方向を意識した図化を行ったにもいえるが、現代の実測図では製作技法を意識した図化が以前より高まっていることの表れといえよう。今回、山ノ口式土器の標式遺跡として、より詳細な情報を提示することできたのであれば、幸いである。

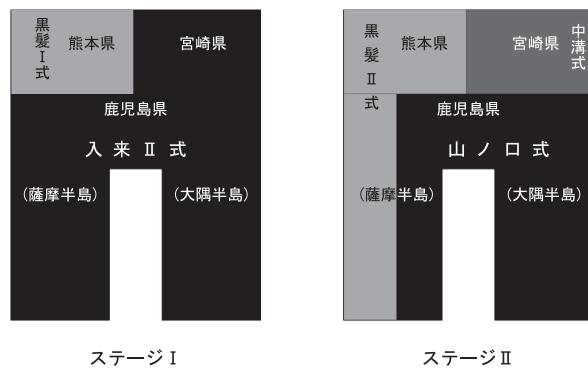
さらに、今回の実測図で暗紫ゴラの付着範囲を図化した。これにより、開聞岳噴火直前の土器の状況を復元する材料が増えたのではないかと思われる。

### 【引用・参考文献】

- 内村憲和 2015 「大隅地域の弥生時代中期後半から後期前半の土器編年について」鹿児島考古』第45号 鹿児島県考古学会  
鏡山猛・乙益重隆 1969 「九州」『新版考古学講座第4巻 原始文化<上>』雄山閣出版株式会社  
金闇恕 1986 「呪術と祭」『岩波講座 日本の考古学4 集落と祭祀』株式会社岩波書店  
河口貞徳 1960 「山ノ口遺跡」『鹿児島県文化財調査報告書』第七集 鹿児島県教育委員会  
河口貞徳 1961 「鹿児島県山ノ口遺跡の調査」『古代学』第九卷第三号 財団法人古代学協会  
河口貞徳 1962 「山ノ口遺跡」『立正考古』第21号 立正大学考古学研究会  
河口貞徳 1964 「鹿児島県肝属郡山ノ口遺跡の調査」『日本考古学年報』12（昭和34年度）日本考古学協会  
河口貞徳 1966 「鹿児島県肝属郡山ノ口遺跡の調査」『日本考古学年報』14（昭和36年度）日本考古学協会  
河口貞徳 1968 「南九州地方」『弥生式土器集成本編1』株式会社東京堂出版  
河口貞徳 1978 「弥生時代の祭祀遺跡 大隅半島の山ノ口遺跡」『えとのす』第10号 新日本教育図書株式会社  
河口貞徳 1981 「新南九州弥生式土器集成」『鹿児島考古』第15号 鹿児島県考古学会  
河口貞徳 1988 「山ノ口遺跡」『日本の古代遺跡38 鹿児島』株式会社保育社  
河口貞徳 1993 「型式の再考察」『鹿児島考古』第27号 鹿児島県考古学会  
河口貞徳 1995 「考古学における型式の動態」『鹿児島考古』

第29号 鹿児島県考古学会  
 河口貞徳 2002 「山ノ口遺跡の実相と弥生文化に占める位置」  
 『鹿児島考古』第36号 鹿児島県考古学会  
 河口貞徳 2005 「山ノ口遺跡」『先史・古代の鹿児島 資料編』  
 鹿児島県教育委員会  
 河口貞徳・出口浩 1972 「南九州弥生式土器の再編年」『鹿児島考古』第5号 鹿児島県考古学会  
 河野裕次 2013 「南部九州における弥生時代中期土器様式圈の動態」『古文化談叢』第69号 九州古文化研究会  
 中園聰 1993 「様式論と南部九州の弥生時代中期土器」『鹿児島考古』第27号 鹿児島県考古学会  
 中園聰 1996 「弥生時代中期土器様式の併行関係」『史淵』第百十三号 九州大学文学部  
 中園聰 1997 「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』9  
 人類史研究会  
 中園聰 2004a 「土器の分類・編年と様式の動態」『九州弥生文化の特質』(財)九州大学出版会  
 中園聰 2004b 「墳墓にあらわれた社会構造」『九州弥生文化の特質』(財)九州大学出版会  
 長野眞一 2017 「山ノ口遺跡考」『鹿児島考古』第47号 鹿児島県考古学会

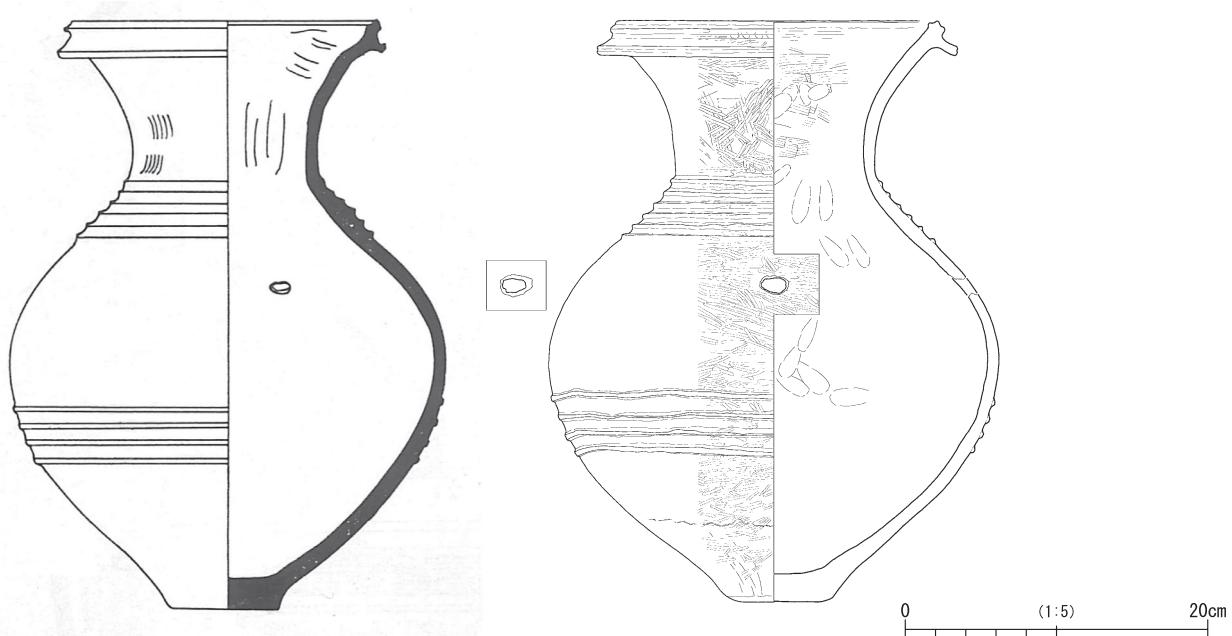
西谷彰 2002 「弥生時代後半期における土器編年の併行関係」『古文化談叢』第48集 九州古文化研究会  
 平美典 2015 「鹿児島県出土の須玖式系土器」『鹿児島考古』第45号 鹿児島県考古学会  
 本田道輝 1984 「松木藪1号住居址出土土器とその意義」『鹿大史学』第32号 鹿大史学会  
 本田道輝 2015 「山ノ口遺跡出土品」『鹿児島県文化財調査報告書』第61集 鹿児島県教育委員会  
 森貞次郎 1966 「九州」『日本の考古学III 弥生時代』株式会社河出書房新社



第47図 南部九州の弥生時代中期土器様式の動態  
 (中園2004を再トレース)

第11表 山ノ口遺跡上層出土土器を標式とする土器型式の名称と時期比定

文献	河口1960	河口1962	河口1966	河口1968	河口・出口1972	河口1981	森1966	中園1997
型式名	山ノ口二式	-	山ノ口II式	山ノ口式土器 (第IV様式)	山ノ口式土器	山ノ口式土器 (第V様式)	山ノ口式土器	山ノ口II式
時期比定	弥生時代中期	弥生時代中期後半	弥生時代中期末から後期初頭	-	弥生時代中期後半	弥生時代中期後葉	弥生時代後期前半	弥生時代中期後半
備考	A地点下層の土器は山ノ口一式として前期の終わり頃に位置づけられる			共伴した須玖式は第III様式に位置づけられる		共伴した須玖式は第V様式に位置づけられる		須玖II式(新)と黒髪II式と併行



第48図 新・旧遺物実測図の比較

## 第V章 総括

### 第1節 出土遺物の検討

#### 1 出土土器について

本項では、本遺跡から出土した土器の時期や系統等について現段階での研究成果等をもとに検討を行う。型式名等は中園編年（中園1997）に則った。本遺跡から出土した土器は大きく地表下約3mから出土した土器群の時期と地表下約1mから出土した土器群の時期に分けられる。なお旧報告では、前者を弥生時代前期の終わりごろ、後者を弥生時代中期に位置付けられている。

##### (1) 地表下約3mから出土した土器群

地表下約3m（A地点下層）から出土した土器群は、第35図73～76に当たる。73は、口縁部が短く外反する器形の甕である。南さつま市高橋貝塚の前期の土器との類似性が指摘されている（河口1995）。76は円盤充填技法で製作され、脚部に方形の透孔をもち、口縁部内面に内傾化する段をもつ台付鉢である。この特徴は弥生時代中期初頭～前葉の豊後系台付鉢の特徴に一致する。また、内外面に黒塗が施され、外面には黒塗の上から丹彩文が施されており、精製品であることから搬入品の可能性が高い。74の壺形土器も器形や二叉状工具を用いた平行線文が施される特徴からやはり同時期の豊後系土器との類似性を指摘することができる。よって、地表下約3mから出土した土器群は、弥生時代中期初頭～前葉の時期を中心とし、一部前期に上がる可能性もあるといえる。また、出土した土器の中には豊後系土器が含まれていることも特徴といえる。

##### (2) 地表下約1mから出土した土器群

地表下約1m（A地点上層）から出土した土器群は、第36図77～第39図96に当たる。このほか、B～D地点から出土した土器群（第16図1～第20図14・第25図40～第27図47・第29図53～第31図61）も同時期である。これらは弥生時代中期後半に位置付けられた山ノ口II式土器の標式となった資料である。在地系土器と外来系土器（模倣・搬入品）がある。在地系土器は甕・壺・鉢が出土している。甕は、脚台をもつものや平底のもの、大甕の器形のものがある。脚台を持つものは、口縁部下に突帶がないものと1～4条の突帶を巡らすものがある。一般的に山ノ口式土器の甕は脚台を有し、口縁部下に3条の突帶を巡らすものが多いが、本遺跡では多様な甕が存在していたことが窺える。壺は、口縁部が逆L字状のものと二叉状口縁がある。また、口縁部が逆L字状の壺は頸部や胴部に突帶を巡らすものとそうでないものがある。59の土器は、器形的には弥生時代中期前半の入来式の壺に類似するが、共伴関係から山ノ口式土器の段階に下る古い要素を残した土器と判断したい。このほか、長頸壺や無頸壺、脚付小型壺等が出土している。92は台付鉢であ

る。類例が確認できないが、口縁部形態や突帶等山ノ口式土器の甕の特徴に類似しており、在地系とした。57の大型長頸壺もほとんど類例が確認できない。指宿市成川遺跡で類似する資料が出土している程度である。胎土に雲母を含まない点が在地系土器とが異なるが、近隣地域で類似品が出土していることからひとまず在地系に含めた。

46・58・85は模倣品と思われる素口縁広口壺である。北部九州で見られるものに形態的に類似するが、丹塗りが施されていない点や胴部最大径の位置、頸部の締まり具合、器壁の厚さ等異なる点も多い。「在地様式の構成器種の一つとして組み込まれ、早い段階で在地化した可能性」（平2015）や「須玖II式を意識して製作された」（中園1997）と評価されている。40・60・61・95・96は、搬入品と考えられる土器群である。いずれも丹塗土器である。95は表面の剥落が激しいがわずかに丹塗りの痕跡が残っている。40は、従来須玖式とされていたが、近年では口唇部形態や突帶の断面形態等北部九州のものと異なることが指摘されている。最も類似性がある資料は、熊本県北部の大通小学校遺跡のものとされ、中九州からの持ち込みの可能性が指摘されている（中園1998）。96は北部九州の典型的な須玖II式である。60の椀形高杯や95のジョッキ形土器は、福岡県行橋市前田山遺跡等、豊前地域で散見される。61の鉢は、類例を確認できなかったが、丹塗りや胎土から搬入品と考えられる。これら外来系土器も弥生時代中期後半頃に位置付けられる。

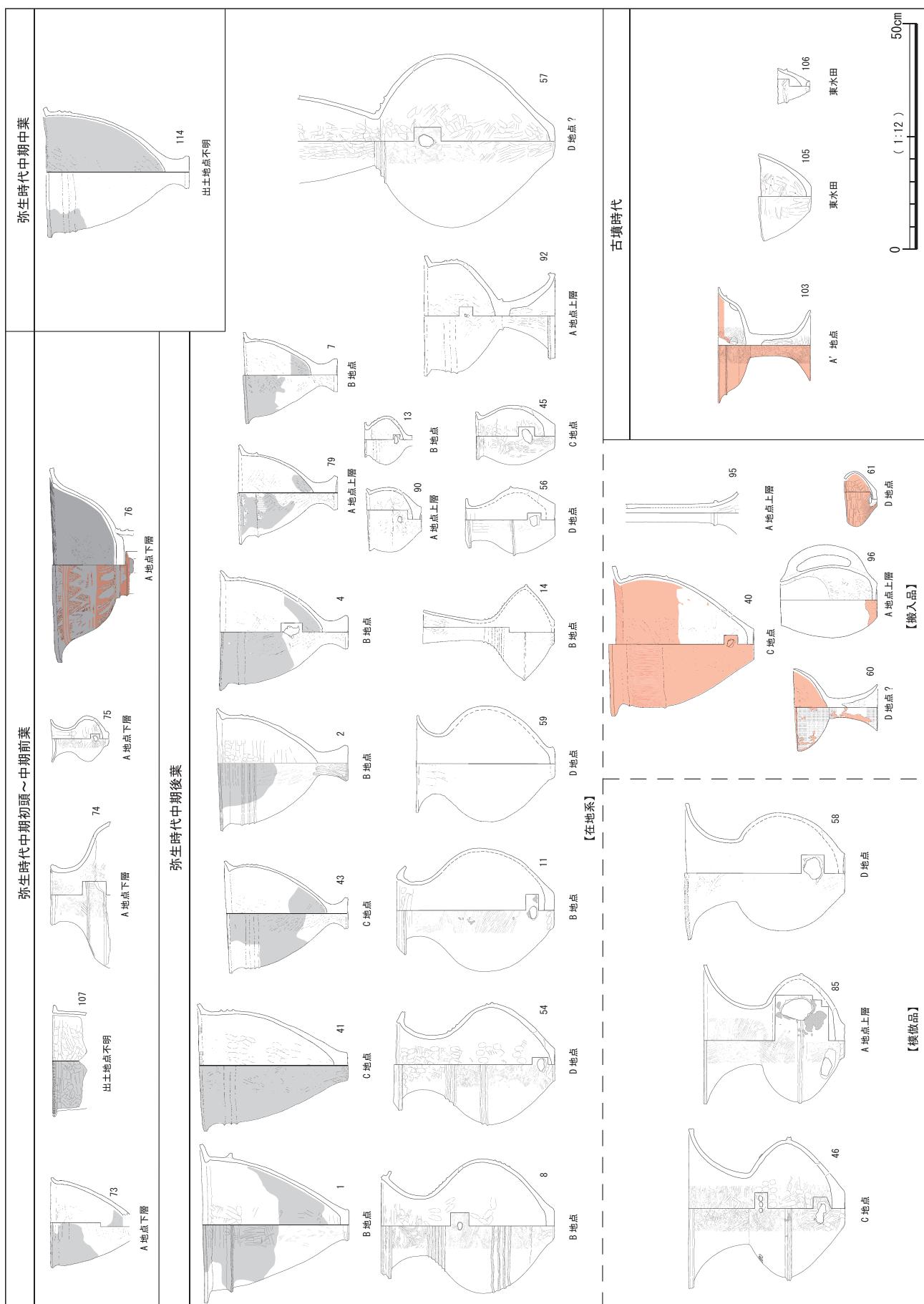
##### (3) その他の時期の土器

114は出土地不明であるが、山ノ口I式土器にあたる資料である。他遺跡の資料であることも否定できない。

103は、A'地点（砂鉄採掘地）から出土した高杯である。旧報告ではB地点で検出された円形の配石遺構の外周に配置された土器の一つと推定され、弥生時代中期に位置付けられている。類似する資料は指宿市成川遺跡や南摺ヶ浜遺跡で確認されているが、南摺ヶ浜遺跡では、弥生時代終末～古墳時代初頭の土器棺墓を構成する土器群に含まれている。103の土器は弥生時代中期の土器と共に伴するかどうか未確定であるため、形態的類似性から弥生時代終末～古墳時代初頭の所産と判断した。出土品のうち、この時期の土器は1点だけだが、本遺跡の東水田（105・106）や近接する出口遺跡で古墳時代の土器が確認されていることからも矛盾はないものと考える。

##### (4) 小結

本遺跡は、弥生時代中期初頭～前葉に形成され、東九州からの搬入品も確認される。本遺跡の主体となる弥生時代中期後葉の山ノ口II式の段階では、北部九州や中九州からの搬入品が確認できる（第49図）。出土遺物から



古墳時代まで続いたものと思われるが、遺物量は少なく、その主体は調査地点の周囲にあるものと推測される。

## 2 出土した軽石製品について

本遺跡では、磨製石鏃等の剥片石器のほか、多量の軽石製品が出土した。特に軽石製品は、本遺跡を特徴づける遺物の一つであり、また本遺跡の性格を検討するための重要な要素と考えられる。そのため本項では、軽石製品の検討を行う。

### (1) 出土した軽石製品の製作技術

南九州において軽石は、弥生時代以前から用いられる素材であり、縄文時代においても様々な軽石製品が出土している。本遺跡から出土した軽石製品が縄文時代の軽石製品と大きく異なる点は、加工痕である。第29図50や第42図101など非常にシャープな加工痕が認められることから、軽石製品の加工工具として硬質な金属製品が用いられたことが想定される。本遺跡で出土した軽石製品は、重厚なものも含まれている。素材が軽石とはいえ、硬質な金属製品を加工工具として用いていたからこそ、大型で具象的な軽石製品の加工が可能となったともいえる<sup>(註1)</sup>。

### (2) 出土した軽石製品の原型

本遺跡から出土した軽石製品は、岩偶や家形など特定の形を目的として作られたものと、加工等に用いられたものがある。特に前者は、これまでの研究で山ノ口遺跡の性格を考えるうえでの重要な指標となっている。そのため、前者について何の形を目的として作られたのか改めて検討したい。

第41図98や第42図99は人物を、第43図101は家を目的として作られたものと考えられ、これまでの研究でも異論は唱えられていない。一方第43図100は、石棒やもしろくは家形と考えられていないので、定説をみない。宮崎県塚原遺跡でも類似する軽石製品が出土しているが、男女の性器を併せて表現したものか家を表現したものとされている。また、第29図50は、これまで陰石とされていたものであるが、前述のとおり出土状況から容器の可能性もあることを本報告で指摘した。いずれも現段階でどちらかだと断定することはできないが、仮に第43図100を家形、第29図50を容器とした場合、河口氏が想定する、「縄文時代後晩期に南九州において発展した性器信仰が農耕文化と結びついて、山ノ口遺跡における祭祀になった」という考えは、成り立たなくなる。そのため、今後類例の増加をまって、改めて検討すべき事項と考える。

## 第2節 遺跡の性格の検討

### 1 山ノ口遺跡の特徴について

まず、本遺跡の性格を改めて検討するにあたり、本遺跡の出土状況等の整理を行う。

本遺跡では、弥生時代中期後葉を中心とした環状の配

石遺構9基とその周囲から、焚火跡が検出され、立石や多数の土器や軽石製品等が出土した。弥生時代中期後葉において、出土した土器の構成割合は、壺が最も多い（第51図左）。また、焼成後穿孔された土器も壺が最も多く（第51図中央）、壺は欠損部分により穿孔の有無が判断できないものを除く全ての土器に確認された。これらの特徴から、本遺跡が生活遺跡ではなく、祭祀遺跡であることは明らかである。ただし、何を目的とした祭祀なのかが重要であり、各研究者間で意見の相違が見られる部分もある。

なお、出土した土器は、開聞岳起源の暗紫ゴラが付着したものが多数みられた。暗紫ゴラの付着している箇所に着目すると、口縁部や胴部最大径付近に付着しているという特徴がある。また、暗紫ゴラが付着している面は片方の側面に限られており、かつ風化が激しいという特徴もみられた。これらの特徴と出土状況から、土器の埋没過程を想定した図が第50図である。まず、第1段階は、「①正位で設置され、風等で横倒しになる。②横位で設置される。③半分程度埋めた状態で横位に埋設される。」の3パターンが想定される。その後、第2段階で片側面の風化と埋没が進み、第3段階で暗紫ゴラが降下してきたと思われる。なお、土器の倒位方向から北西～南西方向と北東～南東方向の2グループに分けることができる（第51図右）。本遺跡が所在する錦江町にある田代の最多風向は、夏期が南東からの風、冬季が北西からの風であり（鹿児島県ホームページ参考）、土器の倒位方向と対応している。よって、第1段階で想定した3パターンのうち、①の可能性が最も高いものと思われる。

## 2 山ノ口遺跡の性格の検証

前述のとおり、山ノ口遺跡の性格については、農耕祭祀とする説と墓地とする説がある。農耕祭祀説については、蘇塗に関わる鳥を模造した木製品や石製品が出土しておらず、本遺跡が村や寺院の入口とは考えにくいことから、長野氏の指摘のとおり（長野2017）、本遺跡の出土状況から充分に説明できているとは思えない。

一方、墓地説についても、人骨や墓壙等、本遺跡が墓域と確証づけるものは確認されていないため、判断が難しい。中園氏のように環状配石を円形周溝墓と考え、環状配石を構成する軽石やその周囲で出土した土器を周溝の中に落ち込んだものとする考え方もあるが（中園2004）、墓壙や周溝が検出されていないため、確定できない。立石は、成川遺跡・南摺ヶ浜遺跡・枕崎市松之尾遺跡で確認されているが、立石を伴う墓と断定できるのは、立石に隣接して土器棺墓や人骨が出土した弥生時代後期以降であり、弥生時代中期後葉の事例は確認できない。本遺跡で出土した土器自体も、本来正位で置かれていたものと想定しているため、土器棺墓とは捉えがたい。ただし、

弥生時代後期以降の立石墓が確認された遺跡と、焚火跡の検出や穿孔土器や武器（磨製石鏃や鉄製武器）の出土等共通する事項も多い。よって、農耕祭祀説より、墓地説のほうが可能性が高いと思われるが、状況証拠による推測しかできないのが現状である。少なくとも、以前河口氏が指摘したとおり、山ノ口遺跡の祭祀状況が、弥生時代後期以降の立石墓の原型である（河口1987）ことは、言えるかもしれない。今後、本遺跡残存箇所の発掘調査が行われる際は、墓壙や周溝の有無に留意した調査が望まれる。

#### 【註釈】

1 寒川朋枝氏のご教示による。

#### 【引用・参考文献】

鹿児島県ホームページ URL : <http://www.pref.kagoshima.jp>.

[jp/ah12/kurashi-kankyo/sumai/kankyo/hoshin1/theme3/03.html](http://jp/ah12/kurashi-kankyo/sumai/kankyo/hoshin1/theme3/03.html)

河口貞徳 1987 「隼人の埋葬」『鹿児島考古』第21号 鹿児島県考古学会

河口貞徳 1995 「考古学における型式の動態」『鹿児島考古』第29号 鹿児島県考古学会

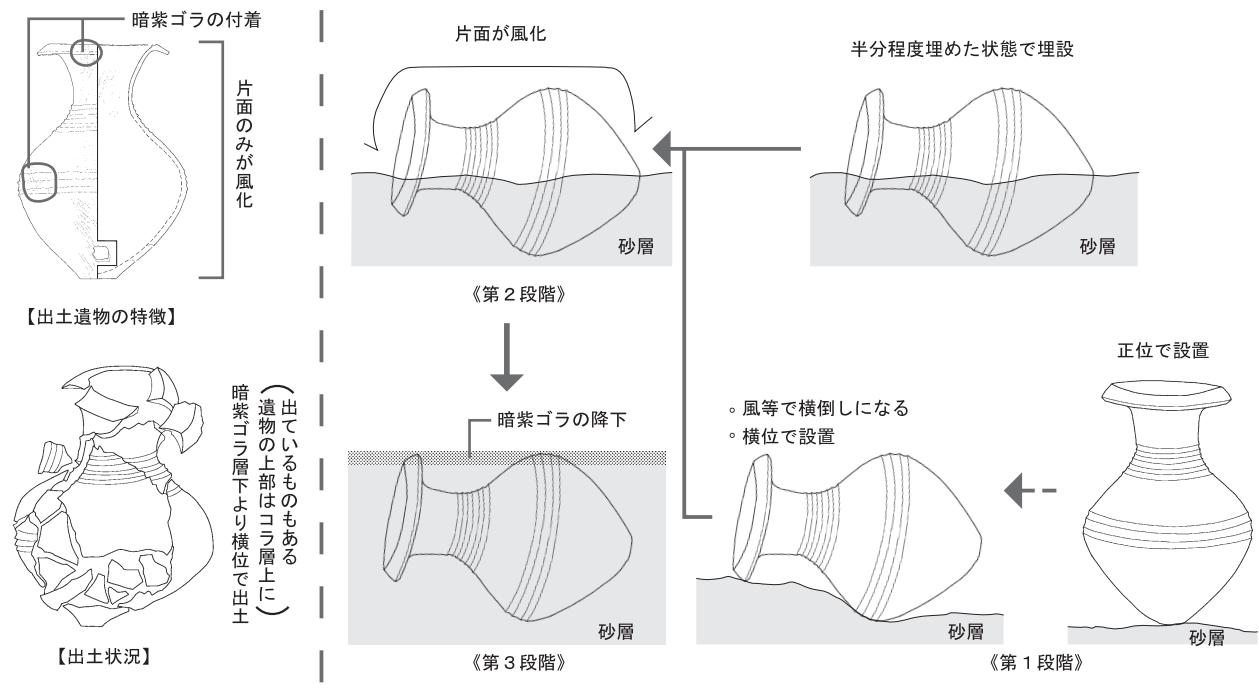
中園聰 1997 「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』9 人類史研究会

中園聰 1998 「丹塗精製器種群盛行の背景とその性格」『人類史研究』10 人類史研究会

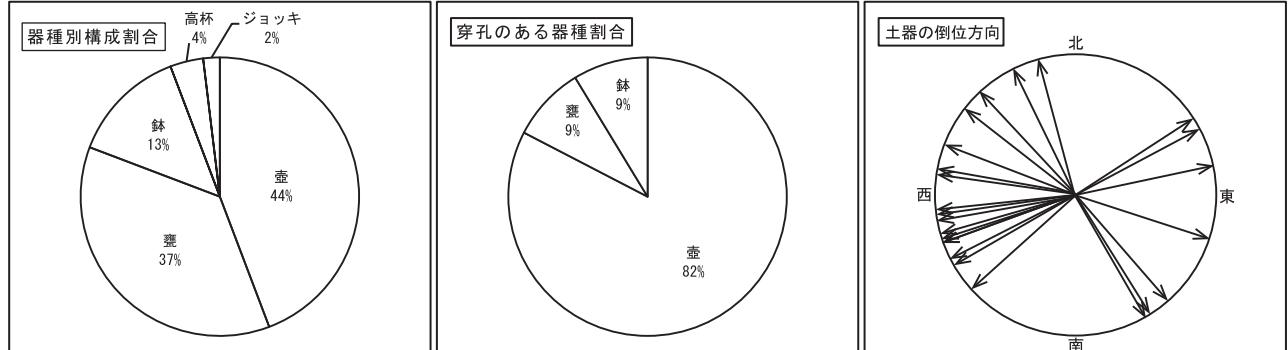
中園聰 2004 「墳墓にあらわれた社会構造」『九州弥生文化の特質』（財）九州大学出版会

長野眞一 2017 「山ノ口遺跡考」『鹿児島考古』第47号 鹿児島県考古学会

平美典 2015 「鹿児島県出土の須玖式系土器」『鹿児島考古』第45号 鹿児島県考古学会



第50図 土器の埋没過程想定図



第51図 弥生時代中期後葉の土器群の諸要素

# 附編

## —旧報告の再録—



# 山ノ口遺跡

河口貞徳

河口貞徳 1960 「山ノ口遺跡」『鹿児島県文  
化財調査報告書』第7集 鹿児島県教育委員会  
附編 1

## 本文目次

第一章 調査経過	六
第二章 遺跡	一一
第一節 遺跡の状況	一一
1. 地層	一一
2. 出土状況	一一
第三章 文化遺物	一六
第一節 土器	一六
第二節 石器	一九
1. 石鏃	一九
2. 曲玉	一九
3. 岩偶	一九
4. 石棒	二〇
第四章 山ノ口遺跡の考察	二一
遺物の観察	二二
土器以外の遺物	二三
B 地点出土土器一覧表	二三

## 挿図目次

挿図	
挿図 1.	遺跡附近地形図
挿図 2.	遺跡発掘区割図
挿図 3.	断面図
挿図 4.	遺跡調査全景図
挿図 5.	土器測定図
挿図 6.	土器測定図
図 7.	石鏃・曲玉測定図

## 図 版 目 次

- 図 版 版 1. a. 遺跡全景 b. 発掘状況
- 図 版 版 2. a. 発掘全景(西側より) b. 発掘全景(東側より)
- 図 版 版 3. a. 発掘全景(北側より) b. 遺物出土状況(南側より)
- 図 版 版 4. a. 軽石加工品出土状況(トレンチ2区～トレンチ2区) b. 石器出土状況(トレンチ4区、No.8 土器附近) c. 出土状況(No.1 a b) d. 出土状況(No.2 a b)
- 図 版 版 5. a. 出土状況(No.3 a b) b. 出土状況(No.4) c. 出土状況(No.5 a b) d. 出土状況(No.6)
- 図 版 版 6. a. 出土状況(No.7 a) b. 出土状況(No.7 b) c. 出土状況(No.8 a b c) d. 出土状況(トレンチ3区)
- 図 版 版 7. 土器、1～3、5～8、A 地点出土、4：国分市口輪野洞窟出土
- 図 版 版 8. 土器、9～16 B 地点出土
- 図 版 版 9. 土器、17～22 B 地点出土、23～28 A 地点出土
- 図 版 版 10. 土器、29、31～35 A 地点出土、30、B 地点出土
- 図 版 版 11. 軽石製品、A、B、C、A 地点出土、D、B 地点出土
- 図 版 版 12. 石器、A A 地点出土、B、C、B 地点出土

### 第一章 調査経過

山ノ口遺跡は、鹿児島県肝属郡大根占町馬場にあり、大隅半島の南端に近く、佐多岬より一・五km北方に当つており、ちょうど、指宿の対岸にあつて、鹿児島湾にのぞむ海岸に位置している。

本調査の動機は、昭和三十三年五月、同地域において、東方金属株式会社が、砂鉄の採掘を行つた際に、弥生式土器と、岩偶等が出土したことから始まる。

昭和三十三年七月、鹿児島県山川町成川遺跡発掘中に、大根占町神川小学校教頭の神田三男氏が、前記山ノ口砂鉄採掘地から、軽石製の土偶様の遺物が弥生式土器と併せた事実を伝え、その見取図を示された。<sup>(注1)</sup>

その後同年八月末、資源科学研究所の和島誠一氏が、大隅の調査を行われた際に、同遺跡出土の遺物の一部を実測し、鹿児島県社会教育課文化係に報告された。

山ノ口遺跡は、砂鉄採取地となつていたため、遺跡破壊の恐れがあつたので、県文化係では、同年十一月廿三日、現地の調査を行つたのである。遺物は、大根占中学校に保管され、又大根占小学校、南大隅高等学校根占校舎等に分散し、一部は鹿屋市大黒小学校、指宿市湊富永美氏宅等に所蔵され、現地民家にも、もしかえられていることが判明した。

現地附近の民家に残された軽石製品等は、子供の玩具にされ、破損して行く状況であり、各地に分散したものは紛失の恐れもあつたので、手をつくして収集保存につとめた結果、残存していた遺物の大部分を收める事が出来た。

遺跡は、県道に沿つた水田であつて、前記神田三男氏の外、大根占中学校教頭坂元貞夫氏、南大隅高等学校教諭福留久光氏等の目にとまり、遺跡の発見となつたものである。

遺物の出土状況については、砂鉄採掘作業に従事した、岩下次男氏がよく注意しておられ、同氏の記憶は参考になる点多かつた。

遺物は、弥生式の前期より中期に及ぶもので、軽石を素材とした岩偶、石棒、曲玉等を含み、極めて重要で、且つ類例のすくない遺跡である事が判明した。この地は砂鉄採掘のために、遺跡の破壊が行われる恐れがあつたので、昭和三十三年十一月十五日より、翌年一月四日まで、十一日間の発掘を行つた。<sup>(注2)</sup>

発掘にあつては、県社会教育課主事、松下正敏氏は種々斡旋の労をとられ、大根占町当局より援助を受け、又町民各位の好意を受けて、発掘

に多大の便宜を得た事を記して、厚く感謝の意を表したい。

また、坂元真夫氏、神田三男氏、福浦久光氏は直接発掘に付与され、一方諸般に渡る御世話をいたしまして、発掘の遂行に重要な役割を果していた。現地南大隅高等学校学生及び、大根占中学校学生有志の発掘作業参加を得たことと共に、記して感謝の意を表したい。

遺跡は、大根占町沖積平野の南端にあたる海浜地で、背後には肝属山地の北縁部がせまり、前面は、百米余で海岸線にのぞむ、水田地帯である。現在の地形は、山脚部より次第に、階段状に海岸に向つて低くなつてゐるが、元地形は、おそらく、なだらかな傾斜をもつて海岸線に達していたものであろう。

この地帯の中央部を県道が南北に走り、これを挟んで遺跡がひろがつてゐるが、中心部は県道より、西側の地域である。(挿図1 図版1a)

附近的遺跡分布状況を見ると、山ノ口遺跡南部の小丘上には根占町千束遺跡がある。この遺跡は弥生式後期に属する広範囲に渡る遺跡で、多量の遺物を出土し、鐵製品の伴出がみられる。

山ノ口遺跡の北方約一耕の地点においては、市街地の中心地帯の道路工事場より弥生式後期の遺物が多量に出土しており、大根占平野中心部の水田地帯においても、弥生式後期の大遺跡がみられ、大根占町一帯は、豊富な弥生遺跡地であることを示している。<sup>(注3)</sup>

発掘に選んだ地域は、山ノ口部落の南端の水田地域で、県道に沿つた海岸側の地点である。今回の発掘は、昭和三十三年五月に行われた砂鉄採掘地点と、同じく砂鉄試掘地点との中間を選んだ。(挿図2)

記述の便宜上、昭和三十三年五月に行われた砂鉄採掘地点及び、砂鉄試掘地点をA地点、今回の発掘地点をB地点と呼ぶこととする。

発掘区域は三枚の水田にまたがり、I、II、III、IVの四本のトレンチに区分し、発掘面積は、一三〇平方メートルに及んだ。(挿図2)

次に発掘日誌に従つて、調査の概要を述べる。

十一月二十五日、五月に行われた砂鉄採掘地と、砂鉄試掘地点との中間地域を、県道に沿つて、N E四七度の方向に、2×20米のIトレンチを二枚の水田にまたがつて発掘し、北より2米毎に区画して、1区～10区とした。

さらにIトレンチの西側に、2.5米の間隔をおいて、Iトレンチに平行に、2×10米のIIトレンチを発掘し、北より2米毎に区画し、1区～5区とした。(挿図2)

Iトレンチ1区の北側は、砂鉄採掘箇所に重なつてゐることが判明し、IIIトレンチ5区は、砂鉄試掘箇所に重なつてゐることがわかつた。  
(挿図2)

遺物の出土状況をみると、Iトレンチ6区に、地表下約一メートルの砂鉄層上から、壺形土器No.1aと、壺形土器No.1bとが相接して出土し、(挿図4 図版4C)、7区より同じ地層から壺形土器No.2aと、小型壺形土器No.2bとが相接して出土した。(挿図4 図版4d)

十一月二十六日、IIトレンチ1～2区境界より壺形土器No.3aと、壺形土器No.3bとが相接して出土した。層位は前と同じである。(挿図4 図版5a)

Iトレンチ8区砂鉄層上より、軽石を材石とした曲玉一箇出土。(図版1-1, D, 右上、挿図7, A)

十一月二十七日、IトレンチとIIトレンチの中間地点をIIトレンチとして発掘を始める。2.5×12米の範囲である。北より2米毎に区画し、1区～6区とする。(挿図4)

Iトレンチ10区、砂鉄層より軽石を材石とする曲玉一箇出土。(図版1-1, D, 左上、挿図7, B)

十二月二十八日 IIトレンチの発掘を行ふ、5区、6区は砂鉄試掘地点と重なつてゐることが判明した。(挿図2)

十一月二十九日 IIトレンチ3区、4区に砂鉄層上に軽石礫を弧状に配列した箇所を発見する。(図版3c, b、挿図4) 2区と3区の境に、砂鉄層上に、軽石礫に沈刻したものの出土(図版6, d、挿図4) 3区、砂鉄層上に壺形土器No.4一箇(図版5, b、挿図4)

2区、砂鉄層上に磨製鎧一箇が出土した。(挿図4)

十一月三十日 遺物出土状況の実測図を縮尺1/10、1/100で作成を始める。

十二月三十一日 軽石礫が弧状に配列した遺構を追求して、予定外の西側水田を借用し、発掘区域を拡張し、IIトレンチに接して4×10米のIIIトレンチを設け、北より2メートル毎に区画して1区～5区とする。(挿図2)

IIIトレンチ1区～2区間に、壺形土器No.6が砂鉄層上に出土した。(図版5, d、挿図4)

一月一日 IIIトレンチ1区、北側境界線上に壺形土器No.5a、長頸壺形土器No.5bが相接して砂鉄層上に出土した。(図版5, C、挿図4)

2区、西側砂鉄層上に壺形土器No.7aが出土、この土器の上面は火山灰層(コラ層)で覆われていた。(図版6, a、挿図4)

3区～4区境 砂鉄層上、東側より壺形土器No.8a、壺形土器No.8b、cが出土した。(図版6, c、挿図4)

一月一日 IIIトレンチ4区、No.8b壺形土器直下及びその附近より磨製石鎧五箇出土した。(図版4, b、挿図4、図版1-1, B、挿図7  
1～5)

全部の遺物を採取する。

一月三日 ■トレンチ、2区く3区境、砂鉄層中より彫形土器No.7 bが出土した。(図版六、b、挿図4)

これまでの出土遺物を全部採り上げ、さらに下層を発掘した。■トレンチ1区、No.1 a 彫形土器附近の砂鉄層中より磨製石器が出土し、前記の石器を合せると計五箇が出土した。4区砂鉄層中から軽石を材石とする曲玉がさらに一箇出土した。(図版一、D、右下、挿図七、C)

■トレンチ2区には稍々大きな軽石加工品を中心に、軽石の小礫群が砂鉄層中より出土し、図版四、a、挿図4) ■トレンチ3区からは、砂鉄層に基部を有する54×39mmの長方形の火成岩が面を水平位にして出土している。(挿図4)

一月四日遺跡の埋立作業を行ふ。

以上の如く今回の発掘は、■トレンチより■トレンチにわたつて発掘を行つたが、遺構の主要な部分は■トレンチの南半分とI、■トレンチの区画に位置し、軽石礫を円形に配列したものを中心として、これを囲む土器群の配置、たき火の跡の配列等であつて、この遺構は殆完全に発掘することが出来た。しかし、I、■トレンチの5区は砂鉄層掘の際に掘り取られていたために、軽石礫の円形配列の一部は欠損した状態であつたが、この部分から出土した完全土器は、四箇であつたと伝えており、内一箇の高杯形土器は資料として取り入れることが出来た。

(図版一〇、29)

### 調査組織

調査主体	玉龍高等学校考古学部
共 催	大根占町
後 援	南大隅高等学校
発掘責任者	県文化財専門委員
全 権 助員	玉龍高等学校卒業生
全 全	鹿児島大学学生
全 全	玉龍高等学校学生
全 全	全
	河 口 貞 德
	池 水 寛 治
	上 村 俊 雄
	和 田 光 司
	鶴 川 昭 憲

全 全	全	藤 田 豊 彦
発掘協力者	大根占中学校教頭	坂 元 貞 夫
全	神川小学校教頭	神 田 三 男
全	南大隅高等学校教諭	福 田 久 光

注1 昭和三十三年七月より八月にかけて、鹿児島県山川町成川の弥生式立石墓の発掘が、文化財保護委員会の主宰によつて行われた。

注2 昭和三十三年五月砂鉄採掘の際、砂鉄採別機によつて数箇の曲玉が発見されたが、砂と共に埋没された。

注3 昭和三十二年～三十三年に、町の中心街をなす道路工事が行われて居り、この地域より弥生式後期の遺物が、おびただしく出土している。この地域も海岸に近い。

注4 大根占町木場、岩元氏所有の平野中心部にある水田は、地下二〇cm位の深さから多量の弥生式土器が出土し、完全土器も多く、鉢形土器中から人骨の一部が出土した例がある。注意すべき後期の遺跡である。

## 第一章 遺跡

### 第一節 遺跡の状況

#### 1. 地層

遺跡は水田であるから地表は水平であるが、内部構造をみると、地層は西南方向にあたる海岸線へ向かって緩傾斜を示し、大体四層を数え、この他に酸化鉄、火山灰等の断続した層が含まれ、これらを含せると八層となる。（挿図3）

I層 表層一二五厘米～三五厘米、砂質の土壤で耕土となつてゐる。

II層 酸化鉄富化層厚薄さまざまであり、表層の下部に酸化鉄分が溶融集積したものと思われる。この層は地隙にそつて下方へ溶融して柱状を示し、遺物に固着して凝固し、そのために遺物が赤褐色に染まつてゐる場合があるが、遺跡生成以後の現象であろう。

最下部の砂鉄層中深く、柱状に入りこんでいる場合がしばしば見られる。

III層 暗褐色土層 耕土の直下の稍々砂の多く混ざつた土質で、厚さも二〇厘米～四〇厘米でよく発達してゐる。この中に点々と火山灰の堆積層（IV層）を含んでゐる。

IV層 火山灰堆積層 III層又はV層に挟まれた間層である。稍々青味を帯びた細かな火山灰が堆積したものであるが、断面していて厚さも一〇厘米以内の薄いものである。

V層 黄褐色砂層 これは一部では下層の褐色砂層との境が明瞭でなく、またIV層と同様に火山灰堆積層を含んでゐる点からみても、独立した一箇の層とみることは不適当とも思われる。一部には二〇厘米～四〇厘米の厚さに発達した部分もみられる。

VI層 暗褐色砂層二〇厘米～四〇厘米、下部の砂鉄層への漸移層である。

VII層 火山灰堆積層（コラ層）前記のVI層中に含まれ、紫色を帶び、粒子は細かでやゝ硬く、IV層よりさらに薄く、発達も悪く断続してゐる。指宿方面でコラ層と呼ばれている地層と同一物と思われる。

出土遺物は、コラ層下に位置しているが、遺物の上部はコラ層上に出ているものもあつて、土器等の一部にコラが固着した例もある。この事実は遺跡生成後もなく遺物が未だ埋没し了らなかつた時期に、火山灰の降下が行われて堆積したもので、この遺跡の成立時代は、コラ層の生成時

代以前であると思われる。

VIII層 砂鉄層 砂鉄を含む海成層で非常に厚く、その底部は知る事が出来ない。遺物は多くは、この層の上部に乗つており、一部の遺物が小量この層の内部にくい込んで出土している。

右の出土状況からみて、この層の表面が地表を形成していた時代があつて、この時代に遺跡は形成されたものであろう。

VII層は、V层と共に遺物包含層と云えるかも知れないが、遺跡成立後、堆積したものと思われる。

VII層表面の遺物出土面には、一般の住居跡のような有機物の混在によつて、土層が黒づむような状態は全然みられず、遺物の存在している附近にも全然それがみられないのは、この遺跡の一つの特徴とみることが出来る。（挿図3）

#### 2. 出土状況

遺物は地表下約一米の純粹砂層上か、或いは砂層に稍々くい込んだ位置に出土し、内径約三米の軽石礫の環状配石を中心にして、周囲に壺形土器と壺形土器とを組み合せ、或いは、それらの土器を単独に配置している。（挿図4）

環状配石の周囲に配置された土器は、総計十五箇を数え、三十三年五月の砂鉄試掘箇所に出土した四箇を加えると、十九箇の土器によつて囲まれていたことになる。

十五箇の出土土器のうちNo.4及びNo.6の壺形土器をのぞくと、他の土器は11箇以上のセットをなして出土している。セットは壺形土器と壺形土器とから成つており、No.5とNo.7のセットを除くと、他のセットは壺形土器を北側に置き、その南側に壺形土器を配置し、壺形土器と壺形土器のセットや、その各土器の配置には一定のきまりがあつたように思われる。

発掘によつて出土した十五箇の土器の形式をみると、壺形土器七箇と、壺形土器八箇である。その出土状況をみると、土器の破片の散乱がほとんどみられず、No.2 b、No.3 bの土器は破損せず原形を保つた盤出土し、他の土器もわれてはいるが、まじまつていて、略原形に近い形で出土している。たゞNo.5、No.6の土器は、IIIトレンチ区の一部に後世の掘り込みの跡がみられ、器形が稍々みだれている。

土器出土の位置は、横倒しの形となつたものが多く、No.2 b、No.3 a、b、No.8 aの四箇だけが斜位となつてゐる。口の向いた方向をみると、壺形土器は略西向きであり、壺形土器はNo.1 b、No.5 b、No.7 a、No.8 bの四箇が略東向きで他は西向きである。全部の土器中、十一箇が西向きで四箇

が東向きとなつてゐるわけである。

環状配石の外周の土器列の略外側に、木炭の出る箇所が七箇所あつて、環状配石の外周で焚火が行われた事を示している。

環状配石の中には自然礫に混じつて人工を加えたものがある。IIトレンチ3区の軽石加工品は七箇の穴を刻んだものと、三条の刻線と凹刻を施し、外周を細線で囲んだものがある。(種図4 図版六 d)

環状配石の東側と西側に配置された壺形土器は装飾の凸帯を施した美事な土器が選ばれており、この附近に、それぞれ五箇ずつの磨製石鎌が配置されている。(図版八、9、10、11、12) (図版一一 B、C) 環状配石の南側には、軽石製の曲玉三箇と、折損したもの一箇が出土した。

No.1 a、b 土器の出土状況(IIトレンチ6区)。(図版四、C)

No.1 b 壺形土器は、底部より1/4の箇所に孔を有し、孔を下位にして出土している。

壺形土器は、他の六箇もすべて孔をあけてあり、No.3 b の壺形土器は、孔をあけた際に出来た破片を内蔵していた。

No.1 a 壺形土器は平底であるが、この様な器形は南九州では始めての出土例である。

No.2 a、b の出土状況(IIトレンチ7区)。(図版四、d)

No.2 a の壺形土器は、酸化鉄の溶脱したものが固着して赤褐色を呈し、器合部が胴部の中へ陷入している。壺形土器の孔は下位であつた。

No.2 b の壺形土器は底部を欠失しているが、台付の土器であろう。

No.2 a の壺形土器は前面に炭素の付着が見られるが、(図版九、22)これは土中に埋没していた部分であつて、当時地表に露呈していたと思われる背面は炭素の付着がみられず、器面は磨滅しているのである。この事は、他のすべての土器にも共通する点である。

(図版八、15、16、図版九、17~22)

No.3 a、b 土器の出土状況(IIトレンチ、1区、2区)

壺形土器、甕形土器ともに、斜めにかたむいた状況で出土している。壺形土器は完全で、内部に孔をあけた際の土器片を内蔵している。孔は下位にして出土している。

鉢形土器は斜めに埋没していたために、左侧露上面は磨滅し、右侧は斜めに炭素付着部が残存している。(図版九、21)

No.4 土器の出土状況(IIIトレンチ、3区)。

甕形土器のみの単独出土である。

No.5 a、b 土器の出土状況(IIIトレンチ、1区)

甕形土器と壺形土器が、東西に並列して出土した特例であるが、掘り込みのために明瞭でない。壺形土器の孔は上位にして出土している。

甕形土器は長頸のめずらしい器形である。孔は底部中央に、円形の整った孔を有している。甕形土器は左半分に炭素が付着し、右側は器面が磨滅している状況が明瞭である。(図版九、18)

No.6 土器の出土状況(IIIトレンチ、1区)

甕形土器の单瓶に出土したもので、No.5とともに掘り込みによって稍々乱されている。

No.7 a、b 土器の出土状況(IIIトレンチ、2区、3区)

壺形土器はコラ層直下に出土している。この壺形土器から約70cm南側に、やや深く砂層中に埋没して、No.7 b の甕形土器が出土している。

壺形土器の孔は上位である。

壺形土器は無文で、頸部、胴部に凸帯を有する壺形土器のように口縁部は外反していない。

No.8 a、b、c 土器の出土状況(IIIトレンチ、4区)

甕形土器一箇と、壺形土器一箇が組合せをなして出土している。甕形土器は斜め、壺形土器は横倒しの形で出土し、セットの中央に位置していたNo.8 b の甕形土器の下には、石鎌が出土し、附近から出土した石鎌を合わせて五箇を数えた。(図版六、C)

b 壺形土器は孔を横位に、c 壺形土器は孔を上位にして出土している。b、c の土器は、ともに凸帯の多い華麗な土器である。

以上遺物の出土状況について述べてきたが、全体を通じて注目すべき点は、

1. 多量の遺物が出土したにもかゝわらず、生活址を思わせるような、有機物の混合による帶黒色の土層がなく、遺物はすべて純粹な砂層上に出土していることである。

2. 土器はある期間一部を埋没され、一部を地表に露呈して、雨露、風雪の浸蝕、磨滅を受けた後、遺跡全体が埋没したと思われることである。

3. ある期間、地表に遺物が露呈していたと思われるにもかくわらず、遺跡が擾乱を受けていないことである。<sup>(注1)</sup>

4. 土器が横倒し、或いは斜位で出土しているのは砂浜に直立していた土器が転倒したのではなく、始めから現在出土(発掘時)した状態で、遺跡が成立したものであらうと思われることである。

5. 蝶形土器には、「ヒビ」とく孔をあけてあるが、菱形土器には孔をあけたものがないこと等である。

注5 No.1 a 菱形土器の上部、No.7 a 蝶形土器上部にはコラ層が固着して出土した。

注6 No.7 b 菱形土器、No.1 a 菱形土器附近より出土した磨製石器のうちの四箇、トレンチ4区から出土した曲玉等は、砂鉄層中にくい込んでいた。

注7 大きな礫は三〇枚、小さなものは五枚位までの輕石を配列している。

注8 No.5 のセジトは並列された状態であり、No.7 のセジトは蝶形土器と菱形土器との距離は、約七〇枚ぐだくつており、セジトと呼ぶことは不適當かもしない。

注9 一箇は26×22枚の輕石の礫で、七箇の穴を刻み、他の一箇は14×8枚の礫で、三条の刃線と凹刻を加え、その周囲を細線で囲んでいる。

注10 No.1 b、No.8 b、c の土器で No.1 b 土器は肩部に七条、脛部に四条の凸帯を施し、No.8 b の土器は同じく七条と六条、No.8 c 土器は六条と四条の凸帯を施した華麗な土器である。

注11 No.8 c 土器は周囲を輕石で囲つてある点や、土器の口の向つた方向には一定のきまりがあつて、偶然と思われない。

## 第二章 文化遺物

### 第一節 土器

こゝに挙げる土器はA地点(昭和三十二年五月の砂鉄採掘地点及び同じく砂鉄試掘地点)より出土した資料と、B地点(昭和三十三年十一月~三十四年一月の発掘地点)より出土した資料である。

遺物包層は地表下一米の、旧砂浜と思われる砂層上部と、地表下約三米で同砂層の深部との上、下二層がある。

上層の遺物出土の状況をみるとB地点においては、前記砂層(圓層)上部に形成された、輕石礫による環状配石の外周に完形土器を配置した状態で十五箇の土器が出土している。この様な遺跡の状況からみて、これらの土器は一括して、大体同一時期に属するものとみてもよい。

A地点における遺物出土の状況は、砂鉄採掘作業に従つた岩下次男氏によると、大体B地点と同様の遺構があつたものと思われ、さらに地表下約三米の深層からも遺物の出土がみられたといふ。

A地点出土の遺物は形式学的にみても、一つの形式を含んでおり、この中の一つはB地点の形式と一致する。

A、B二地点より出土した土器を、以上のように形式に分け、下層の土器を山ノロ一式とし、上層の土器を山ノロ二式として記述する。

#### 1. 山ノロ一式(下層土器)

蝶形土器(挿図五、1)脣部のはつた土器

頸部はしまり、口縁部は外反している。下腹部は欠損して不明である。頸部及び肩部に平行弦線を施し、頸部はさらに縦に短かい平行弦線を刻み、口縁外面には稍々深い沈線を、また、口縁内面には縦に刻線を施している。裏面には刷毛目が少しある。焼成はかたい。

小型蝶形土器(挿図五、3)脣部のはつた玉壺状の胸に大きくひらいた広口の頸部をつけた壺である。頸部と脣部との境が屈曲して壺が稍稍明瞭で、底部は円板を貼りつけた形の平底である。器面は粗で凸凹が多く、輪積みの跡をのこしている。胎土は砂と雲母片をふくみ、質はかたく色調は茶褐色である。なで仕上げであるが、頸部には窓でけずつたあとをのこしている。下腹部に小孔をうがつしている。

菱形土器(挿図六、15)脣部の張つた壺である。頸部はしまり、口縁部へ外反し、脣部以下は急にしまつているが、底部は欠損して不明である。

高杯形土器(挿図六、16)平らな杯に、高い口縁部が斜について先端で外反し、上面は平らな広い縁を形づくり、内縁は段をなしている。

脚部は中空で短く、二条の凸帯をめぐらしている。

口縁端部及び脚端には、細かな縦刻文を帯びていている。文様は、杯部外面及び脚部を青黒色のさじに、丹彩の並行線文、錐齒文等の華麗な幾何学文で飾り、杯部内面は部分的に青墨色で彩色し、口縁上面は青墨色の山形文を施している。胎土は砂粒及び雲母片をふくみ、色調は黄色である。内外面とも磨磨仕上げであるが、刷毛目仕上げの部分もある。

以上にあげたものは、いずれもA地点出土のものである。北九州前期の形式に共通する要素をもつていて、高杯の口縁部の内側に段を有する点などからみて、弥生式前期の終りころに位置する形式とみるべきではないかと思ふ。

## 2. 山ノ口二式（上層土器）

壺形土器A（插図五、10）胸部のいやじるしくはつた偏球形の器体に、口縁部が朝顔形にひらき、太く直立した頸部をつけた壺で、胸部には幾何学的な凸帯を一条めぐらしている。底部は比較的厚く、安定した土器である。磨磨仕上げで、内面も滑らかに仕上げ、ところどころ箇所があるがみられる。胸部に内面に青墨色の彩色を施したものもある。色調は紅褐色をおび、焼成は弱く、胎土には砂粒及び雲母片をふくんでいる。口径29、櫛、復径28、高さ31厘米。

壺形土器B（插図五、5、9、12）腹部のはつた球形に近い器体に、大きくひらいた頸部をつけた壺である。口縁は「丁」字形（5、12）と、複雑な形のもの（9）がある。「丁」字形口縁のうち12は内側に、はり出し狀の小凸帯が付着している。いずれも頸部に7本ないし6本、胸部に4本の凸帯をめぐらしている。

磨磨仕上げであるが、頸部の一部に刷毛目を残すものもある。色調は紅褐色をおび、胎土には砂粒及び雲母片をふくんでいる。

壺形土器C（插図五、4、8、11）腹部のはつた球形に近い器形は前者に似ているが、頸部が短かく、口縁のひらきが弱い。口縁部は「丁」字形、または「丁」字形で、凸帯はつけていない。仕上げの手法、胎土等は前者と全く同じである。

合付無頸壺形土器（插図五、6）腹部のはつた球形に近い胸部に、器台のついた壺形土器である。器台部は欠けているが、おそらく充実した器台であつたろうと思われる。肩部に3条の凸帯をめぐらしている。磨磨仕上げで色調は紅褐色、胎土は砂及び雲母片をふくみ、焼成は良好である。長頸壺形土器（插図五、7）算盤玉にちかい形の胴に、直口で上部にむかって次第にひらく、細長い頸部をつけた土器である。

頸部に8条、腹部に1条の凸帯をめぐらしている。底部には円孔をうがつしている。磨磨仕上げであるが、胸部内面は刷毛目をこしてある。

把手付無頸壺形土器（シヨソキ形土器）（插図六、20）中ふくらみで、下部に重心のある安定した無頸土器である。縦位に把手をつけ、全体の形がシヨソキによく似ている。

外面は丹採磨研し、さらに上部は縦位に、下部は横位の繊状の磨擦線をほどこしている。胎土は砂粒をふくまず、内面の色調は黄色である。

高杯形土器（插図六、14、17、30）30が標準的な形式ではないかと思われる。丹採磨研の土器で、中空の脚柱は上部から下部へ稍々細くなり、下方は漏斗状に拡がり、杯部は皿状で周間に口縁部が斜につき、先端は外反している。杯の外面には一条の凸帯をめぐらし、内面には半球形の降起がある。胎土は砂及び雲母をふくみ質はかたい。

14、17は口縁部が垂直または、稍々内敛して深く、「丁」字形に外反し、外面に2条ないし3条の凸帯をめぐらし、脚は中空で直ちに漏斗状に拡がり、とくに17は、脚と杯の埋及び脚の下端に凸帯をめぐらし、下端の凸帯は縦刻を施して装飾している。17は刷毛目仕上げ、14は磨磨仕上げである。

壺形土器（插図六、18、19、21～26、29）、直口に近い平底壺形土器（24）と、鑓形の胸部に、充実した器台を付けた壺形土器の一式があるが前者は出土例は外なく、後者が一般的である。24は広い「丁」字形の口縁部の下に1条の凸帯を設け、底部は比較的小さい。

器台付のうち23は口縁部が「丁」形で内側へややはり出し、凸帯はなく、外側に輪積みの跡をのこしている。

18、19、21、22、25、26は口縁部が「丁」字形をなし、内側へやはり出したものもある。

口縁部内面に接着の痕跡を残すものが多い。口縁下に1条ないし3条の凸帯をめぐらしている。胎土は、砂と雲母片をふくみ、質はかたく、刷毛目仕上げである。

以上の上層の土器は、20の土器をのぞいて胎土は砂粒と雲母片をふくみ、質はかたく、色調は紅褐色に焼かれているものが多い。とくに壺形土器にかぎつてそれをうがつしている。

A地点出土の壺形土器には「丁」形の口縁に刻目を入れたもの、口縁内側に段を有するものなど収録した資料でも、やゝ口縁部の変化等が見られるが、大体一時期に属するものと云えよう。北九州土器形式の影響がみられ、とくに口縁部や凸帯に須恵式の手法に類似の点がみられる。

弥生式中期の一様式といえよう。

## 第二節 石器

### 1. 石鏸

No.8 土器附近出土の石鏸(トレンチ4区)、夏岩製、磨製石鏸(挿図七、1~5、図版11、B)挿七、1は長さ3.1厘、幅1.75厘、厚さ0.25厘。2は長さ4.75厘、幅2.65厘、厚さ0.3厘。3は長さ6.2厘、幅3.3厘、厚さ0.3厘。4は長さ4.3厘、幅2.35厘、厚さ0.3厘。5は長さ5.3厘、幅2.5厘、厚さ0.3厘、尾部に溝がある。以上の各鏸は磨いた時に出来たと思われる擦痕がついている。

No.1 土器附近出土の石鏸(トレンチ6区~トレンチ1区)、(挿図七、6~9、図版11、C)夏岩製、磨製石鏸、挿図七の6は長さ5.4厘、幅2.6厘、厚さ0.31厘。7は長さ6.17厘、幅2.65厘、厚さ0.29厘。8は長さ4.65厘、幅2.45厘、厚さ0.24厘。9は長さ5.3厘、幅2.65厘、厚さ0.27厘である。これらの石鏸も前者と同様に擦痕を有している。

### 2. 曲玉

火山噴出物である軽石を材石とした大形の曲玉で、環状配石の南側に出土している。孔は両側からあけられ、表面には酸化鉄をぬった跡をとどめている。装飾品というより、祭祀等に使用される儀器ではないかと思われる。挿図七のAは長さ6.3厘、幅1.8厘、厚さ1.46厘。Bは尾部は欠損しているが、そのまゝの測定値は長さ4.9厘、幅1.9厘、厚さ1.8厘。Cは長さ6.2厘、幅1.8厘、厚さ1.48厘である。(図版11、D)

### 3. 岩偶

A地点に出土したもので、その出土状況は明瞭でないが、岩下次男氏よりの聞き取りによれば砂鉄採掘地点よりの出土で、上層部よりの出土である。素材は軽石であつて現存しているものは、図版11のA、Bの二箇のみである。

Aは高さ26.5厘、幅14.3厘、厚さ7.2~8.0厘である。顔面をぱり出し、目と口は凹め、髪に11箇所の刻みを入れて、はちまきを表わしている。肩以下は省略されているが、胸に乳房を表現する隆起部が11箇所ある。下面には2厘の径をもつた穴が、深さ4厘に掘り込まれている。

Bは高さ30.5厘、幅17.2厘、厚さ4~8.2厘である。顔面を剡んで稍高くし、目と口と膨りくぼめ、鼻は剡んで高くし、両耳に孔をあけている。これは恐らく耳飾りをはめている状態を示すものであろう。胴体は省略しているが断面は菱形をなし、下方に次第に細くなっている。

右の他に同地点より出土した、軽石製の岩板が大根古小学校に処藏されているというがまだ実物に接していない。

### 4. 石棒

A地点出土の軽石を材石とするものである。図版11、Cがそれで長さ39.5厘、幅22.0厘、厚さ9.6~11.5厘である。断面は矩形をなし、繩文遺跡に出土する石棒に類似している。

以上に記した岩偶、石棒等は類例の少ないもので、繩文式時代の後期、晩期の遺跡から岩偶の出土がまれにみられ、(注12)鹿児島県姶良郡福山町福山遺跡から出土した事があり、最近(注13)熊本県荒尾市境崎貝塚から岩偶の発見例があるが、これらはいずれも繩文式後期から晩期へかけての遺跡であつて、弥生式遺跡から、これらの遺物の出土した例はないようである。恐らく、これらの遺物は祭祀の際に靈力あるものとして用いられたものではなかろうか。前述した軽石盤に刻線を施し、或いは穴をうがつたもの等は、占筮等の用途に使用されたものかもしれない。

注12 山崎五十鈴「大隅国福山村石器時代遺跡より発見したる石偶について」考古学雑誌1016、大正九年

注13 三島格「肥後荒尾市境崎貝塚発見の岩偶」九州考古学7・8、一九五九

## 第四章 山ノ口遺跡の考察

今回の発掘地は一つのまとまつた遺構であるが、この遺構より北側約一〇メートルをへだてたA地点に今一つの今回発掘したものと同様な、或いはより大きな遺構があつた事が、昨年五月の砂鉄採掘の際の状況及び出土の遺物によつて推定される。

今回の遭難と昨年砂鉄採掘によつて消失した遭難とは、一つのより大きな遭難の一部なのか、或いは並立した各々独立の遭難なのかは、今後の調査によつてたしかめる外はないが、まずは今回採掘の遭難が如何なる意味をもつものであるかを考えてみよう。

B地点の遺構の成立した時期は、弥生式中期であろうと思われる。

次に遺構の性質に關係のある事項を擧げてみると、

1. 遺跡の位置が六根古の冲積低地の水田地帯及び、その西側に細長く延びる集落地帯の南端で山地が海岸にせまり、平地がせまくなつた所である。

2. 遺構の構造が環状配石の内部には、なにもなく、その外部に土器等の遺物が配置され、またこれらを取りまして、焼火の跡をとどめていることがある。

3. 遺物出土層は新鮮な砂層で、生活址らしい有機物の堆積がみられる。

1. 土器のうち謹形土器のみが、すべて故意に孔をあけてある。

5. 遺構成立後、相当長期間にわたって時日を経過しているにもかくわらず、遺構があらざれすに保存されたのは、立ち入つてはならぬ様な制約があつたのでと思われる。

6. 鋼石製の曲玉、鋼石葉に同様に受ける場合を配置してある。

以上のような諸点が挙げられるが、これらを総合して考るに、この遺構は農耕儀礼などの祭事が行われた場所で、当時の砂浜上に集落の共同の祭祀が行つてゐる遺跡にあらうと思つてゐる。

A 地点からは弥生式前期の土器と、中期の土器多量と、岩磯始め種々の軽石製品を出土し、中期の土器は今回発掘のもと、まったく同様の形式であることが、両遺跡は密接な関係をもつた、或いは同じ遺跡の一部に亘る二ヶ所が出土した。

## 遺物の観察

図版番号	図版番号	説明	出土地点と層位	出土状況	備考
図版二 33	図版七 4.	口縁部は厚く稍外反し、一条の凹線を有している。	昭和三十三年五月、山ノ口の砂鉄採集地より出土。	砂鉄層より出土。	肩部以下なし。
挿図五 3.	挿図五 2.	表面は研磨され、内面凹凸があり、所々刷毛目がみえる。雲母を含んでいる。	昭和三十四年一月、国分市・川内・口輪野のシラス洞窟より出土。	洞窟は二ヶ以上の文化層を有して居り、縄文晩期の黒川式も出土している。	
図版二 33	図版七 4.	小形壺である。口縁部は大きく外反し、腹部の張りがつよい。頸部は箇でけずつた跡があり、輪つきの手法が、よく目だっている。	昭和三十三年五月、山ノ口砂鉄採取地点より出土。	砂鉄層より出土。 下腹部にあけた孔を上面にして、斜めに横たおしの状況で出土したものと思われる。	孔を有す。

版図 八 14	図版 八 9	図版 八 10	図版 八 11	図版 八 12	図版 九 13	図版 一〇 30
挿図 五 7	挿図 五 12	挿図 五 5	挿図 五 9	挿図 五 8	挿図 五 4	挿図 五 6
長頸の平底壺型土器表面は研磨され 内面には刷毛目を有している。肩部 八、脣部一の凸帯をついている。底 部中央に径 $1.8\text{ cm}$ の孔をあけてある。 雲母を含む。	脣部の張った平底土器 頸部七、脣四の凸帯をついている。 頸部凸帯の上部に黒色塗料による線 がきがみられる。雲母を含む。土器 半面は紅褐色美麗である。箆みがき を施している。	脣部の張った平底土器 頸部七、脣四の凸帯をついている。 頸部凸帯の上部に黒色塗料による線 がきがみられる。雲母を含む。土器 半面は紅褐色美麗である。箆みがき を施している。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	第四トレンチ4区、砂 鉄層上 挿図四のNo.8 土器	第四トレンチ4区、砂 鉄層上 挿図四のNo.8 土器	第一トレンチ2区、砂 鉄層上より出土。 挿図四のNo.3 土器
表面研磨され、所々はげた部分があ り。内面は指あどがみられる。 器面には黒色の塗料が施されている。	口縁部は外反し、口唇部は外部に大 きな溝がある。脣部の張った平底の 土器、肩部六脣部四条の凸帯をつけ ている。	口縁部の内側へのはり出しが大きい。 表面研磨され、所々はげた部分があ り。内面は指あどがみられる。	第四トレンチ2区、砂 鉄層上 挿図四のNo.7 a 土器	第二トレンチ2区砂鉄 層上 挿図四のNo.3 b 土器	第一トレンチ7区、砂 鉄層上面より出土。 挿図四のNo.2 b 土器。	小型の壺である。器壁は稍々厚く、 指跡がよく残っている。雲母を含む。 底部は欠失しているが、器台を有し ていたものと思われる。
挿図 五 14	図版 八 11	図版 八 12	図版 八 13	図版 九 14	図版 一〇 31	図版 一〇 32
挿図 五 14	図版 八 11	図版 八 12	図版 八 13	図版 九 14	図版 一〇 31	図版 一〇 32
表面研磨され、所々はげた部分があ り。内面は指あどがみられる。 器面には黒色の塗料が施されている。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。

版図 八 14	図版 八 9	図版 八 10	図版 八 11	図版 八 12	図版 八 13	図版 九 14	図版 一〇 31	図版 一〇 32
挿図 五 7	挿図 五 12	挿図 五 5	挿図 五 9	挿図 五 8	挿図 五 4	挿図 五 11	挿図 五 12	挿図 五 13
長頸の平底壺型土器表面は研磨され 内面には刷毛目を有している。肩部 八、脣部一の凸帯をついている。底 部中央に径 $1.8\text{ cm}$ の孔をあけてある。 雲母を含む。	脣部の張った平底土器 頸部七、脣四の凸帯をついている。 頸部凸帯の上部に黒色塗料による線 がきがみられる。雲母を含む。土器 半面は紅褐色美麗である。箆みがき を施している。	脣部の張った平底土器 頸部七、脣四の凸帯をついている。 頸部凸帯の上部に黒色塗料による線 がきがみられる。雲母を含む。土器 半面は紅褐色美麗である。箆みがき を施している。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。
挿図 五 14	図版 八 11	図版 八 12	図版 八 13	図版 九 14	図版 一〇 31	図版 一〇 32	図版 一〇 33	図版 一〇 34
挿図 五 14	図版 八 11	図版 八 12	図版 八 13	図版 九 14	図版 一〇 31	図版 一〇 32	図版 一〇 33	図版 一〇 34
表面研磨され、所々はげた部分があ り。内面は指あどがみられる。 器面には黒色の塗料が施されている。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。	箆磨き、紅色を呈して丹塗の様な感 がある。凸帯は脱落した部分がみら れる。雲母を含む。

図版 7	図版 9 27	図版 8	図版 7 1	図版 7 35
挿図 10	挿図 6 28	挿図 6 11	挿図 6 15	挿図 6 16
広口の壺型土器 脊部に一条の凸帯を施す。雲母を含む。	平底、壺型土器	平底、壺型土器	鉢型土器	鉢型土器
やく頸の長い脇部の細い平底土器 雲母を含む。	口縁部はT字状、一部に刷毛目あり。 雲母を含む。	脇付鉢型土器 口縁部はT字状、一部に刷毛目あり。 雲母を含む。	脇付鉢型土器 口縁部はT字状、一部に刷毛目あり。 雲母を含む。	脇付鉢型土器 口縁部は少し外反している。底部は 欠失して不明 炭素付着
昭和三十三年五月、山ノ口 砂鉄採取地より出土。	昭和三十三年五月、山ノ口 砂鉄採取地より出土。	昭和三十三年五月、山ノ口 砂鉄採取地より出土。	昭和三十五年五月山ノ口 砂鉄採取地より出土。	昭和三十三年五月、山ノ 砂鉄採取地より出土。
砂鉄層より出土。孔を上位にして出 土。	砂鉄層より出土。孔を上位にして出 土。	砂鉄層より出土。孔を上位にして出 土。	砂鉄層より出土。孔を上位にして出 土。	砂鉄の深層で地表下三米位の深さか ら出土した。
孔を有す。 (3×3.6 cm)	孔を有す。 (5×4 cm)	孔を有す。	孔を有す。	

図版 9 18	図版 8 16	図版 9 15	図版 9 21	図版 7 6
挿図 6 19	挿図 6 24	挿図 6 23	挿図 6	図版 9 27
脇付壺型土器 頸部に凸帯一条、口縁部のつぎ目が 明晰。外面は全面に刷毛を施す。雲 母を含む。	平底鉢型土器 形頸部に凸帯を一条めぐらしている。 全面に刷毛目あり、雲母を含む。	脇付鉢型土器 口縁部は内側へ少しほり出している。 内外面に刷毛目が部分的に施されて いる。	脇付壺型土器 口縁部はT字状、一部に刷毛目あり。 雲母を含む。	やく頸の長い脇部の細い平底土器 雲母を含む。
第四トレンチ3~4区 砂鉄層上。	第一トレンチ6区砂 鉄層上。	第二トレンチ1~2区 砂鉄層上。	第三トレンチ1~2区 砂鉄層上。	昭和三十二年五月、山ノ 砂鉄採取地より出土。
No.8 a 土器	No.5 土器	挿図四の No.3 a 土器	挿図四の No.3 a 土器	不 明
長頸、壺型土器と伴出。(西側) 横位、口を西に向けて出土。 全面に炭素付着。	壺型土器と伴出(南側)斜位にて出 土。当時2/3以下が埋没していたも のである。付着していた炭素は露 出面だけはげている。	壺型土器と伴出(南側)横位、口を 西に向けて出土。附近に石鱗数箇出 土。半面に炭素が付着して出土。	壺型土器と伴出(南側)斜位にて出 土。当時2/3以下が埋没していたも のである。付着していた炭素は露 出面だけはげている。	孔を有す。 (下腹に二ヶ所)

図版 32	図版 九 20	図版 九 17	図版 九 19	図版 九 22
挿図	挿図 六 21	挿図 六 18	挿図 六 26	挿図 六 22
六 14	台付臺型土器 口縁部稍々内側へ張り出す。頸部凸 帶三条刷毛目を施す。雲母を含む。	台付臺型土器 頸部凸帯は三条。雲母を含む。	台付、甕型土器 頸部に凸帯二条。全面に刷毛目を施 す。雲母を含む。	台付、甕型土器 頸部に凸帯三条。口縁部は内側へ張 り出している。刷毛目が施されてい る。
小形台付鉢形土器 脚部は中空である。頸部に二条の凸 帶を施す。雲母を含む。	昭和三十三年五月、山ノ 口砂礫採取地より出土。	第四トレンチ 2-3 区 砂鉄層上 挿図四の No.6 土器	第一トレンチ 3 区、砂 鉄層上 挿図四の No.4 土器	第一トレンチ 7 区、砂 鉄層上 挿図四の No.2 a 土器
不 明	不 明	横位。 炭素半面に付着。	横位。口を西に向けて出土。 炭素半面に付着。	横位。口を西南向きに出土。酸化鉄及び火 山灰が固着し、底部は胸部中にかん 入していた。炭素は約 $1\frac{1}{3}$ の面に付 着、破片には土器裏面まで酸化鉄付

図版 28 挿図 29	形 鉢形土器 底部は厚く器台付土器に近い。刷毛目を内外に施す。	態 把手付無頸土器 た土でつくられている。外面は丹塗 し、縦に一定間隔をもつて研磨され た縦を施し下部 $\frac{1}{5}$ 以下は密接した 横線研磨を行つてある。雲母を含む。	出土地点と層位 昭和三十三年五月、山ノ口砂鉄採取地より出土。	明 不 明	昭和三十三年五月、山ノ口砂鉄採取地より出土。	明 不 明	孔を有す。 下方より $\frac{1}{4}$ の箇所に小孔をあく。
----------------	---------------------------------------	--	-----------------------------------	-------------	------------------------	-------------	---

## 土器以外の遺物

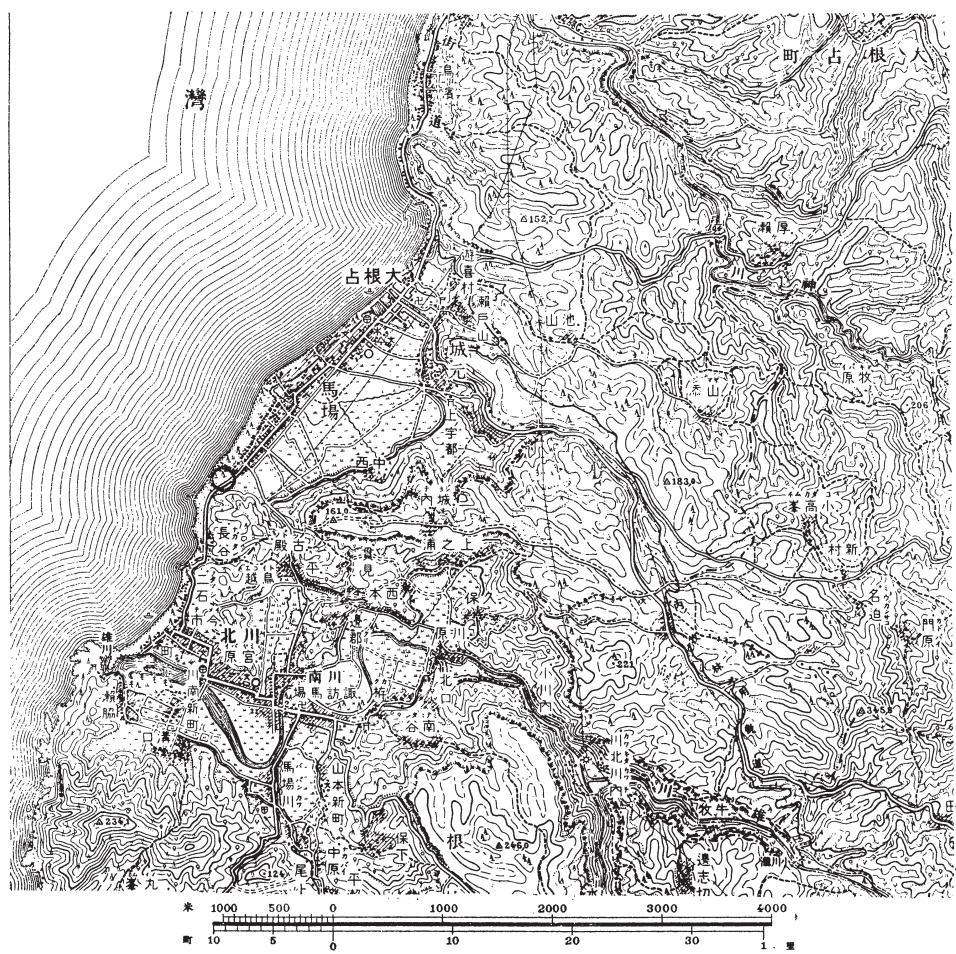
図版 A 二	形 軽石製、岩偶 高さ二七cm、幅一四cm、厚さ九cm 頭部は二条の縁を刻み、頭髪を結束した状を示す様である。顔面を刻み出し、掘りくぼめて目と口をあらわす。頭部はえぐつて体部との境が明瞭である。体部は胸に突起をつくり、乳房をあらわし、他は省略され、下底部は径二厘、深さ四厘の穴を有している。	態 軽石製、岩偶 高さ二七cm、幅一八cm、厚さ一〇cm、 体部断面は菱形。 頭部は両耳の部分孔をあけ、顔面は区画し、目と口はほりくぼめ、鼻は隆起している。頭部はえぐられて体部との境をなし、体部は省略されている。	出土地点と層位 昭和三十三年五月 山ノ口砂鉄採取地より 出土。	出土状況 現在発掘地北側の砂鉄採取地中、約二米の大石附近より出土。	備考 鹿児島県姶良郡福山町福山中学校敷地より縄文後期と思われる遺跡から出土した軽石製の人形らしいものが出土したことがある。
図版 B 二	軽石製、岩偶 高さ二七cm、幅一八cm、厚さ一〇cm、 体部断面は菱形。 頭部は両耳の部分孔をあけ、顔面は区画し、目と口はほりくぼめ、鼻は隆起している。頭部はえぐられて体部との境をなし、体部は省略されている。	軽石製、岩偶 高さ二七cm、幅一八cm、厚さ一〇cm、 体部断面は菱形。 頭部は両耳の部分孔をあけ、顔面は区画し、目と口はほりくぼめ、鼻は隆起している。頭部はえぐられて体部との境をなし、体部は省略されている。	昭和三十三年五月 山ノ口砂鉄採取地より 出土。	現在発掘地北側の砂鉄採取地より 出土。	

(挿図七 1~5) 図版三 B	磨製石鏃 粘板岩製 下段五箇 最大長さ六・一cm、幅二・二cm、厚さ 三mm、最小長さ三・一cm、幅一・三cm、 厚さ二・五mm右より一番目は着表 のためか?溝をもつてゐる。 $\text{1.2} \times 0.5 \text{ cm}$	上段五箇 最大長さ六・一cm 幅一・六cm、厚さ一・九mm 最小長さ四・六cm、幅一・五cm、 厚さ一・四mm尖端の欠けたものは片面 に着表の溝がある。	第四トレンチ4区砂鉄層 層	No.8 b 土器の下敷となつた土器を除いた 直下に出土した。(竹籠で一度かいた 時)右より三番目の石鏃出土。続いて 同土器を中心にして最大一mの範囲に 四箇出土した。
-----------------	---	---	------------------	---

図版二 C	(挿図A,B,C) 図版二 B	軽石製曲玉 右上長さ六cm 孔は両側よりあけてある。 丹塗のあとあり。 左上長さ四・七cm 丹塗 右下長さ六cm 丹塗	第一トレンチ 8区砂鉄層 第三トレンチ 砂鉄層中 4区附近 砂鉄層中	No.1 a 土器附近に同土器の破片と共に最 小の石鏃出土し、この附近に砂鉄層中 よりまとめて五箇出土、一箇は砂層 中に混じて紛失した。
A	打製石斧 長さ二三・五cm 粘板岩製	昭和三十三年五月 出土。山ノ口砂鉄採取地より	現在発掘地北隣	縄文期の石棒に類似
三	出土。	不 明	農耕具として使用され たものと思われる。	

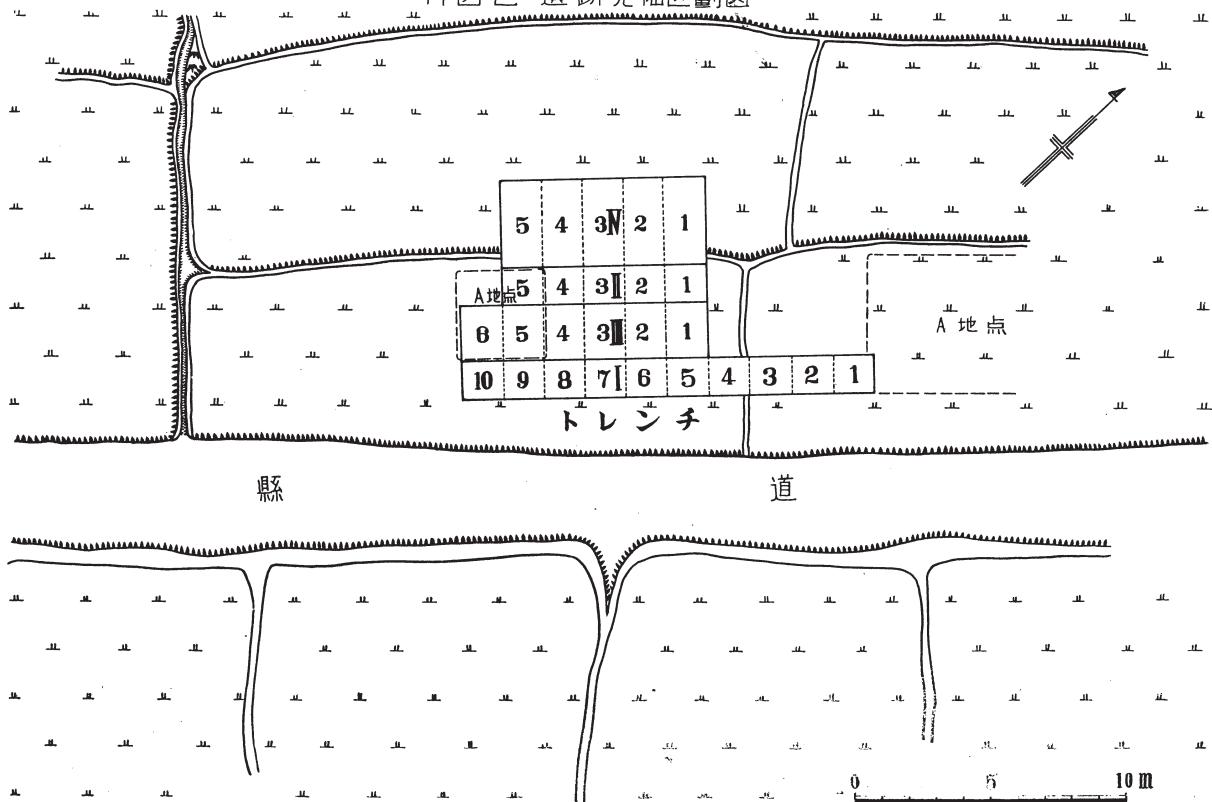
## B 地点出土土器器一覽表

図版番号	插図番号	出土記号	器形	方位	口位	胸底	高	孔の位置大きさ	出土状況	肩部	帶	胸部	条痕	雲母	特長		
cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm
9	12	No.1B	壺	S E32°	24.5	26.7	cm	下 $\frac{Y_3}{3}$ cm 3.5×2.5 縦長	横倒	7条	4条	額部に少しあり	○	表面研磨(微磨)半分強が少し磨耗、上面位破損多し、口の内面で突起	○	表面研磨(微磨)半分強が少し磨耗、上面位破損多し、口の内面で突起	
30	6	No.2B	壺	W S 42°	7.6	10.9	cm	下 $\frac{Y_3}{3}$ cm 1×1.5 円形	斜位	3条	なし	なし	○	器壁稍々厚く指跡内面にのこる。底部を欠く	○	器壁稍々厚く完全、3位が斜に露出していたもの、その部分磨滅、孔の破片内に存す	
13	4	No.3B	壺	W S 8°	16.6	22.0	6.6	下 $\frac{Y_3}{3}$ cm 4×4 円形	斜位	なし	なし	額部に少しあり	○	器壁厚く完全、3位が斜に露出していたもの、その部分磨滅、孔の破片内に存す	○	器壁厚く完全、3位が斜に露出していたもの、その部分磨滅、孔の破片内に存す	
14	7	No.5B	壺	E S 49°	7.5	20.8	5.6	29.2	下底	8条	1条	額部に少しあり	○	質密、頸部内面に指痕、表面鏡磨き、紅味帶びた褐色、半分磨滅	○	質密、頸部内面に指痕、表面鏡磨き、紅味帶びた褐色、半分磨滅	
12	8	No.7A	壺	E S 16°	18.0	27.6	7.0	34.9	下 $\frac{Y_3}{3}$ cm 2×2.8 縦長	横倒	なし	なし	口縁内側にまるく張り出す、表面研磨、表面剝ぐ、黒色塗料、内面あらく、指痕 $\times$ 層より上面少し出していた	○	口縁内側にまるく張り出す、表面研磨、表面剝ぐ、黒色塗料、内面あらく、指痕 $\times$ 層より上面少し出していた		
10	5	No.8B	壺	S E 30°	27.9	22.2	6.1	39.5	横 $\frac{Y_3}{3}$ cm 1×x 橫長	横倒	7条	4条	な	○	部分は紅褐色美麗、鏡磨、半面磨滅、色くすむ、頸部凸帯上下に黒苔線あり	○	部分は紅褐色美麗、鏡磨、半面磨滅、色くすむ、頸部凸帯上下に黒苔線あり
11	9	No.8C	壺	NW 82°	22.9	29.0	7.4	38.5	上 $\frac{Y_3}{3}$ cm 1.8×14 橫長	横倒	6条	4条	頸部にあらいはけめ	○	頸部以上を一部欠失、紅色、研磨丹塗の如し、頸部凸帯一部脱落	○	頸部以上を一部欠失、紅色、研磨丹塗の如し、頸部凸帯一部脱落
15	24	No.1A	甕	W S 37°	35.0		7.2	32.4		横倒	1条	凸帯以下、全面はけめ	○	全面に炭素、焼成良好、口縁内側に張り出す	○	全面に炭素、焼成良好、口縁内側に張り出す	
22	22	No.2A	甕	W S 20°	22.4	20.6	7.4	25.0		横倒	3条	表面、内面一部	○	脚部は縫中にかん入、上面酸化鐵分溶着、炭素付着	○	脚部は縫中にかん入、上面酸化鐵分溶着、炭素付着	
21	23	No.3A	甕	NW 80°	20.5		7.6	20.5		斜位	1条	額部に擦痕	○	33が炭素付着、内面底にこげつき	○	33が炭素付着、内面底にこげつき	
19	26	No.4A	甕	NW 52°	26.3	23.7	7.7	28.3		横倒	2条	表面条痕、口上面	○	約半分炭素付着、内面底こげつき	○	約半分炭素付着、内面底こげつき	
18	25	No.5A	甕	W S 10°	22.4	21.2	6.6	26.4		横倒	1条	表面条痕	○	口縁内外つぎ目あり、半面炭素、半面磨滅	○	口縁内外つぎ目あり、半面炭素、半面磨滅	
17	18	No.6A	甕	W S 26°	27.1	24.4	8.2	28.6		横倒	3条	な	○	略半面炭素、半面磨滅、口縁付着のあとあり、出土状況上面破損散乱	○	略半面炭素、半面磨滅、口縁付着のあとあり、出土状況上面破損散乱	
20	21	No.7B	甕	W S 28°	21.4	19.7	7.5	24.4		横倒	3条	表面刷毛目、口面少し	○	口縁付着のあとあり、破片出土後相離れた際所より大部分出土、半分炭素	○	口縁付着のあとあり、破片出土後相離れた際所より大部分出土、半分炭素	
16	19	No.8A	甕	W S 30°	32.8	29.1	9.3	30.8		斜位	3条	表面条痕	○	約半分炭素、割口稍大、内面こげつき	○	約半分炭素、割口稍大、内面こげつき	

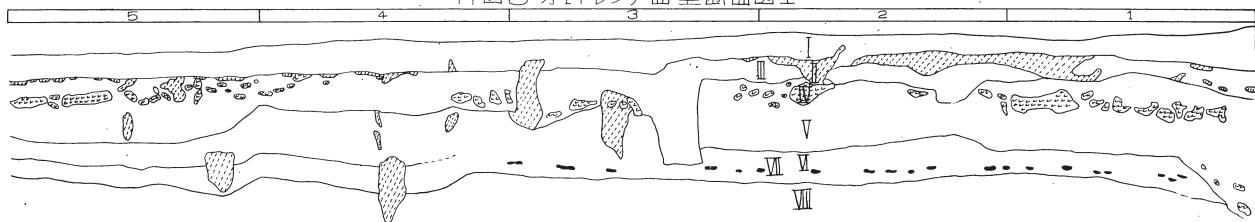


挿図 1. 遺跡附近地形図

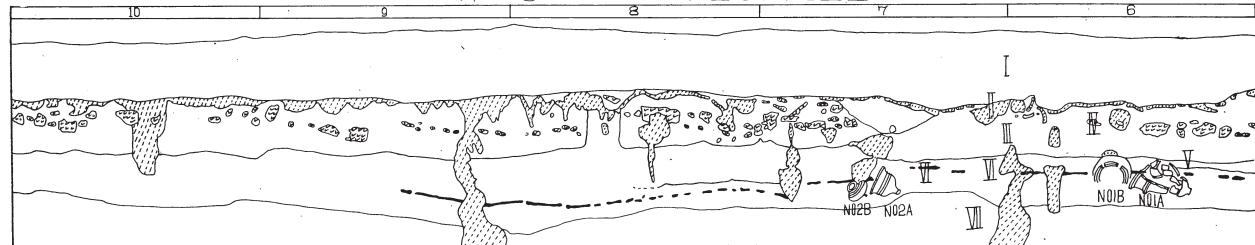
挿図2 遺跡発掘区割図



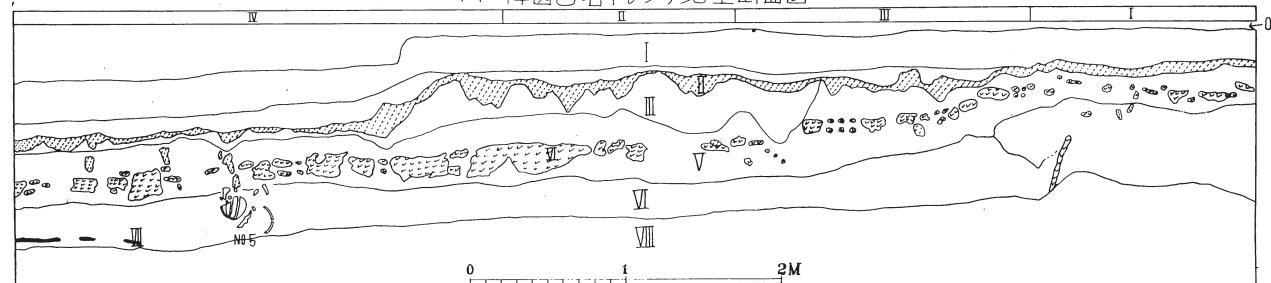
挿図3 オ1トレシチ西壁断面図1



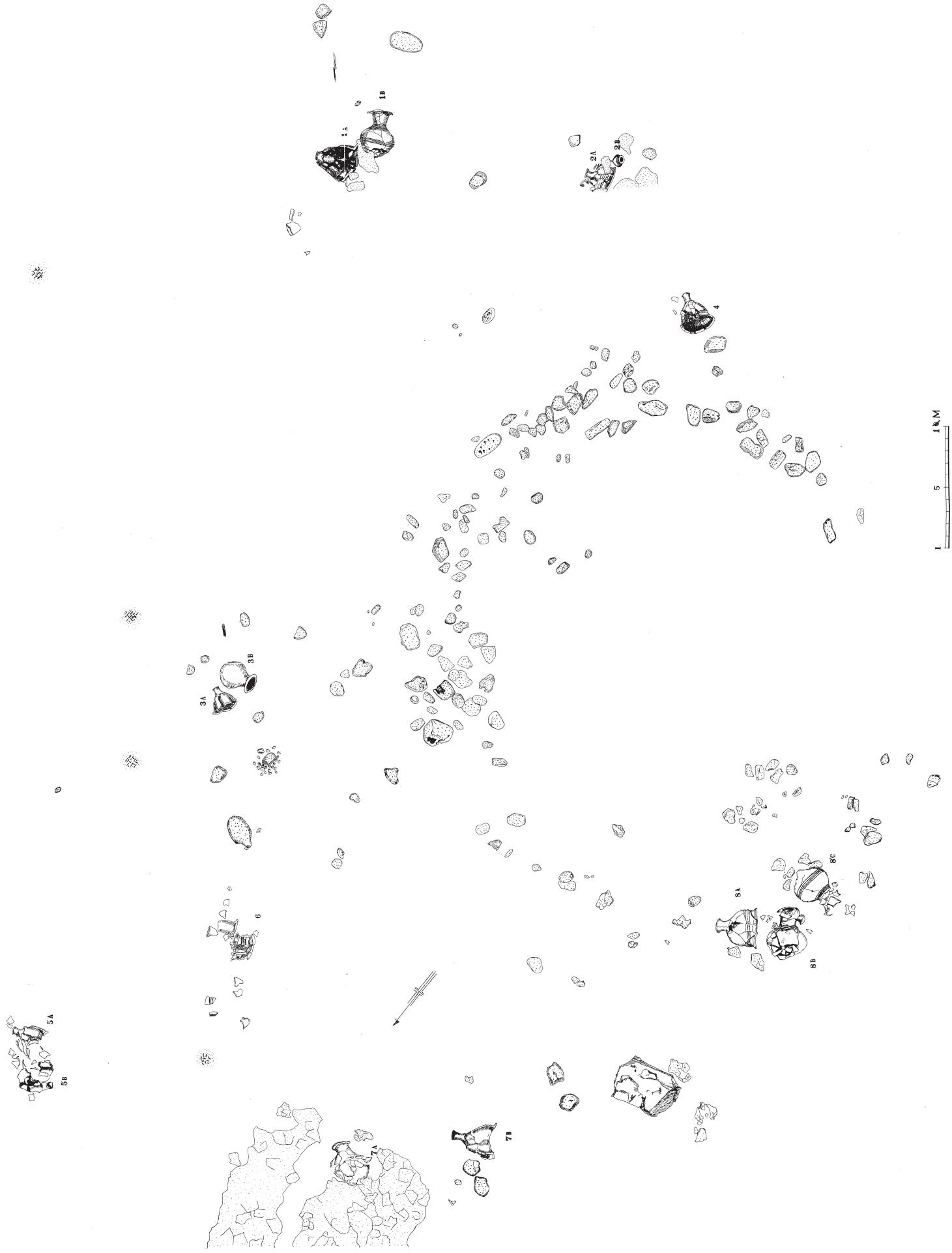
挿図3 オ1トレシチ西壁断面図2

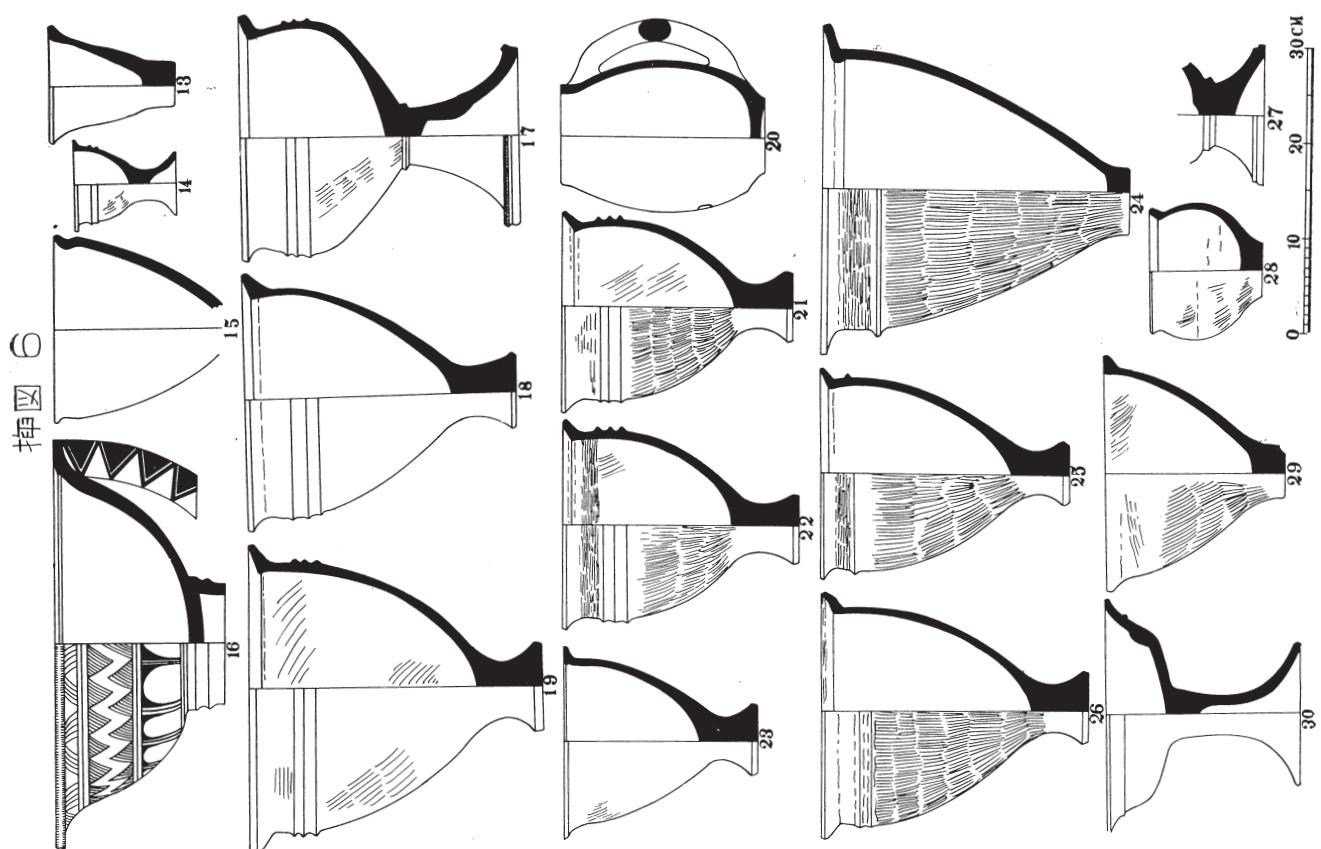
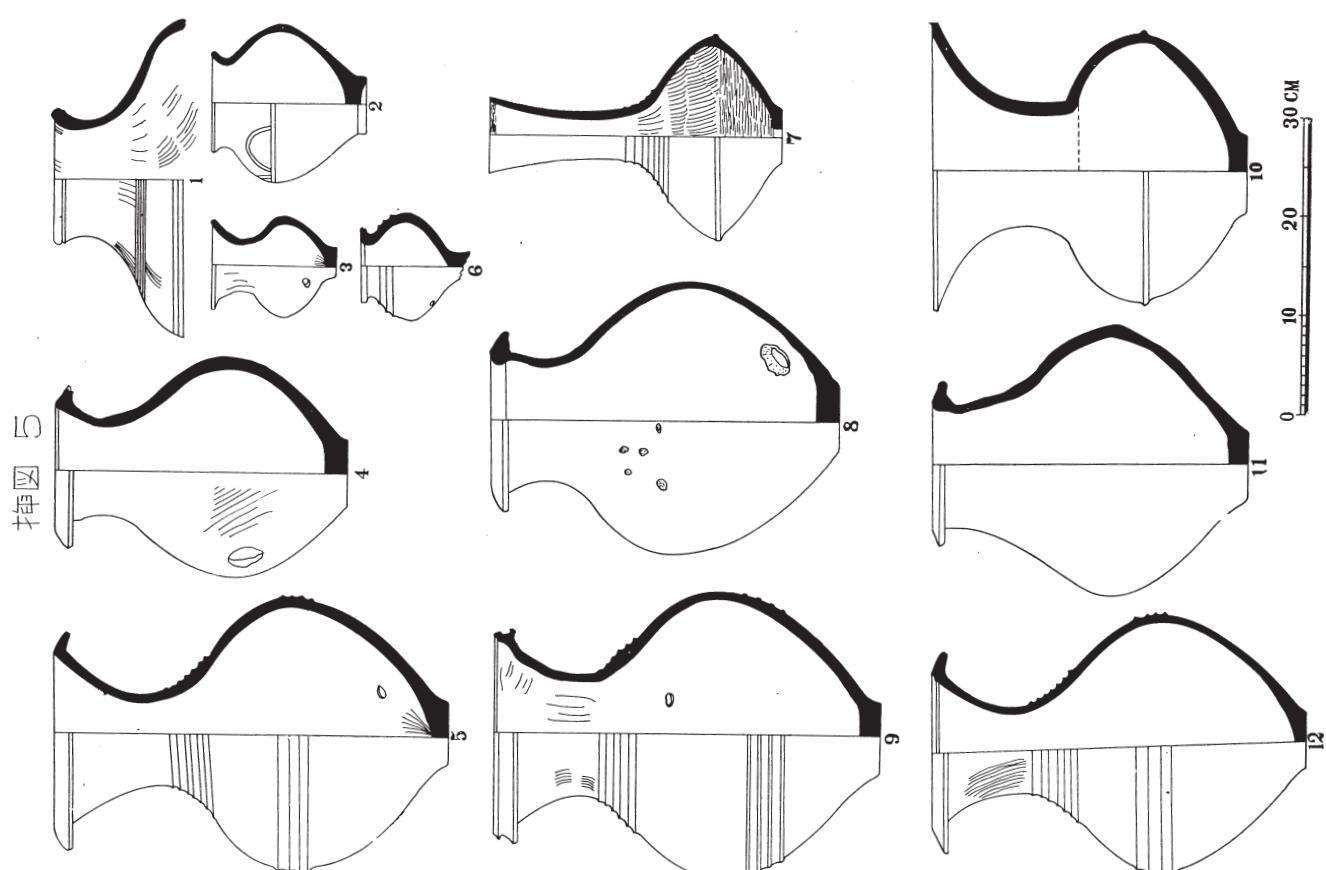


挿図3 各トレシチ北壁断面図

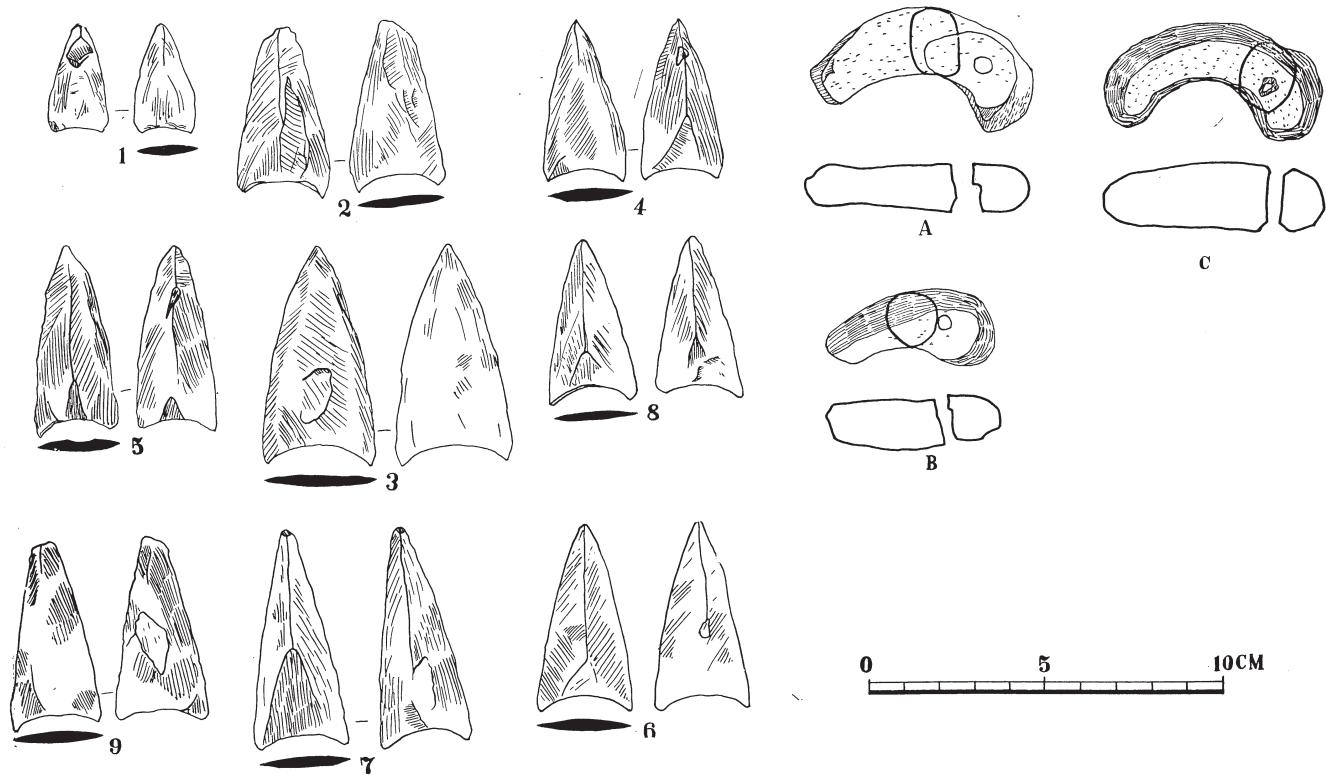


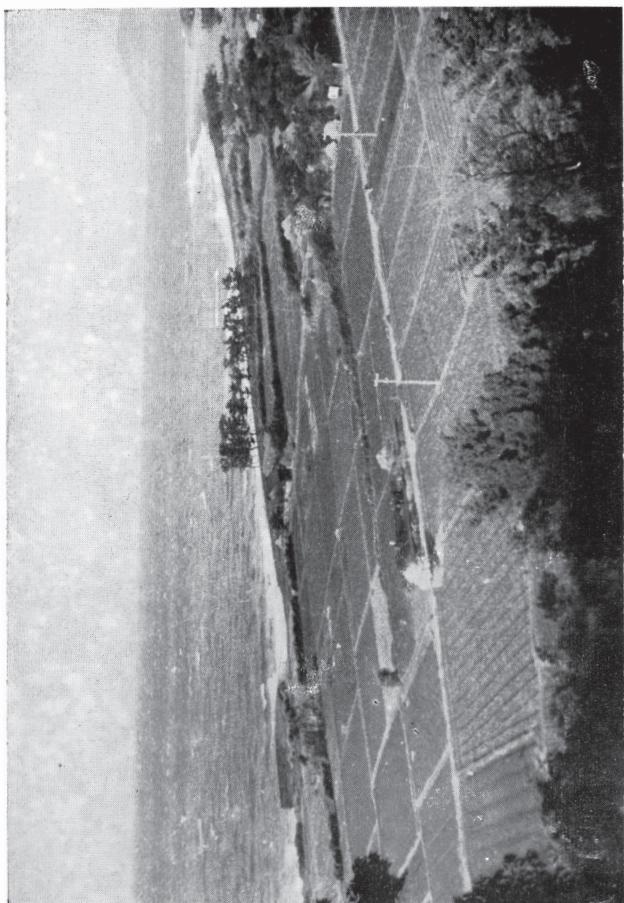
I 表層 II 酸化鉄富化層 III 褐色土層 IV 火山灰堆積層 V 黄褐色土層 VI 褐色砂層 VII 火山灰堆積層(コラ層) VIII 砂鉄層



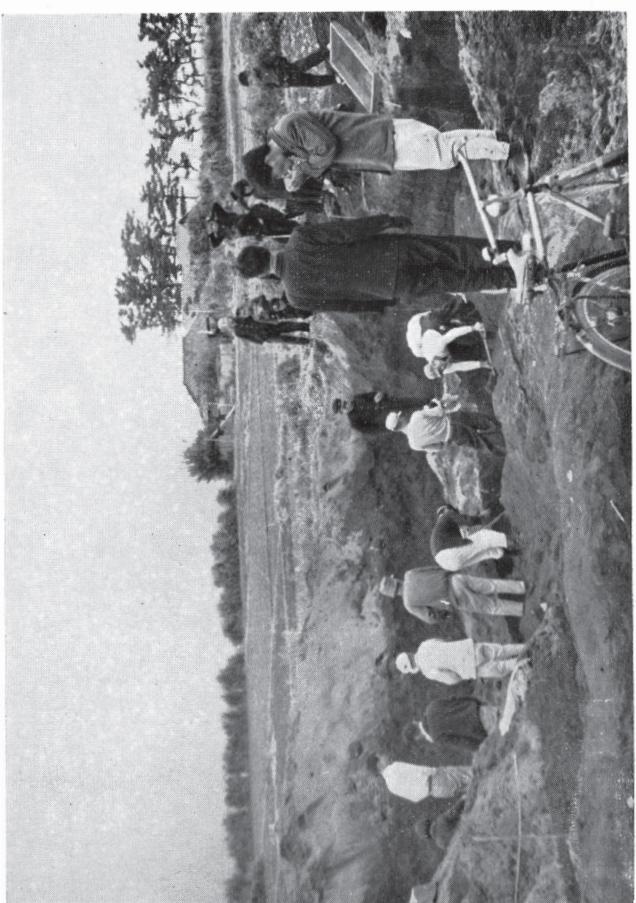


插圖七 石鏃·曲玉

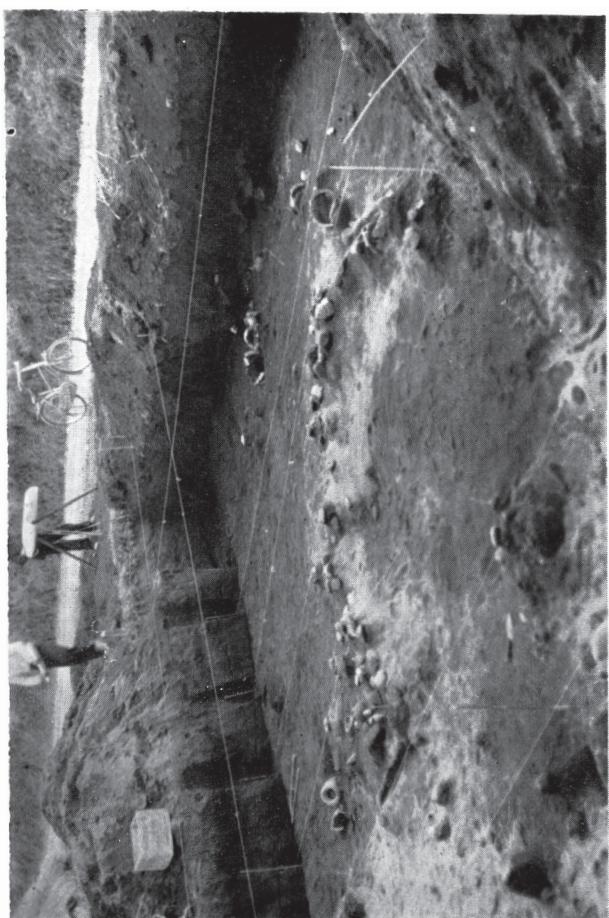




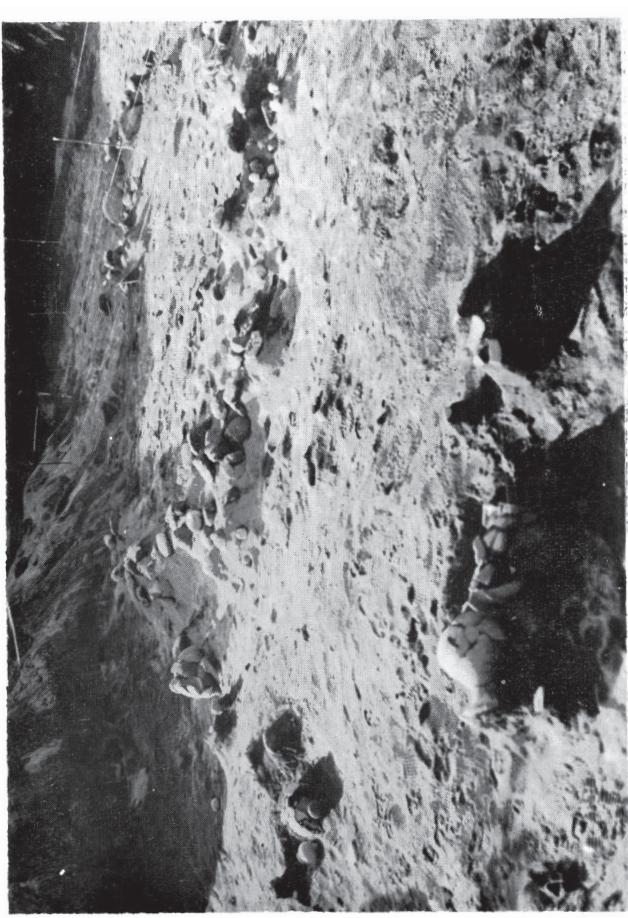
a. 遺跡全景



b. 掘状況



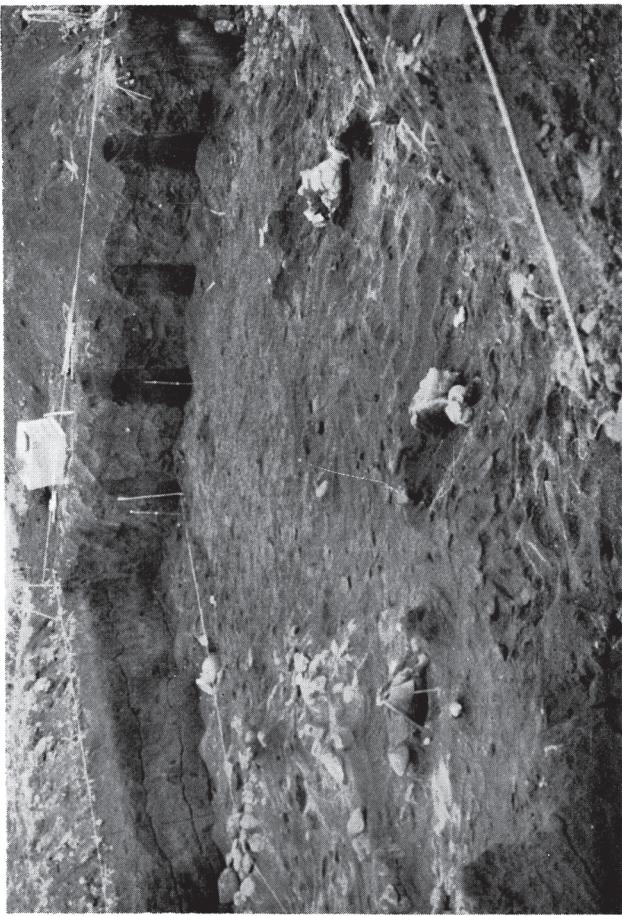
a. 発掘全景(西侧より)



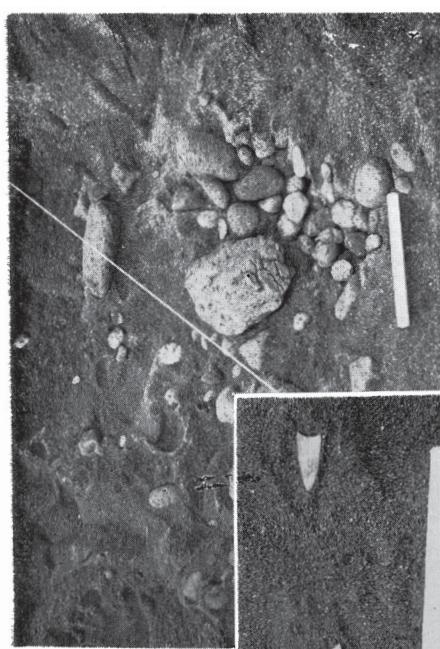
b. 発掘全景(東側より)



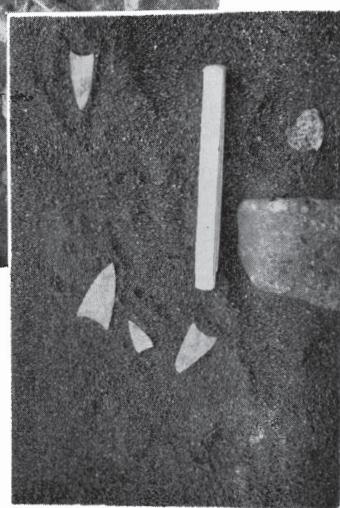
a. 番 挖 金 景 (北側より)



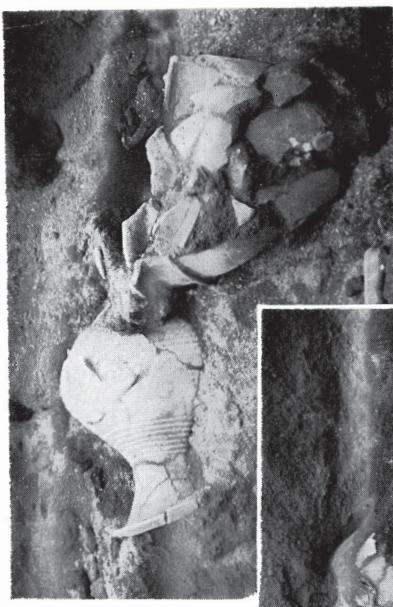
b. 遺 物 出 土 状 況 (南側より)



a. 軽石加工品出土状況



b. 石器出土状況 (No.8附近)



c. 出土状況 (No.1a,b)



d. 出土状況 (No.2a,b)

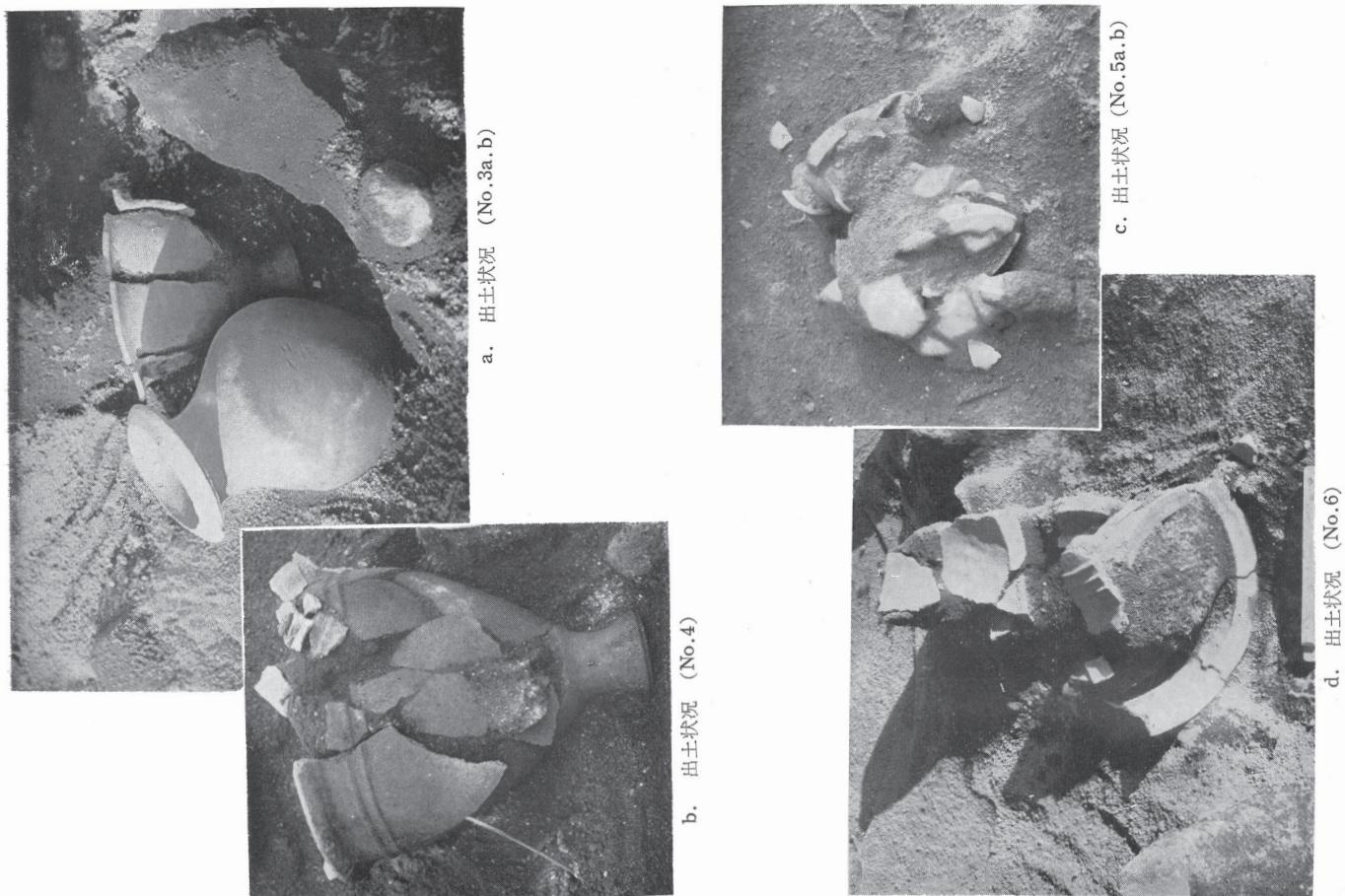


圖 版 五

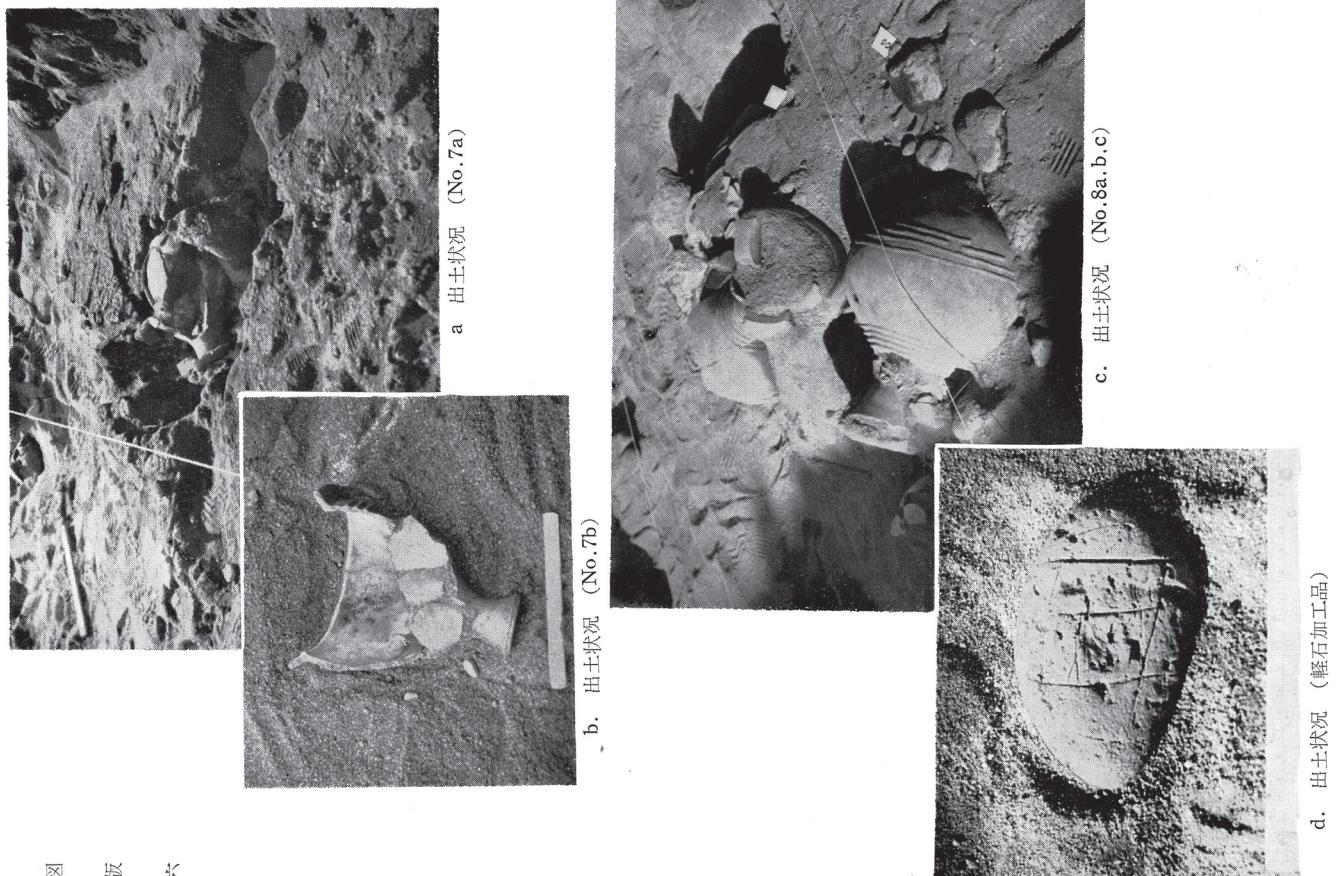
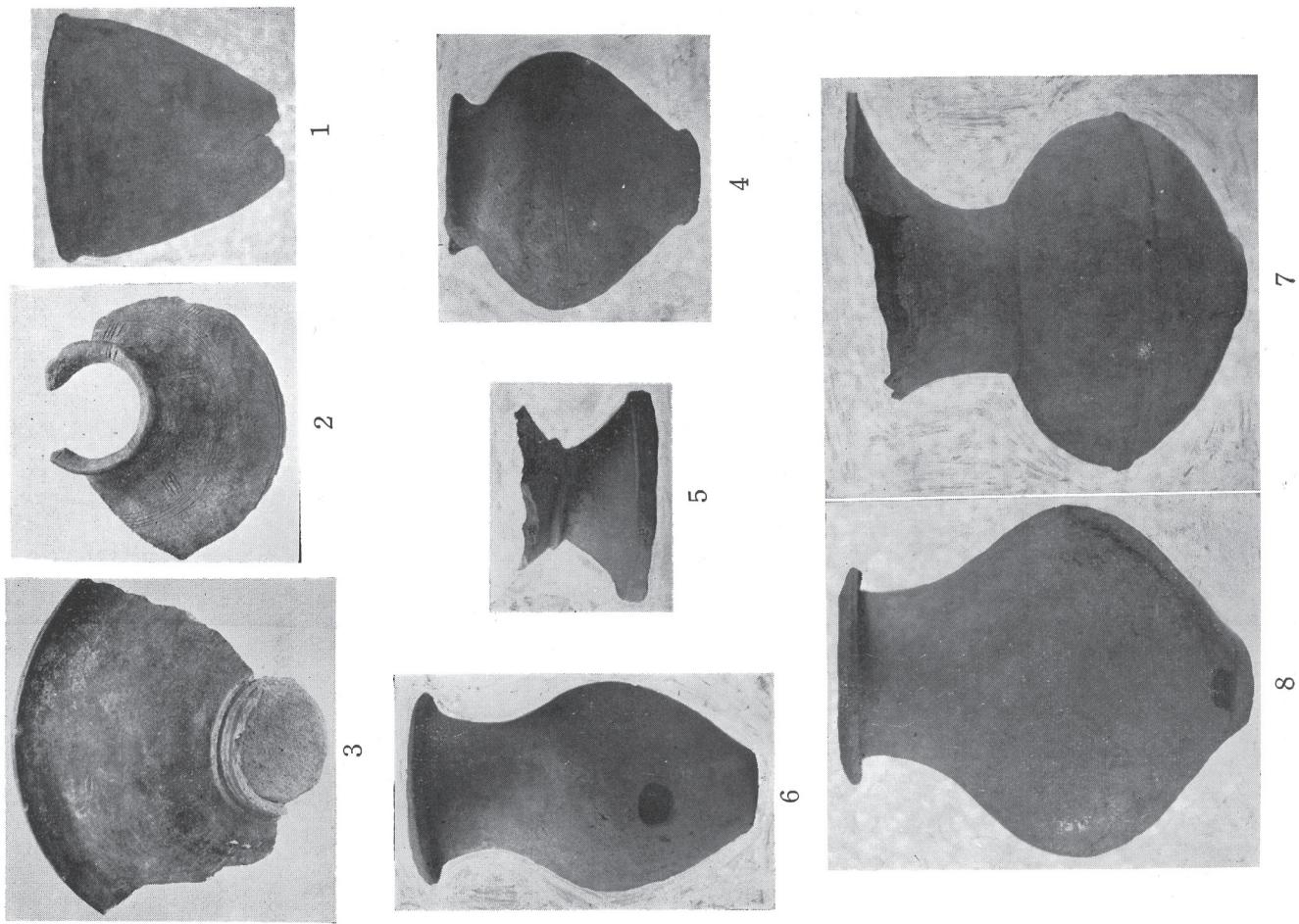
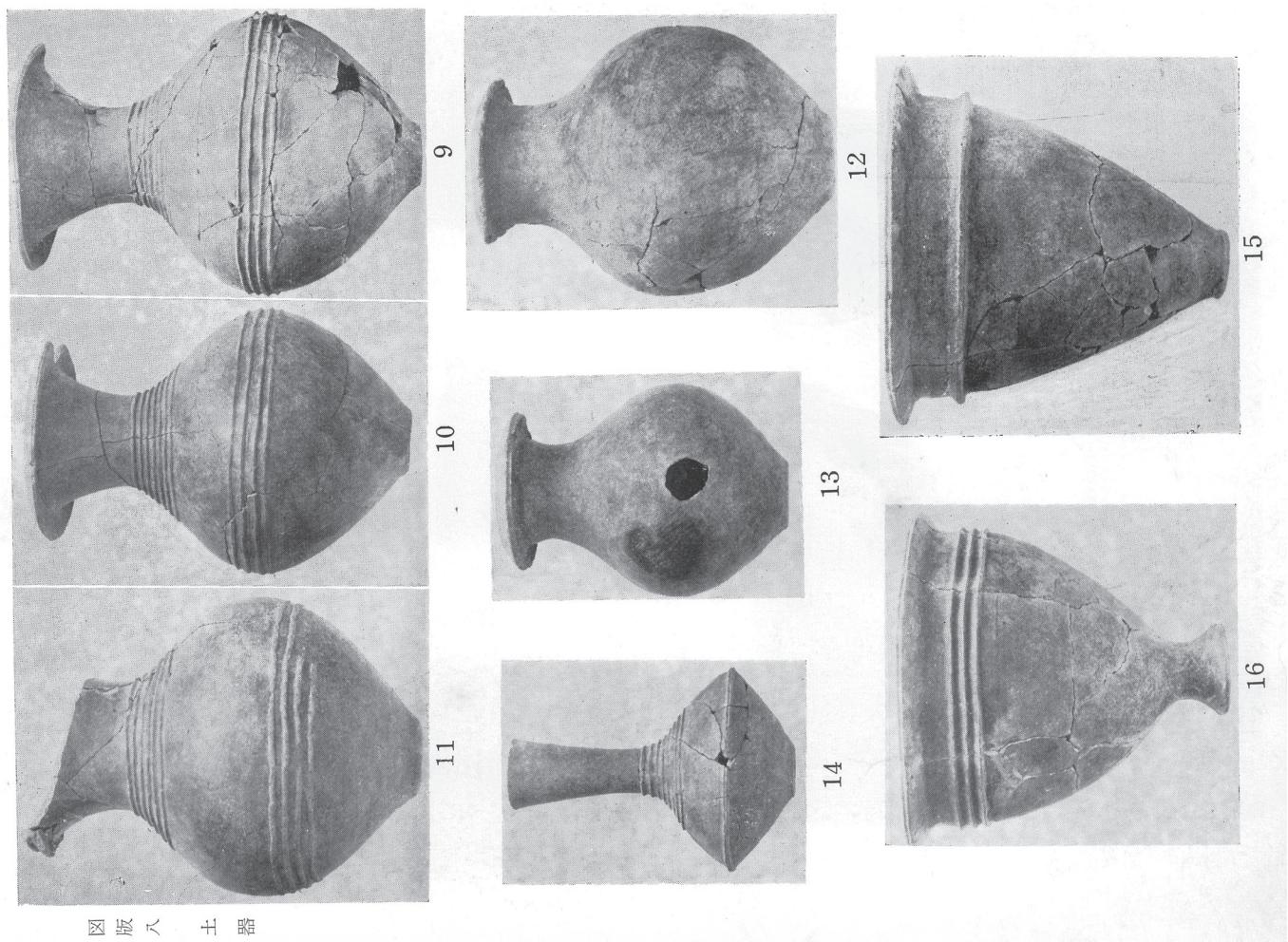


圖 版 六



図版七 土器



図版八 土器